灘崎町埋蔵文化財発掘調査報告１

左古谷遺跡

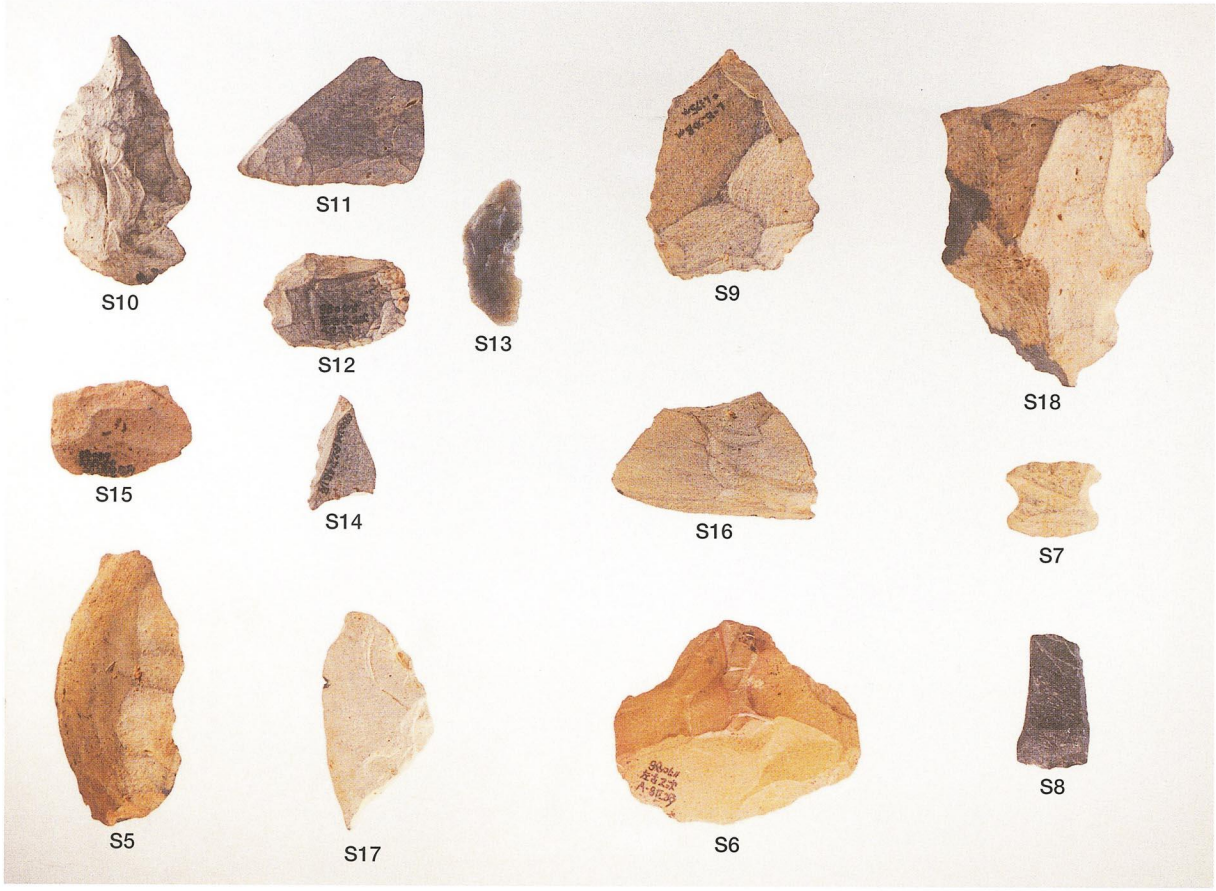
２００１年３月

岡山県灘崎町教育委員会

１．貝塚２（北西より）

２．貝塚２出土炭化米（右は現在のアケボノ米）１目盛り0.5mm

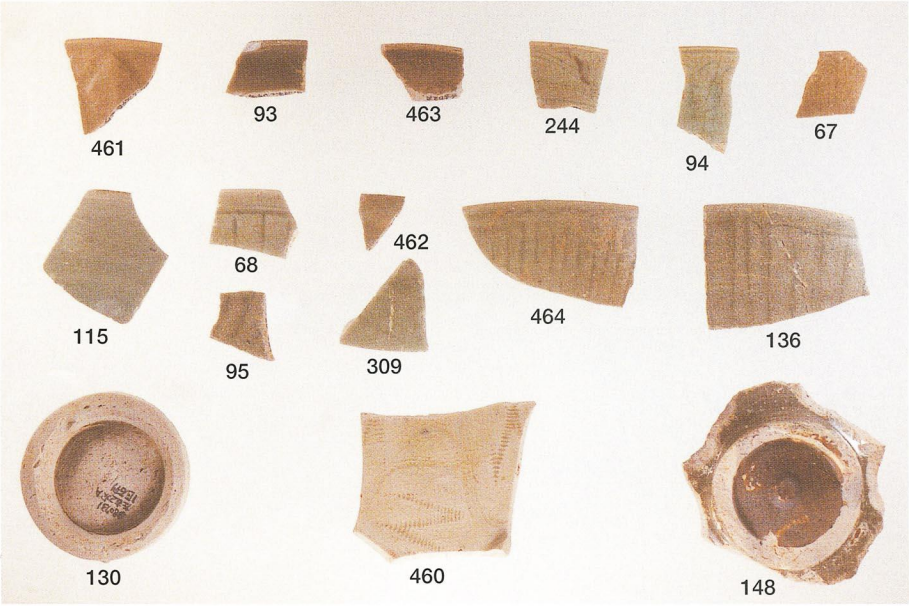
巻頭図版 2



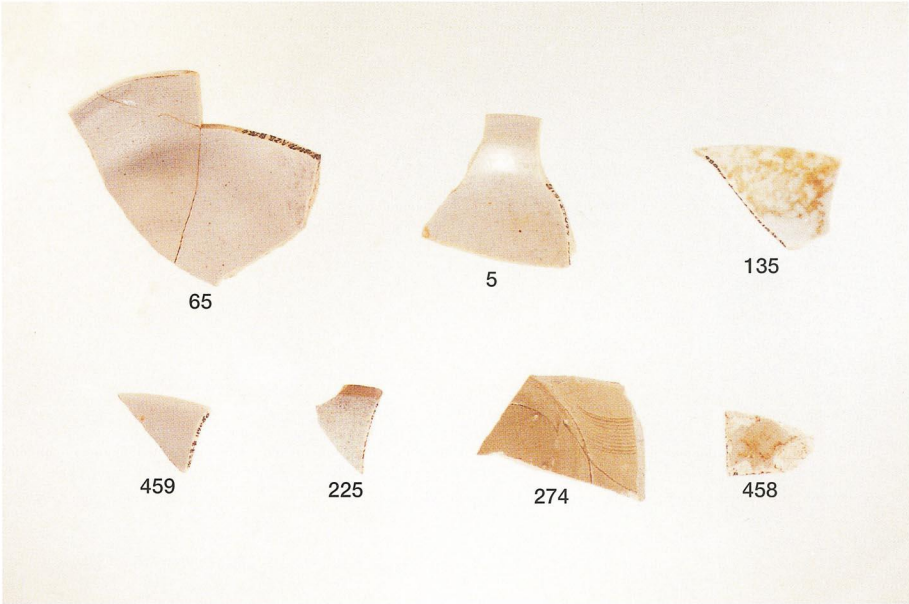
1．左古谷遺跡出土石器類

2．竪穴住居 1 出土深鉢形土器

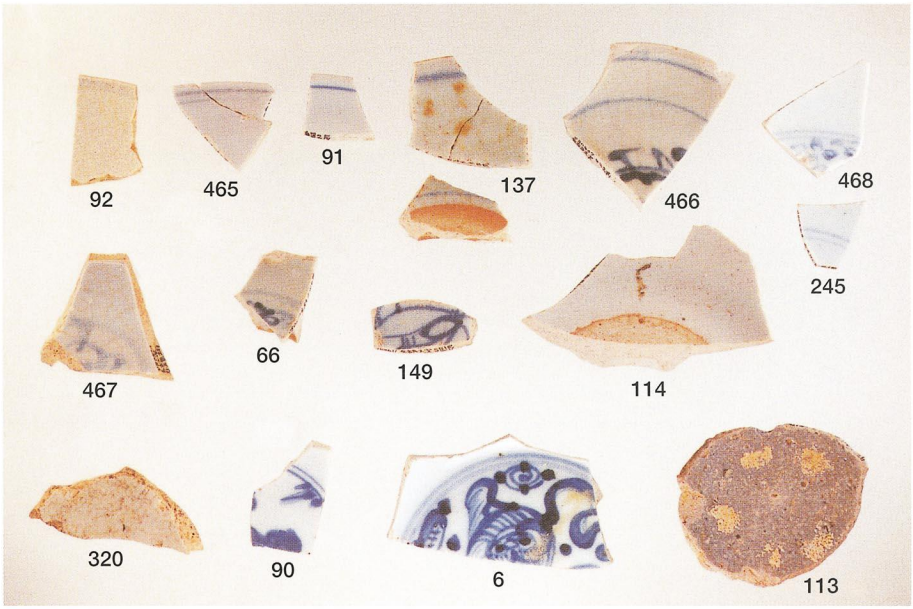
3．偏平五輪塔形泥塔



1．青磁



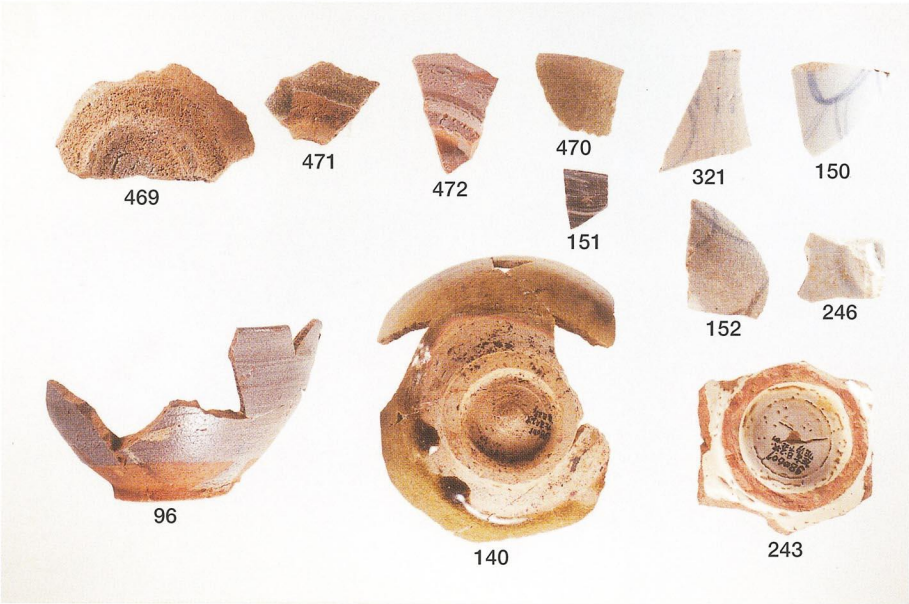
2．白磁



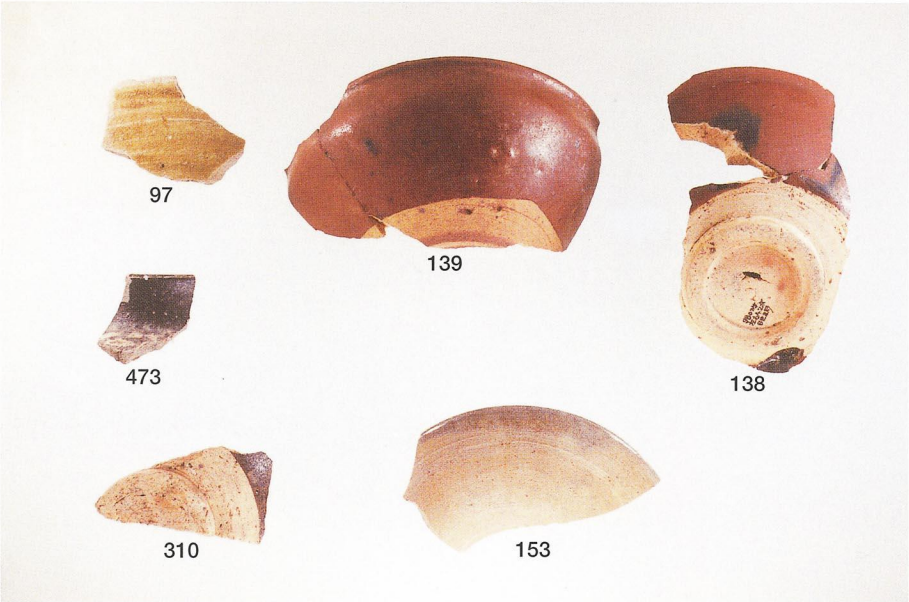
3．染付・李朝

左古谷遺跡出土輸入陶磁器

巻頭図版 4



1．肥前陶磁



2．瀬戸・美濃・京焼系

左古谷遺跡出土国産陶磁器

序

灘崎町は、岡山平野の南部に位置し、古来より有名な吉備の児島の一角と児島湾の干拓によってできた肥沃な農地から形成されています。

背後には児島の山々が連なり、かつては20余りの島を点在させ「吉備の穴海」と呼ばれた美しい海が広がり、海の幸、山の幸が豊富であったことを古くは縄文時代前期の彦崎貝塚の出土品等で知ることができます。

近年、本町は岡山・倉敷・玉野の三市に隣接する利便性から交通網や住環境が整備され、ますます活気のある「まちづくり」が進んでいます。

こうした中、本町彦崎地区において民間による大規模住宅団地造成の計画が浮上いたしました。計画予定地内には周知の埋蔵文化財包蔵地が存在していることからその保護・保存について原因者側と協議を重ねてまいりましたが、遺跡の現状保存が困難となり、やむを得ず一部を除いた記録保存の措置を講ずることになりました。

この左古谷遺跡の調査は、本町が実施した初めての発掘調査であり、彦崎貝塚の調査以来約50年ぶりであります。

調査の結果、6世紀後半の竪穴住居址や土壙からは製塩土器等が出土し、中世の貝塚等からは多くの日常土器とともに輸入・国産陶磁器が出土しました。海を媒体とした生活や他地域との交流をしていたことがわかりました。また、貝塚からは炭化米や種子等も検出されており、当時の生態系などを知るうえでの重要な資料となりました。さらに、後期旧石器時代の石器類が出土し、彦崎貝塚人以前に本町に人間が生活していたことが判明しました。まさに本町の歴史の空白期を埋めるに足る大きな成果を得ることができました。

こうした文化財は本町にとって貴重な財産であり、その保護・保存は教育委員会の重要な責務の一つではありますが、全国的に開発によって破壊を余儀なくされた遺跡は数多くあるように、本遺跡も例外ではなく、記録保存という措置を講ずることになりました。

ここに、ささやかではありますが、報告書を作成・公表し、また出土品については灘崎町歴史文化資料館において展示・公開して町民の皆様に文化財についての認識を一層深めていただくことにしています。

また、この報告書が今後の文化財の保護・保存・活用に広く利用され、調査機関や各研究方面でその一助となれば幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書作成に至るまでに実に多くの方々の御指導と御協力を賜りましたことに深甚の謝意を表し、厚くお礼申し上げます。

平成13年3月31日

灘崎町教育委員会

教育長　古家野　晃

例　言

1．本書は、岡山県児島郡灘崎町彦崎地内に所在する左古谷遺跡の発掘調査報告書である。
2．左古谷遺跡は岡山県児島郡灘崎町大字彦崎字左古谷、ソフコソ3039番地ほかに所在する。
3．発掘調査は、ウエストヒルズのだ（当時）造成に伴うもので、株式会社セント住建の委託を受けて、灘崎町教育委員会が平成８・９・10年度に確認調査及び発掘調査、平成10・11・12年度に整理・報告書作成作業を実施した。
4．調査に要した直接的経費は、原因者である株式会社セント住建が負担したが、平成12年7月に原因者が倒産したため当該年度分は町費で負担した。
5．発掘調査及び本書の執筆・編集は、灘崎町教育委員会社会教育課学芸員　田嶋正憲が担当した。また、遺物の写真撮影は、ライティング機材一式と実体顕微鏡を岡山理科大学より借用し、岡山理科大学理学部富岡直人先生の指導・助言を得て田嶋が行った。
6．特殊な遺物の自然科学分野における鑑定・分析を下記の諸氏・機関に依頼した。有益な御教示及びそのいくつかについては報告文をいただいた。記して、厚くお礼申し上げる次第である。

鉄滓等の成分分析	株式会社三造試験センター
植物遺存体のDNA分析	佐藤洋一郎（静岡大学）
	株式会社ジェネテック
動物遺存体の分析	富岡直人（岡山理科大学）

7．出土遺物ならびに図面・写真などは、灘崎町教育委員会で保管している。

凡　例

1．本書に示す標高値は海抜高であり、方位は特に示さない限りは磁北である。
2．本書に掲載した遺構は種別ごとに通し番号をつけている。また、遺物についても通し番号をつけている。土器以外の遺物は以下の略号を用いている。
　石製品：S　金属製品：M　土製品：C　鉄滓：I
3．第２章の第４図は灘崎町都市計画図に基づく灘崎町全図１万分の１を複製し、加筆したものである。
4．土色及び土器の色調は『新版標準土色帳』（1996年後期版）をもとに表記している。
5．写真図版のうち、遺物写真の番号は掲載遺物番号と一致する。
6．本書における遺構と遺物の実測図の縮尺については明記して示している。

目　次

序
例　言
凡　例
目　次
第1章　発掘調査の経緯と経過……1
第1節　発掘調査の経緯……1
第2節　発掘調査の経過……2
1　確認調査……2
2　全面発掘調査……3
第3節　報告書の作成……5
第4節　発掘調査と報告書作成の体制……6
第2章　遺跡の位置と環境……7
第1節　地理的環境……7
第2節　歴史的環境……7
第3章　発掘調査の概要……11
第1節　左古谷遺跡A地点の調査……11
1　概要……11
2　中世の遺構と遺物……12
3　A地点包含層出土の遺物……31
第2節　左古谷遺跡B地点の調査……33
1　概要……33
2　古墳時代後期以前の遺構と遺物……34
3　古墳時代後期の遺構と遺物……35
4　中世の遺構と遺物……43
5　B地点包含層出土の遺物……52
第4章　まとめ……58
付　載
1　出土炭化米のDNA分析……67
2　左古谷遺跡出土の動物遺存体分析……69
遺構一覧表……78
土器観察表……79
報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　開発区域及びトレンチ配置図（1／10,000）……2
第２図　遺跡周辺の地形（１／5,000）……4
第３図　遺跡位置図……7
第４図　灘崎町主要遺跡分布図（１／40,000）……9
第５図　Ａ地点遺構全体図（１／400）……11
第６図　Ａ地点土層断面図（１／80）……12
第７図　貝塚１・出土遺物（１／20・１／４）……12
第８図　貝塚２（１／80）……14
第９図　貝塚２出土遺物（１）（１／４）……15
第10図　貝塚２出土遺物（２）（１／４）……16
第11図　貝塚２出土遺物（３）（１／４）……17
第12図　貝塚２出土遺物（４）（１／４）……18
第13図　貝塚2出土遺物（５）（１／４）……19
第14図　貝塚２出土遺物（６）（１／４）……20
第15図　貝塚２出土遺物（７）（１／４）……21
第16図　貝塚３・出土遺物（１）（1／40・１／４）……22
第17図　貝塚３出土遺物（２）（１／４・１／２）……23
第18図　貝塚４（１／40）……23
第19図　貝塚４出土遺物（１／４・１／２）……24
第20図　土器溜まり１・出土遺物（１／40）
（１／４・１／２）……25
第21図　土器溜まり２・出土遺物（1／20・1／4）……25
第22図　土器溜まり３・出土遺物（1／40・1／4）……26
第23図　土壙１・出土遺物（１／40・１／４）……26
第24図　石列１・出土遺物（１／40・１／４）……27
第25図　石列２（１／40）……28
第26図　石列３（１／40）……29
第27図　石列３出土遺物（１／４）……30
第28図　Ａ地点包含層出土遺物（１／４・１／２）……31
第29図　Ｂ地点遺構全体図（１／400）……33
第30図　Ｂ地点土層断面図（１／80）……34
第31図　焼土面・出土遺物（１／20・１／２）……35
第32図　竪穴住居１（１／60）……36
第33図　カマド付近拡大図（１／40）……37
第34図　竪穴住居１出土遺物（１）（１／４）……37
第35図　竪穴住居１出土遺物（２）（１／４・１／２）……38
第36図　土壙２・出土遺物（１／２０・１／４・１／２）……40
第37図　土壙３・出土遺物（１／４０・１／４）……41
第38図　土壙４・出土遺物（１／４０・１／４）……41
第39図　Ｐ１～P3・出土遺物（１／２０・１／４）……42
第40図　P4（１／２０）……42
第41図　P5・出土遺物（１／２０・１／４）……42
第42図　貝塚５・出土遺物（１／４０・１／４）……43
第43図　貝塚６・出土遺物（１／４０・１／４）……44
第44図　土壙５・６・出土遺物（１／４０・１／４）……45
第45図　土壙７・出土遺物（１／４０・１／４）……46
第46図　Ｐ６・出土遺物（１／２０・１／４）……46
第47図　溝１・出土遺物（１／８０・１／４）……46
第48図　土器溜まり４・出土遺物（1／20・1／4）……47
第49図　土器溜まり５（１／４０）……47
第50図　土器溜まり５出土遺物（１）（１／４）……48
第51図　土器溜まり５出土遺物（２）（１／４）……49
第52図　土器溜まり５出土遺物（３）（１／４）……50
第53図　集石遺構・出土遺物（１／４０・１／４）……51
第54図　Ｂ地点包含層出土遺物(1)（1／2・1／4）……53
第55図　Ｂ地点包含層出土遺物(2)（1／4・1／2）……54
第56図　Ｂ地点包含層出土遺物(3)（1／4）……55
第57図　Ｂ地点包含層出土遺物(4)（1／4・1／2）……56
第58図　有車輪文叩き目の須恵器出土遺跡分布図……60

表　目　次

表1　有車輪文叩き目の須恵器出土遺跡一覧……61
表2　津寺遺跡（高田調査区）竪穴住居との内容比較表……61
遺構一覧表……78
土器観察表……79
その他の出土遺物観察表……85
貝類の出土量（1）……86
貝類の出土量（2）……87
貝塚出土遺物の重量組成表……88

図　版　目　次

巻頭

図版1　1．貝塚2（北西より）
　　2．貝塚2出土炭化米（右は現在のアケボノ米）
図版2　1．左古谷遺跡出土石器類
　　2．竪穴住居1出土深鉢形土器
　　3．扁平五輪塔形泥塔
図版3　1．青磁
　　2．白磁
　　3．染付・李朝
図版4　1．肥前陶磁器
　　2．瀬戸・美濃系・京焼系陶器

巻末

図版1　1．T33遺構検出状況（西より）
　　2．調査地点遠景（北東より）
　　3．A地点調査前状況（南東より）
図版2　1．貝塚1（南西より）
　　2．貝塚2（北東より）
　　3．貝塚3（北より）
図版3　1．貝塚4（北より）
　　2．土器溜まり1（南西より）
　　3．土器溜まり2（北東より）
図版4　1．土壙1（南東より）
　　2．石列1（南西より）
　　3．石列2（北より）
図版5　1．B地点調査前状況（南より）
　　2．焼土塊・面検出状況（南東より）
　　3．竪穴住居1検出状況（北より）
図版6　1．カマド縦断面（北より）
　　2．炉1・2検出状況（南東より）
　　3．焼土面検出状況（北東より）
　　4．炉1断面（北東より）
　　5．炉2断面（北東より）
　　6．竪穴住居1完掘間近状況（西より）
　　7．土壙2（南東より）
　　8．土壙3（東より）
図版7　1．土壙4（南東より）
　　2．ピット群検出状況（西より）
　　3．P1～P3検出状況（南より）
　　4．P4・P5検出状況（東より）
　　5．貝塚5（東より）
　　6．貝塚6（東より）
　　7．土壙5・6（南東より）
　　8．土壙7（南より）
図版8　1．土壙6遺物出土状況（北東より）
　　2．溝1検出状況（北西より）
　　3．土器溜まり4（北東より）
　　4．土器溜まり5（東より）
　　5．集石遺構（北西より）
　　6．B地点A－A´土層断面（北より）
　　7．現地説明会風景
　　8．B地点調査後遠景（南東より）
図版9　1．竪穴住居1出土遺物（1）
　　2．竪穴住居1出土遺物（2）

図版10　1．竪穴住居１出土遺物（３）
　　2．竪穴住居１出土遺物（４）
図版11　1．竪穴住居1出土遺物（５）
　　2．土壙２出土遺物（１）
図版12　1．土壙２出土遺物（２）
　　2．土壙３出土遺物
図版13　1．包含層出土遺物（１）弥生土器・須恵器
　　2．包含層出土遺物（２）土師器
図版14　1．包含層出土遺物（３）製塩土器
　　2．包含層出土遺物（４）製塩土器・師楽的土師器
図版15　1．土師質椀
　　2．土師質小皿
図版16　土師質鍋・土師質内耳鍋・土師質羽釜・瓦質羽釜
図版17　土師質土器・瓦質土器・亀山焼・備前焼
図版18　石器
図版19　1．鉄器等
　　2．古銭・キセル
図版20　1．土製品
　　2．不明土製品
図版21　1．左古谷遺跡出土動物遺存体（１）
　　2．左古谷遺跡出土動物遺存体（２）
図版22　1．左古谷遺跡出土動物遺存体（３）
　　2．左古谷遺跡出土動物遺存体（４）

第１章　発掘調査の経緯と経過

第１節　発掘調査の経緯

平成６年、灘崎町彦崎地内において、株式会社セント住建による宅地開発造成工事が計画された。造成面積は８．５haに及ぶ大規模なものであった。

造成予定地内には、馬場散布地が周知の埋蔵文化財包蔵地として存在していたが、造成予定地の面積の広さから、他にも未確認の遺跡の存在が予想されたので、早急に分布調査を実施する必要があった。しかし、当時の灘崎町教育委員会には、埋蔵文化財等の取り扱いを職務とする職員が配置されていなかったため、岡山県教育委員会文化課（以下、県教委という。）に協力の依頼をした。

そして、県教委の協力を得て、平成７年２月６日に分布調査を実施した。その結果、造成予定地内北東部の丘陵台地で土器のまとまった散布及び、南側の尾根筋でマウンド、山裾でまとまった土器の散布が確認された。また、この分布調査の時には確認されなかったが地元の方の話などから中世貝塚の存在も予想された。

これをうけて、県教委、株式会社セント住建、灘崎町教育委員会の三者で協議を行い、開発区域内の埋蔵文化財の範囲と性格を明確にするための確認調査の必要性を認識したが、本町にはそれを指揮遂行できる職員が未配置であったので忽ち人材の確保に窮した。そこで人材の確保に向け本町では、県教委や、近隣市町村教育委員会、研究機関、文化財保護委員、発掘調査経験者等に事情を説明し、再三調整を図ったがいずれも朗報を得ることはできなかった。しかし、開発業者への対応はじりじりと迫られ、このような硬直状況を打開するために、本町では独自に専門職員の採用を検討し始めた。このことは、今後のこうした状況に対して合法的かつ敏速に事態へ対応できること、また、今まであまり周知されていなかった新たな事項等を教育・文化行政に十分反映し、活用できることを熟慮したうえでの決断であった。

平成８年４月に専門職員が採用され、先の分布調査の成果確認と区域内の再踏査を実施した。また、確認調査を実施するための三者協議を本格的に開始した。確認調査を実施するにあたって、発掘調査用道具・資材と測量・記録用機器を原則に従い、予算の許容範囲内で灘崎町が準備した。準備できなかったものについては、岡山県古代吉備文化財センターに事情を説明し機材を借用した。次に図面上で調査区の設定を行った。調査区は先の分布調査の成果を活かし、遺跡が予想される部分にトレンチを38カ所設定した。次に現場に調査区を設定するために雑木・竹などの伐採を実施した。

伐採作業はセント住建側が行った。調査区を設定し終わると調査に入る前日までに現場にテントを張り、発掘用資材・道具を搬入した。また、並行してセント住建と協議を重ね、平成８年７月11日に覚書を締結した。現場作業員は、財団法人玉野・灘崎広域シルバー人材センターと地元より確保した。また、灘崎中学校と大学生の協力も得た。確認調査は、多くの悪天候や根の除去に苦しめられ、さらに重労働であったことによる作業員の減少、図面記録に時間を費やしたことなどによって平成８

第１図　開発区域及びトレンチ配置図（1／10,000）

年７月29日から平成8年12月27日までかかった。調査面積は、５１０㎡であった。この結果、遺跡の存在は２カ所で確認された。すなわち、稲荷山から北東に伸びる枝尾根の一つが谷を形成した南側の狭い台地上に中世の集落が、開発区域の北東部の丘陵台地上に古墳時代後期と中世の集落址が存在することが判明した。遺構は、貝塚、溝、ピットなどが検出され、周辺には住居の存在も想定された。また、先の分布調査でマウンドとしたものは自然の土盛りであった。遺物としては中世の土師質椀・鍋・鉢、瓦質鍋・羽釜が最も多く、他には備前焼、亀山焼、輸入陶磁器、古墳時代の須恵器、土師器、製塩土器、鉄器類や石器等が出土した。遺物は総数コンテナ20箱分の量であった。

確認調査の成果を基に三者協議を行い、掘削などによって埋蔵文化財が完全に消滅してしまう部分の全面発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることとなった。

また、全面発掘調査に向けた当面の懸念事項は、発掘調査の期間と費用の問題だった。結局、発掘調査費用は諸事情により予算化できず、平成９年度、10年度は原因者へ直接請求する形を取らざるを得なかった。調査費の内訳は、発掘調査資材・道具類・重機・現場での人件費、年度内の整理作業員人件費、報告書作成費を原因者負担とし、その他に必要とされるものについては相互協議に基づいて行うという方針に決定された。

平成10年３月４日から全面発掘調査区の雑木伐採と表土剥ぎを実施した。その後測量用杭を設定し、調査面積2，000㎡の全面発掘調査が平成10年７月31日まで実施された。

第２節　発掘調査の経過

１　確認調査

分布調査で遺物が採集された範囲とマウンドが確認された部分にトレンチを38カ所設定した。後の左古谷遺跡Ａ地点となる箇所は雑木と竹が密集しており伐採に手間どった。また、当時は進入路予定

地が未買収であったため、表土掘削用の重機が制限され、その搬入搬出と排土には特に気を遣った。

表土を除去し始めたが、立地が段々畑で急な斜面が多く重機を活用する頻度が少なかった。したがって殆どのトレンチを手掘りで下げていった。また、竹等の根の除去には苦労を強いられた。調査は断面を確認しつつ地山面まで精査を行った。その結果、Ｔ１・Ｔ15で中世貝塚を検出し、Ｔ３で土壙・ピットを、Ｔ８・Ｔ10で溝を検出した。また、T37で中世貝塚、T33でピット群を検出した。そして、Ｔ１貝塚は周辺に広がることや住居等の存在が予想された。また、11月には、県教委による現地での指導をいただいた。厚くお礼申し上げます。

2　全面発掘調査

確認調査の成果を基に協議を重ねた結果、擁壁工事によって埋蔵文化財が影響を被る部分の全面発掘調査を実施することに決定し、その他は掘削工事によらない工法に計画変更し一部の保存を図った。

調査区は開発区域の南側にある遺跡を左古谷遺跡Ａ地点とし、北東部にある遺跡を左古谷Ｂ地点とした。

平成10年３月24日付けで、株式会社セント住建と灘崎町教育委員会の両者で、彦崎地内埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結した。

調査は工程の関係でＢ地点から開始した。まず、Ｂ地点の調査前写真撮影を行い、そして重機による表土剥ぎにかかった。終了後に基準点を設定し、調査区全体を12に分割し、調査区の北東側を１区としてそこから順次畦を残し観察しながら掘り下げた。排土はベルトコンベアーを使用し作業の効率化を図った。

遺構は１区～８区では検出されたが、他の区では精査を行ったにも拘わらず未検出であった。

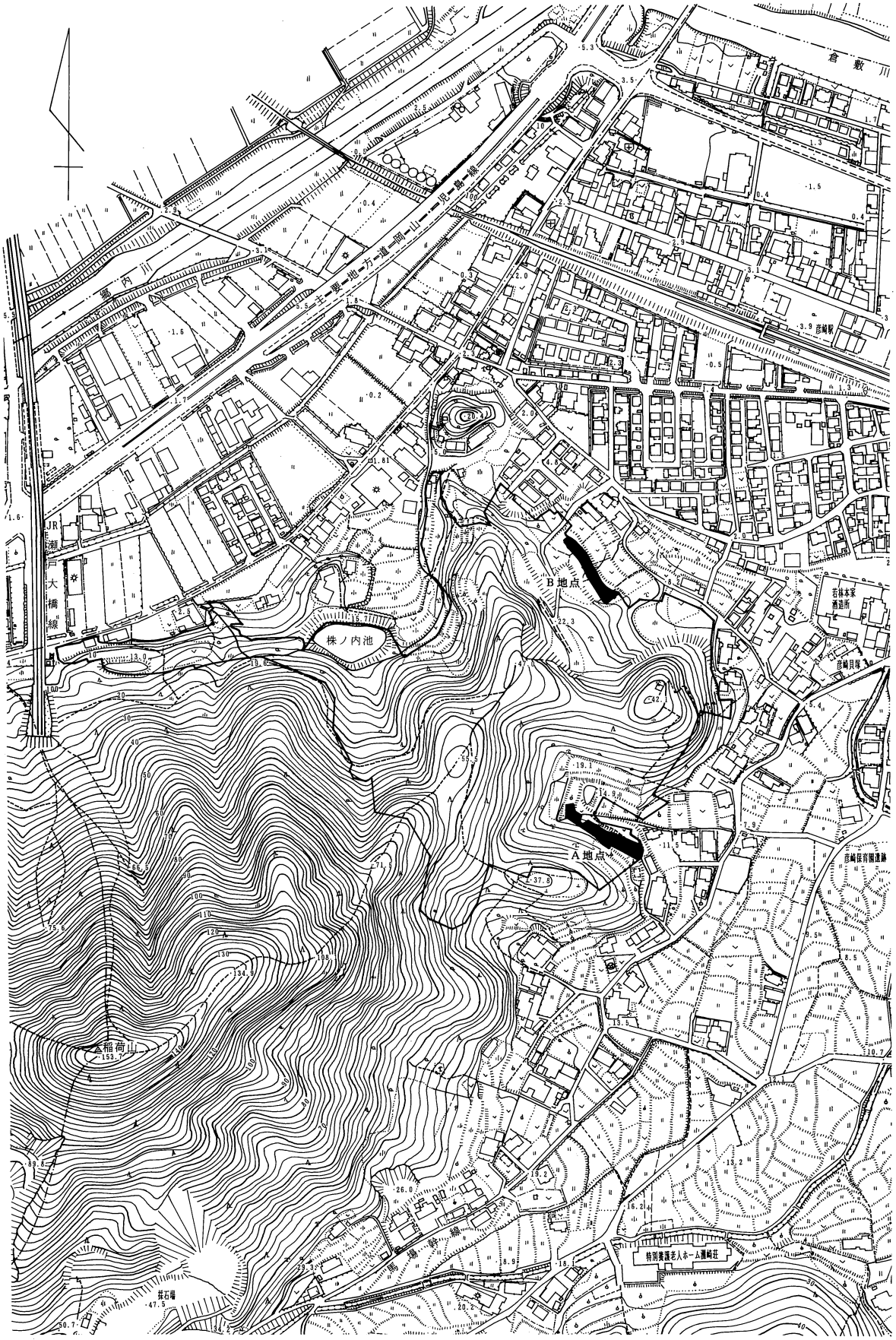
１区では、中世の土壙を３基検出した。２区では中世の土器だまりを検出した。３区では、中世の土器だまりと貝塚を検出した。４区では、古墳時代の土壙１基とピット群、中世の集石遺構を検出した。５区では、古墳時代の土壙２基とピット群、焼土面、中世の溝、ピット群を検出した。６区では古墳時代のピット群を検出した。遺物は、須恵器、土師器、製塩土器が出土した。

この４区から６区にかけての地点は、他の地区に比べ多くの遺物が出土した。古墳時代の遺物は炭などの混在する黒褐色を呈する層から多く出土した。地山レベルは調査区の南東から北西に向かって徐々に高くなる。７区では、古墳時代のピットと中世の貝塚とピット群を検出した。８区では、古墳時代後期の竪穴住居１軒を検出した。

遺構の実測は、5月上旬までに終了することを目標にしていたが、雨天や実測ができる人材の絶対数の不足などから思うように捗らなかった。また、残りの日数を換算しても５月中旬からはＡ地点に着手せざるを得ず、作業員を２班に分けＡ地点の調査と並行してＢ地点で残った遺構の実測と写真撮影を急いだ。しかし、調査員は１名しかおらず、したがって、調査員の意思と指示が一班には届きにくくなる状態になった。

残業と土日返上で作業を進めていたが、６月に入ってもＢ地点の遺構の実測と写真撮影は完了せず、悶々とした気持ちでの作業は効率が悪いと考え、６月４日にご多忙にも拘らず県教委文化課大橋主任に現場での指導を頂いた。また、６月８日には現地説明会を実施し、Ｂ地点を終了した。

Ａ地点は、３月下旬までに表土剥ぎと基準杭の設定及び調査前写真撮影は完了していた。５月中旬より作業員を２班に分け、その内の１班がＡ地点に移動した。調査区は15に分割し、手掘りによる調



第2図　遺跡周辺の地形（１／5,000）

査を実施した。排土にはベルトコンベアーを使い効率化を図った。

調査地点は、かつて畑であったことから大きく削平をうけていた。遺構は、削平された面ではほとんど検出できず、そこから北東側に外れたやや傾斜のある所に残存していた。遺構は、1区から8区で検出した。いずれも中世に属するものばかりである。また、この谷にある畑は全て段々畑で、可耕地を確保するために山の斜面を造成して得られたことがわかる。それは、調査区の南側で地山が露出している所が見られることでも確認できる。

1区では、石列と貝塚を検出した。2区から4区では、貝塚と石列を検出した。5区では、土壙を1基検出した。6区では、貝塚と土器溜まりを検出した。7区では、貝塚と土器溜まりを検出した。8区では、石列と土器溜まりを検出した。

6区、7区、8区の土器溜まりを実測し、写真撮影を済ませた時点の7月26日にA地点の現地説明会を実施した。

いよいよ残すところ僅かとなった。実測と写真撮影は、多くの方の協力を得て、完了することができた。7月31日をもって現場より撤収した。なお、測量を実施するにあたっては、灘崎町役場建設課及び灘崎中学校に多大な協力を頂いた。厚くお礼申し上げます。

第3節　報告書の作成

報告書の作成は、平成10･11･12年度に行った。平成10年度は、現地調査に並行して、遺物の洗浄・注記・復元作業を行う予定で、人員確保を図っていたが、調査前に確保できず、調査終了後に漸く夏季休業中の大学生2人を確保することができた。しかし、期間限定の作業員であり、9月には（財）玉野・灘崎広域シルバー人材センターに依頼して作業員2名を確保し、灘崎町歴史文化資料館及び文化財収蔵庫においてコンテナ200箱分の遺物の整理作業に取り掛かった。

作業は、作業員の経験不足と遺物の多さから始めは遅々として進まなかったが、暫くすると慣れ、効率よくできるようになった。また、持ち帰った土器類と貝類等は平成11年2月までに洗浄作業を終了し、注記作業に入ろうとしたが、注記作業は技術的にできないということで、作業員を確保するまで止む無く調査員が一人で復元作業と並行して行った。程なく人員確保はできたが、諸事情で5月までしか雇用ができなかった。

平成11年3月に、貝塚出土の貝類等の分析等について岡山理科大学の富岡先生に相談したところ、種別と残存形態ごとの個体数計測が必要という指導を受け、個体数計測を計画した。しかし、万を超す量と調査員が公務多忙であったこと、計測する人材を諸事情で獲得できなかったことから終了は年末になった。また、1月からは遺物の実測も並行して行っていたが、実測作業員を確保できず調査員が一人で行った。

貝類の個体数の計測は、総合学習の時間を利用して、灘崎中学校生徒及び灘崎小学校児童の協力を得た。また、最終的な計測数値の確認は臨時作業員2名とともに調査員が行った。

平成11年度中に厳選した遺物約500点を実測し終わる予定であったが、果たせず5月までかかった。

平成12年3月に再度岡山理科大学の富岡先生に分析の相談を行った。その時に、整理した袋中で炭化米が見つかったので、段階的に分別・整理した全ての袋を再点検し、炭化米及び炭化種子、微細な動物遺存体等の検出を実体顕微鏡で行った。そして、種別個体数、重量、寸法（動物遺存体は除く）等の計測を行った。同年3月からは、整理作業員を1名確保し、トレースの補助を担当してもらった。遺物の実測、遺構･遺物のトレース、執筆（自然科学分析以外）、写真撮影（動物遺存体は除く）、編集は調査員が行った。

こうして漸く平成13年3月に報告書（本書）を刊行する運びとなった。

なお、本報告書を作成するにあたり、遺物の分析や保存処理及び個別鑑定において関係各位・機関から多くの有益な御指導・御教示を頂き、また、文献・資料等の便宜を図って頂きました。心より厚くお礼申し上げます。（敬称略、五十音順）

阿部泰久　伊藤晃　上西節雄　扇崎由　大久保徹也　大橋康二　大橋雅也　岡山県古代吉備文化財センター　岡山理科大学　尾上元規　金田善敬（株）三造試験センター（株）ジェネテック　亀山行雄　古谷野寿郎　佐賀県立九州陶磁文化館　佐藤寛介　佐藤洋一郎　柴田英樹　下澤公明　鈴田由紀夫　高田恭一郎　高橋護　高畑知功　富岡直人　中野雅美　中村友博　乗岡実　平井勝　平井泰男　福本明　藤原好二　寶蔵光辰　星島民記　間壁忠彦　光永真一　村田裕一　吉崎昌一　渡邉恵里子

第4節　発掘調査と報告書作成の体制

灘崎町教育委員会

教育長	難波　由正	（平成8年5月まで）
	古家野　晃	（平成8年6月から）
教育次長	原野　烈夫	（平成11年4月から、学校教育課長兼務）
教育課長	山本　一豊	（平成11年3月まで）
社会教育課長	藤井　伸一	（平成12年4月から）
学芸員	田嶋　正憲	（事務・調査・整理・報告書担当）

発掘調査協力者：安宅千代輝　池田義晴　今井健太郎　今田敏数　浮田照男　裏川政夫　大賀芳輝　大谷博　大西一博　笠正人　釜野義忠　河島竹之介　黒川美恵子　小崎晋　境一　坂手利貞　重根弘和　嶋田二郎　嶋村渉　高田綾子　高野正夫　豊沢功　中川昭和　日高正義　藤原次二　渕上正男　穂崎剛　星島隆恵　松本秀臣　三村健一　三宅康雄　森真一　山崎昭　吉岡敦造　若松芳美

整理作業協力者：上西高登　岡田美奈子　加藤倫子　是本恭子　柴田種子　田中基文　永井賢太　中道貞男　灘崎中学校　灘崎小学校　廣畑嘉正　三村悠紀子　三宅要　守谷宏子（敬称略、五十音順）

第2章　遺跡の位置と環境

第1節　地理的環境

左古谷遺跡は、岡山県児島郡灘崎町大字彦崎小字左古谷・ソフコソ3039番地ほかに所在する。

灘崎町は、岡山県の南部、旧児島の北西岸に位置する。玉野市との境に座する常山からの眺望は見事で、四季折々の巨大なパノラマ風景を一望できる。また、町面積の約7割は長年にわたる干拓事業によってもたらされた広大な沃野で、全国有数の穀倉地帯の一角を形成している。

町域は、岡山・倉敷・玉野の3市と接し、交通網や住環境の整備が進みその利便性はかなり高まってきている。また、現在では、古来より著名な「児島郡」を冠する唯一の行政区画でもある。

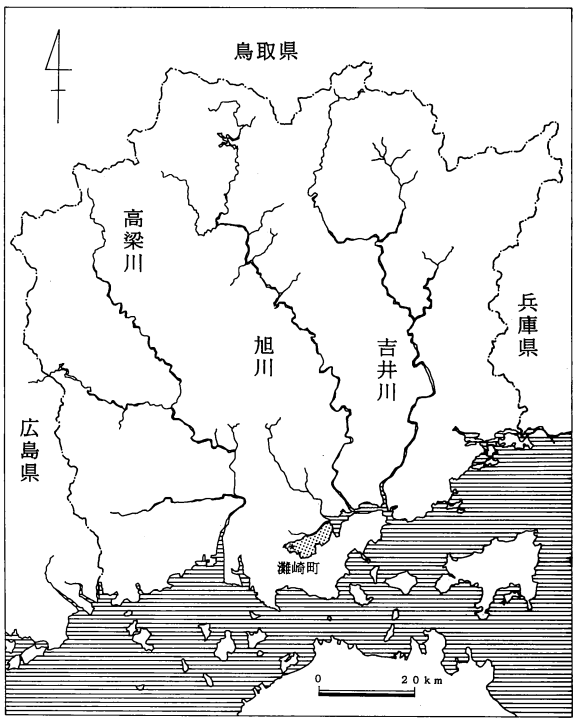
地形的には、標高約307mの常山を最高所として、標高約150mから300mの山々が東西に走り、その尾根が南から北に起伏をもって襞状に派生して大小の谷を成す。遺跡は、扇状地性の地形が波蝕による小さな海岸段丘状を呈する台地上及びその周辺に多くが所在している。こうした遺跡の立地は、言うまでもなく児島が嘗て独立した島であったことによるものである。また、地形的な制約から、町内には河川が乏しく、よって多くの溜池や井戸、水路等が発達しているのも本町の特徴である。

第2節　歴史的環境

現在、町内には約80ヶ所で遺跡が確認されている（注1）。今後、より綿密で詳細な分布調査を実施すれば増加するものと思われる。

旧石器時代に属する遺跡は、本遺跡によって初めて本町では遺物が確認された。

縄文時代に属する遺跡は、彦崎貝塚がある。この貝塚は、旧児島湾に臨んで形成された遺跡で、南から北に開く谷の先端にある。昭和23・24年に東大人類学教室による発掘調査が実施され、約21体の縄文人骨と多量の遺物が検出された（注2）。出土した縄文土器は、山内清男氏によって前期相当を彦崎ＺＩ・ＺⅡ式、後期相当を彦崎ＫＩ・ＫⅡ式と命名され、西日本縄文土器



第3図　遺跡位置図

編年の重要な指標とされている（注３）。この他には、彦崎保育園遺跡や町営住宅彦崎団地周辺、迫川大池散布地等で縄文土器やサヌカイト製の石器等が採集されている（注４）。また、地形的に縄文時代の遺跡がのると思われる台地は、現在ほとんど宅地化されている。なお、本遺跡からも石器類が若干出土している。蛇足であるが旧児島湾沿岸は彦崎貝塚を含む著名な縄文貝塚・遺跡の密集地である。

弥生時代に属する遺跡は、前期及び中期の遺構・遺物は、本町ではまだ確認されていない。したがって、遺跡の上では彦崎貝塚からしばらく空白期間がある。後期の遺構も確認されておらず、本遺跡と彦崎貝塚を含む３遺跡で土器類が確認されているにとどまる（注５）。資料の増加が待たれる。

古墳時代に属する遺跡も同様で、前期及び中期の古墳や集落は確認されていない。僅かに彦崎貝塚で遺物が確認されているだけである（注６）。後期の古墳も可能性のある１基以外は、確認されていない（注７）。一方、集落は、本遺跡によって漸く製塩等を生業としていたと思われる集落構造が僅かながら判明し、彦崎貝塚以降あまり明確でなかった我が先人達の生活の一端を遺構の上で確認できたのである。また、当時の児島は、内海航路の要衝として強く認識され、土地占有等を目的とするヤマト政権の直接的支配が及んでいたものと考えられている（注８）。

奈良・平安時代の遺跡は本町では確認されてはいないが、本遺跡等で当該期の遺物が若干出土している（注９）。また、平城京出土木簡等によると当時の児島郡内には、三家郷・賀茂郷・小豆郷があったとされ（注10）、本町もいずれかに属していたと考えられる。そして、この時期も前代に引き続き製塩業が児島では行われていたことも判明している（注11）。なお、遺跡ではないが、彦崎慶岸寺の本尊大日如来坐像（胎蔵界）は平安中期の地方作の優品とされ注目される（注12）。

平安時代末期になると、児島郡内には公領以外に寄進地系荘園や寺社領、摂関家領があり、中でも熊野社は勢力を持ち始めていたようである（注13）。後に本町も熊野社と深く関わるようになる。

鎌倉時代の遺跡も本町では確認されていないが、南北朝期には本遺跡で生活の一端を窺うことのできる資料が貝塚等から出土している。また、紀年銘資料に彦崎天神社の狛犬があり、それには、「建武2年（1335）11月」と墨書されている。この時期熊野社は、暦応３年（1340）に起こった佐々木（飽浦）信胤の反乱に加担し、後幕府方に攻められ敗北した。そして、常山以東の領地を没収されたと言われている（注14）。

応仁・文明の乱後、またもや熊野社は所領の没収を受けた（注15）。そして、この時期になると、領域内に有力な武士が台頭してくる（注16）。遺跡の上では、常山城が築城され、旧海岸線の丘陵台地や谷の奥部には本遺跡を含む中世貝塚群が形成され始め、居住区も現在とほぼ同じ場所で営まれていたことがわかる。また、紀年銘資料である彦崎天神社の棟札には「文明13年(1481)5月・・・」とあり、内容から社行事への山伏の積極的関与が知られるのである（注17）。また、この棟札の形が山伏の峰入修行の際に秘法を後世に伝授するための碑伝に酷似するのもそのためだとされる（注17）。

戦国時代は、まさに常山城主上野隆徳一族の時代である。祖父の代に備中での政争に敗れ、児島へ渡らざるを得なくなり、そして、熊野社領を押領して築造したのが常山城である。明応元年（1492）の頃とされる（注18）。本町も上野氏勢力下にあったと思われる。この時期には、常山城の出城等が築城され（注19）、また、本遺跡や片岡西の谷貝塚などで当該期の庶民の生活遺構・遺物が確認されている。

備中の戦国武将三村家親と姻戚関係にあった上野氏は、有為転変の世、対外政策面で反毛利を貫徹し、天正3年（1575）6月6日に女軍の奮戦があったが、城北麓の茂曾路（現灘崎町迫川字茂曾路）が

1．左古谷遺跡　2．彦崎貝塚　3．散布地（古墳～中世）　4．彦崎保育園遺跡（縄文～中世）　5．散布地（中世）　6．植松散布地（弥生～中世）　7．散布地（中世）　8．道標　9．五輪塔群（中世）　10．ラン塔墓群（近世）　11．五輪塔群（中世）　12．とんきり山城址　13．五輪塔群（中世）　14．中村散布地（古墳～中世）　15．散布地（古墳）　16．鉄滓出土地点　17．石塁（近世以降）　18．散布地（弥生～中世）　19．貝塚（近世）　20．散布地（中世）　21．散布地（中世）　22．散布地（中世）　23．散布地（中世）　24．貝塚（中世）　25．片岡西谷貝塚（中世）　26．丸山城址　27．片岡城址　28．散布地（中世）　29．貝塚（中世）　30．宗津貝塚（中世）　31．鉄滓出土地点　32．貝塚（中世）　33．宗津東谷貝塚（中世）　34．迫川貝塚（中世）　35．迫川城址　36．散布地（縄文～中世）　37．龍王山の祭祀跡（近世）　38．散布地（中世）　39．貝塚（中世）　40．散布地（中世）　41．散布地（中世）　42．茂曾路貝塚（中世）　43．貝塚（中世）　44．五輪塔群（中世）　45．常山城址

第4図　灘崎町主要遺跡分布図（1／40,000）

放火にあい退路を断たれた。そして、翌7日に隆徳が自刃し三村・上野氏連合軍は滅亡した（注20）。

上野氏滅亡後は児島の領有をめぐり毛利氏と宇喜多氏が争奪戦を展開したが、最終的には天正10年（1582）の秀吉による備中高松城水攻めの和睦で大方決着し、国切りによって天正13年（1585）には、児島が全て宇喜多領になった。この時、熊野社は毛利氏に義理立てしたため三か村を没収された。また、常山城出土瓦が岡山城出土瓦と同氾であることも判明している（注21）。

慶長5年（1600）の関ヶ原合戦以降、小早川氏から池田氏へと藩主が代わり、政策によって慶長9年（1604）頃には、常山城は廃城となり、建物等は下津井城へ解体・移築された。そして、慶長11年（1606）には完全に姿を消したとされる。また、寛永16年（1636）には、鎖国令が完成し下津井城も廃城となった。こうして、旧児島郡内から全ての城郭がなくなってしまったのである。

江戸時代以降は、六つの各村毎で小規模な干拓が行われたりしながら半農・半漁等の生活を送っていたようである。また、幕府によって修験道が統廃合されたが熊野社との関係は損なわれず続いてい

たようである（注22）。そして、昭和38年（1963）には、幾多の大干拓事業を経た結果、現在の町域の完成をみたのである。

（注１）『平成11年度岡山県内詳細分布調査成果』（灘崎町分）岡山県教育委員会2000

（注２）池葉須藤樹『岡山県児島郡灘崎町彦崎貝塚調査報告』1971

酒詰仲男「岡山県児島郡彦崎貝塚」『日本考古学年報』１（昭和23年度）日本考古学協会1956

遠藤美子・遠藤萬里『東京大学総合研究資料館収蔵日本縄文時代人骨型録』東京大学総合研究資料館1979

（注３）平井勝「縄文時代」『岡山県の考古学』吉川弘文館1987

（注４）全て表採である。当教育委員会で保管している。

（注５）本遺跡で破片１点と川張西谷散布地で数点、彦崎貝塚で10数点出土しており、当教育委員会で保管している。なお、平田英文『灘崎町史』1956では、彦崎とんきり山城址と奥迫川地区で弥生土器片が出土したと記述されているが、現在では遺物が当教育委員会にないため確認できない状況である。また、酒詰仲男・池葉須藤樹「児島湾南岸の諸貝塚」『貝塚』第25号1950では、彦崎とんきり山貝塚が報告されているが、弥生土器が出土したかどうかはよくわからない。

（注６）前期初頭の甕の破片２点と、製塩土器の脚部２点が出土しており、当教育委員会で保管している。この甕には、外面に叩きが入っている。この種の土器は、近辺では玉野市深山遺跡や倉敷市木見大賀遺跡でみられる。

（注７）第２次大戦末期頃、現在の彦崎天神社周辺で土採りが行われた時に、石室石材と思われる巨大な石とともに須恵器などが多量に出土したという。その内ほぼ完形の平瓶１点は寄贈を受け現在当教育委員会で保管している。現状では、石室がどちらに開いていたかさえ確認できない状況であるが、立地的にも彦崎の集落を一望できる場所であるし、当時の関係者からの聞き取り調査によると古墳であった可能性がかなり高いと思われる。

（注８）近藤義郎・上田正昭編『古代の日本４　中国・四国』角川書店1970

（注９）注５平田文献では、奥迫川の千々ヶ峰八合目付近で平安期の瓦が出土したとある。

（注10）北村章『備前児島と常山城－戦国両雄の狭間で－』山陽新聞社1994

（注11）福田正継編『沖須賀遺跡』玉野市埋蔵文化財発掘調査報告２　玉野市文化財保存会1981

（注12）『灘崎町の文化財』灘崎町教育委員会1997

（注13）宮家準「五流修験と山陽の霊山」山岳宗教史研究叢書12『大山・石鎚と西国修験道』名著出版1979

（注14）注13文献に同じ。

（注15）注10文献に同じ。

（注16）注10文献に同じ。

（注17）『岡山県文化財総合調査報告』21　岡山県教育委員会1984

（注18）注10文献に同じ。

（注19）灘崎町史には、片岡城址で瓦、焼麦、留釘が出土し、井戸、馬場跡、礎石等が確認されているとある。

（注20）奥迫川熊野神社には、上野氏の菩提寺の一つとされる東禅寺の弘治３年（1557）に修復された写経が現存する。

（注21）乗岡実氏の御教示による。

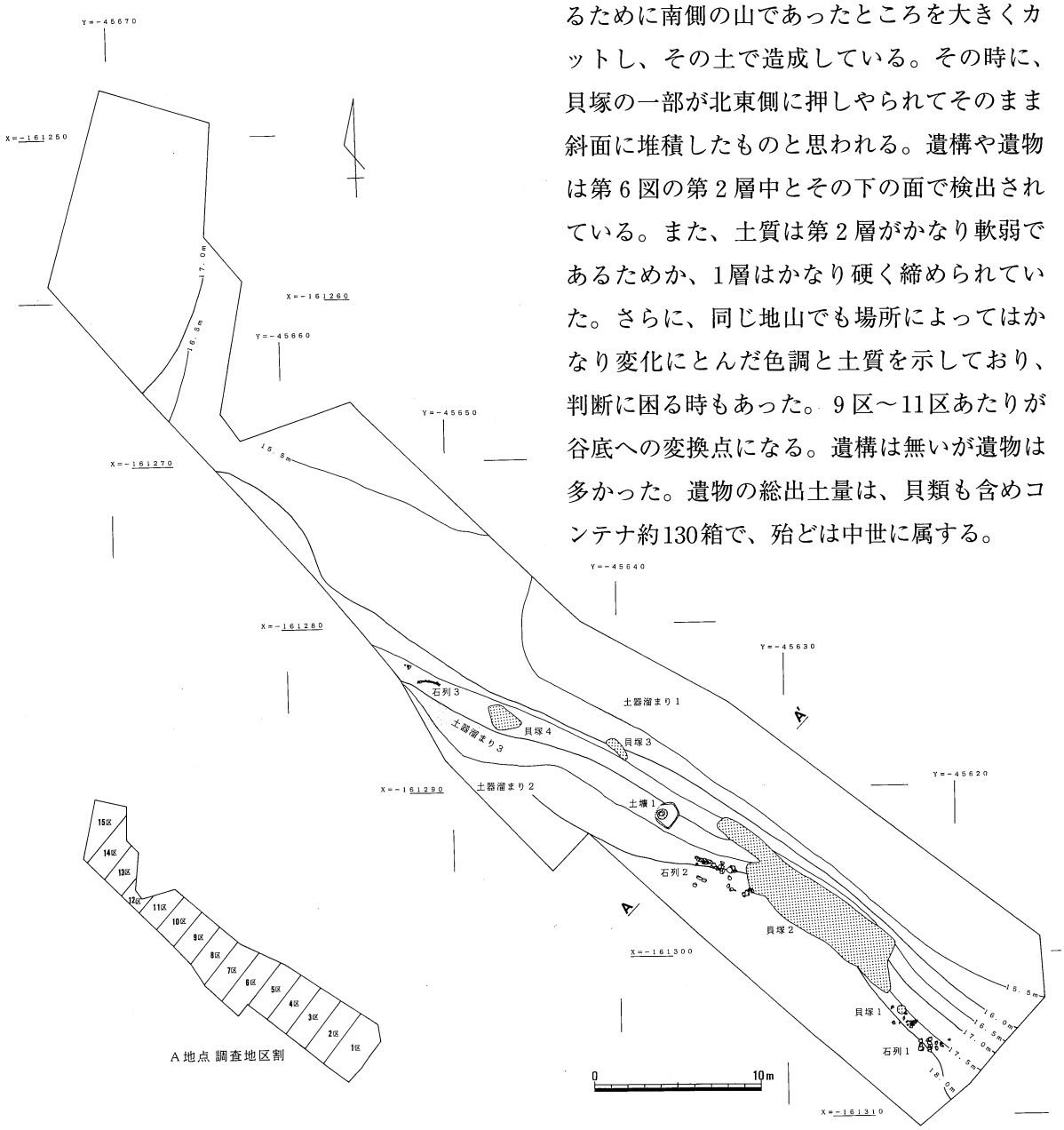
（注22）注13文献に同じ。

第３章　発掘調査の概要

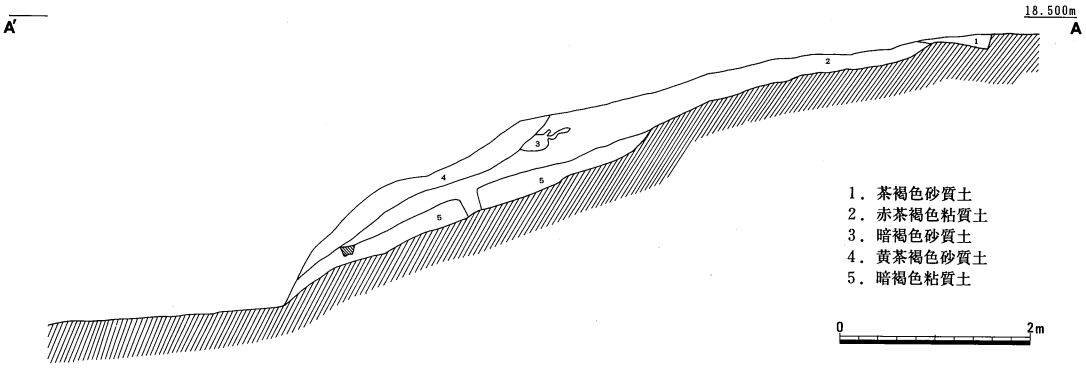
第１節　左古谷遺跡Ａ地点の調査

１．概要

左古谷遺跡Ａ地点は、開発区域の南側に位置し、舌状に張り出した２つの尾根のうち、南側の尾根の北に面した狭い台地上にある。調査区の南東端が尾根の先端に向かう。また、嘗て可耕地を確保するために南側の山であったところを大きくカットし、その土で造成している。その時に、貝塚の一部が北東側に押しやられてそのまま斜面に堆積したものと思われる。遺構や遺物は第６図の第２層中とその下の面で検出されている。また、土質は第２層がかなり軟弱であるためか、１層はかなり硬く締められていた。さらに、同じ地山でも場所によってはかなり変化にとんだ色調と土質を示しており、判断に困る時もあった。９区～11区あたりが谷底への変換点になる。遺構は無いが遺物は多かった。遺物の総出土量は、貝類も含めコンテナ約130箱で、殆どは中世に属する。



第５図　Ａ地点遺構全体図（１／400）

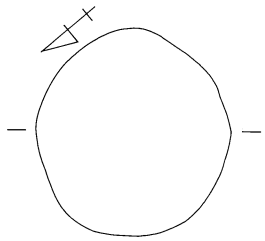


第６図　Ａ地点土層断面図（1／80）

２．中世の遺構と遺物

（１）概　要

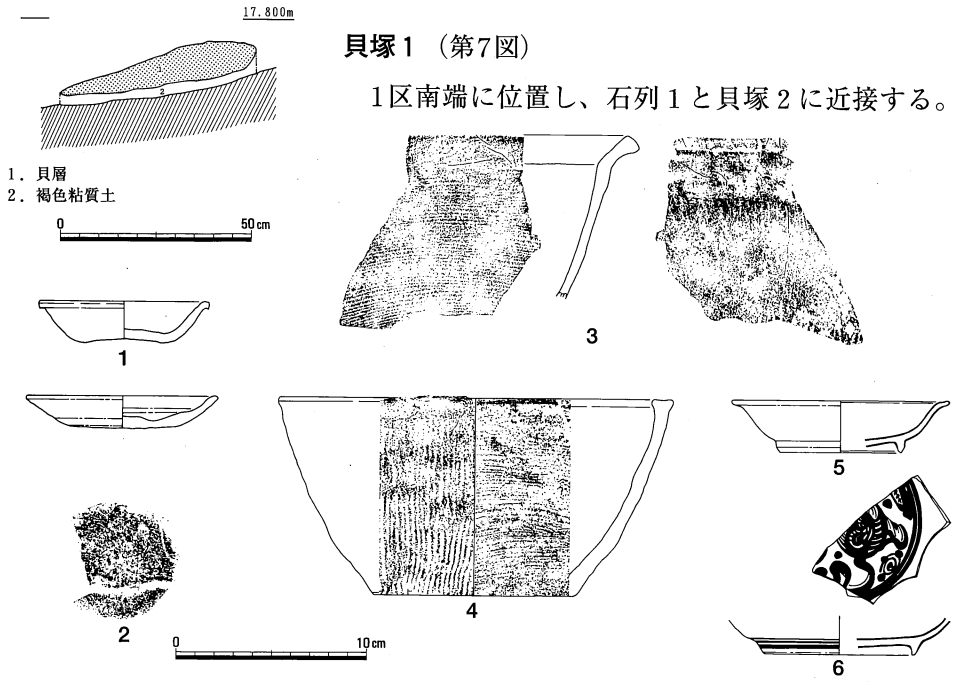
遺構は、全て中世に属するものである。検出遺構は、貝塚４ヶ所、石列３ヶ所、土器溜まり３ヶ所、土壙１基である。土器溜まり１以外は標高16～18ｍの傾斜面で検出した。遺物は、貝塚2が最も多く、その他の遺構でも適量見られた。また、地形や遺構検出のあり方等から調査区内に居住区の想定は難しい。したがって、調査区外の北から北西にかけての谷奥の平坦部や共同墓地の下あたりの緩い傾斜地付近に実際の居住区域の存在が考えられるのである。



（２）貝　塚

貝塚１（第7図）

1区南端に位置し、石列１と貝塚２に近接する。貝層上面レベルは、標高17．７ｍで、南西から北東に向かい傾斜する。大きさは、径約50㎝の円形を呈す。貝種は全てハイガイである。貝層には茶褐色砂質土が混在する。貝層は最も厚いところで約20㎝を測



第７図　貝塚１・出土遺物（1／20・1／4）

る。遺物は全て貝層中から出土した。**1・2**は土師質小皿である。口径９～10cm、器高17～22mmを測り、色調は明褐色・橙を呈す。**2**の底部外面にはヘラ切り痕が残る。内外面ともナデ調整を施す。**3**は土師質鍋である。**4**は土師質鉢である。両方とも内面には細い横刷毛目、外面には荒い縦刷毛目のち、指頭圧ナデを施す。**5・6**は景徳鎮窯の白磁皿と染付皿である。畳付と高台内外面の畳付から２～４mmのところまで釉剥ぎしている。これらの遺物から貝塚１の時期は、16世紀前半から中葉頃と考えられる。

貝塚２（第８図～第15図）

貝塚２は２～４区の斜面中央部に位置し、石列２に近接する。大きさは、最大長約14．3m、最大幅約２．8m、貝層の最大厚約70cmを測る。貝塚上面最高所レベルは標高18．2mで、南西から北東方向に向かって下段まで傾斜している。貝種は小振りのハイガイが最も多く、次にマガキ、そして少量のウミニナ、カワアイ、マルタニシ、アカニシ、ゴマフダマガイ、ハマグリ、オキシジミ、ヤマトシジジミ、マシジミ、フネガイ、ウネナシトマヤガイ、キセルガイタイプ等を含む。貝層には茶褐色砂質土や赤褐色粘質土が混じる。第3層には炭や焼土塊も多く含まれていた。

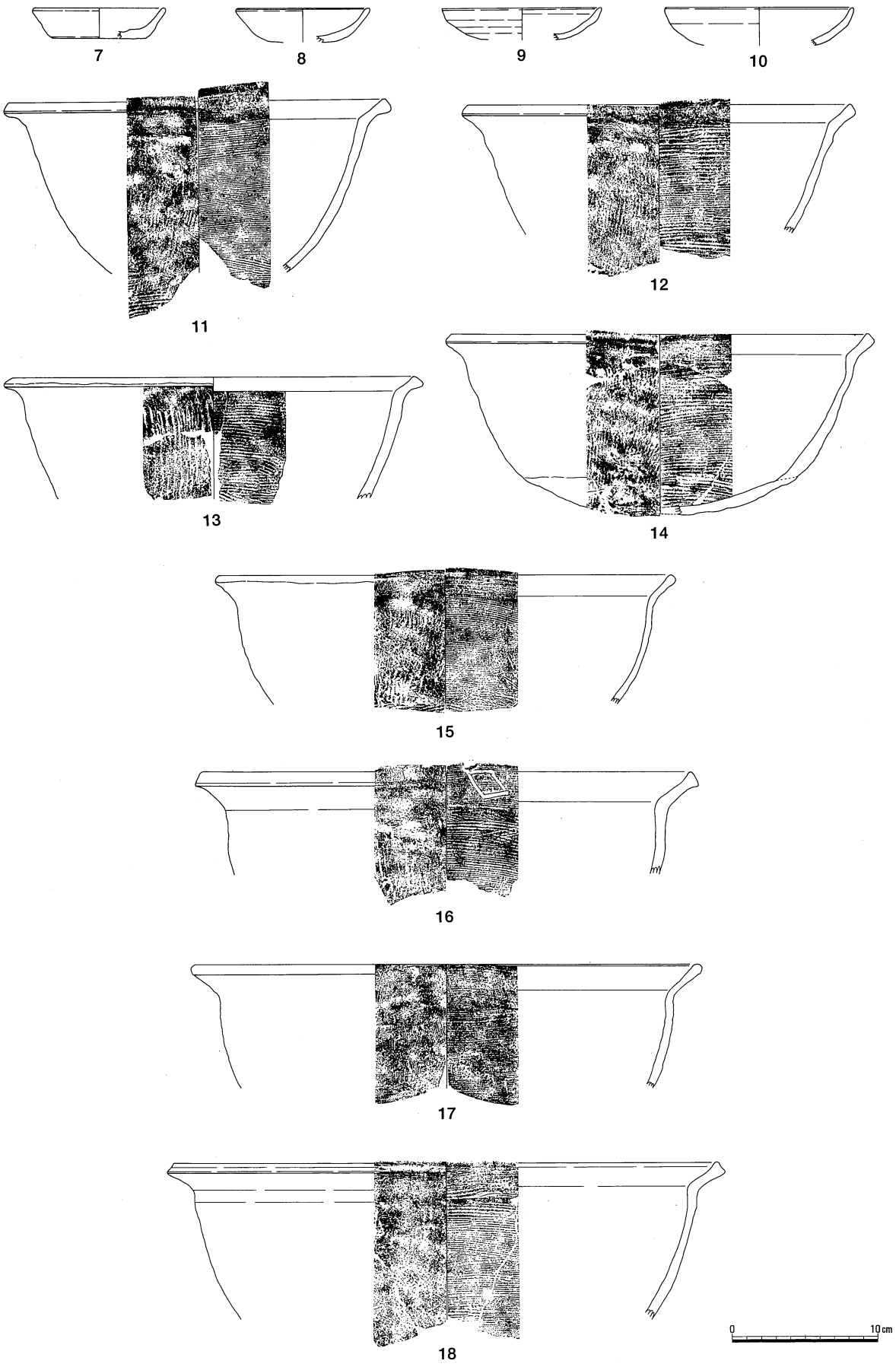
遺物は土器類を始め、金属器、石製品、土製品が貝層中とその下層からかなりまとまった量出土した。また、貝層中からは動物遺存体及び植物遺存体も検出された。

7は土師質小皿である。口径９cm、器高21mmを測る。内外面はナデ調整で底部外面はヘラ切りのちナデを施す。内面に煤が付着しているので用途は灯明皿と考えられる。**8～10**は土師質杯である。口径は９．2cm～13cmで、橙・明褐色を呈す。口縁部は緩く斜めに立ち上がりやや内湾し、端部を丸くおさめる。調整はナデである。**11～21**は土師質鍋である。口径は26．2cm～41．8cmで、色調は橙・黒褐色を呈する。体部外面は凹凸が著しい。**12・14・18・19**には体部内外面に黒斑が見られる。また、**16・20**の口縁部内面にはヘラ記号が見られる。**21**は口縁直下に鍔のつく鍋である。**22～24**は瓦質鍋である。口径は30cm～38．7cmを測る。**25～29**は内耳鍋である。口径は24．4cm～35．4cmを測る。**26**の瓦質以外はみな土師質である。**30～34**は鉢である。口径は11．4cm～23．6cm、器高は4．5cm～13．5cmを測る。**30～33**は土師質、**34**は瓦質である。**35～37**は擂鉢である。**35**は口径28．4cm、器高11．6cm、底径11．8cmを測る。**35**は土師質、**36・37**は瓦質である。底部内面から口縁部に向かって卸し目が放射状に入る。**38～45**は羽釜である。**38**は口径14．8cm、最大径29．2cmを測る。色調は青灰色で堅緻である。口縁部と体部の境に把手がつく。**38～43**は瓦質、**44・45**は土師質である。**46**は瓦質の甕である。**47**は火舎か甕の脚部である。土師質である。**48**は土師質甲羅である。**49～53**は備前焼である。**49**は小振りの擂鉢、**50**は壺、**51**は三耳壺、**52**は壺底部、**53**は甕胴部破片である。**54～64**は土師質脚付鍋の脚部である。**65**は明代の白磁皿である。２次的に火を受けている。**65**は景徳鎮窯の染付碗である。**67・68**は龍泉窯系細蓮弁文青磁碗である。**Ｓ１・Ｓ２**は石皿である。**Ｓ１**は砂岩製で内径29cmを測る。外面には鑿による掘削痕が顕著に見られ、置いて使用したと考えられる。和泉産の可能性もある。（注１）。**Ｓ２**は豊島石製である。**Ｃ１**は土錘である。**Ｍ１**は用途不明の鉄器である。**Ｍ２**はキセルである。**Ｍ３**は中国金王朝の大定通宝である。初鋳は大定18年（1178）である。**Ｍ４**は寛永通宝である。**Ｍ２・M4**は旧耕土出土である。これらの貝層中及び下層出土の遺物の多くに接合関係があり、ほぼ同時期の所産であると思われる。よって貝塚2の時期は出土遺物の内容からみると15世紀末から16世紀前半頃と考えられる。

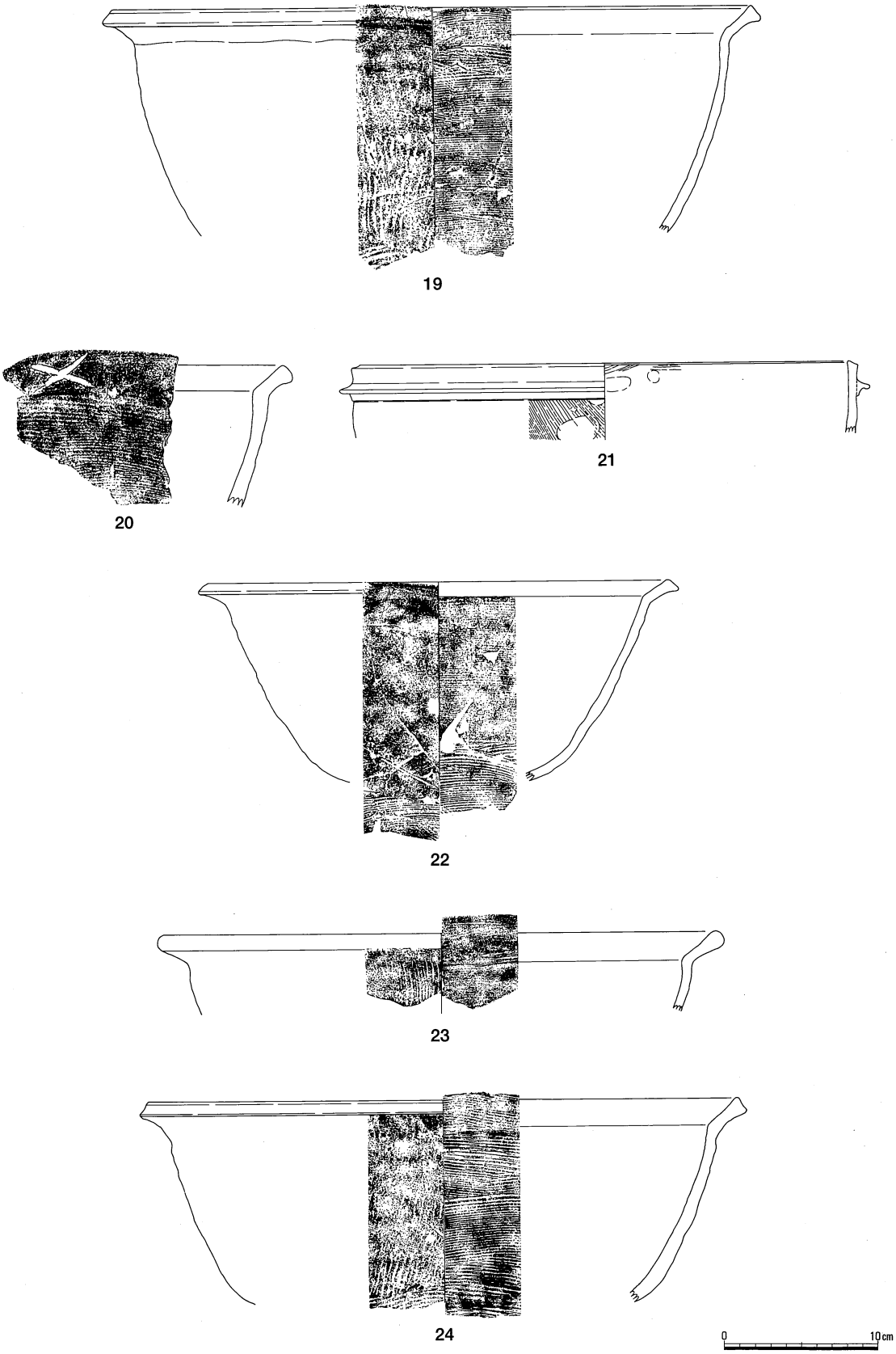
貝塚３（第16図・第17図）

A
A'
B
B'
18.300m
1．貝層
2．茶褐色砂質土
3．赤茶褐色粘質土（焼土・炭含む）
4．暗褐色粘質土
0
2m
1．茶褐色砂質土
2．貝層
3．赤褐色粘質土（焼土・炭含む）
4．暗黄褐色粘質土
5．赤褐色砂質土

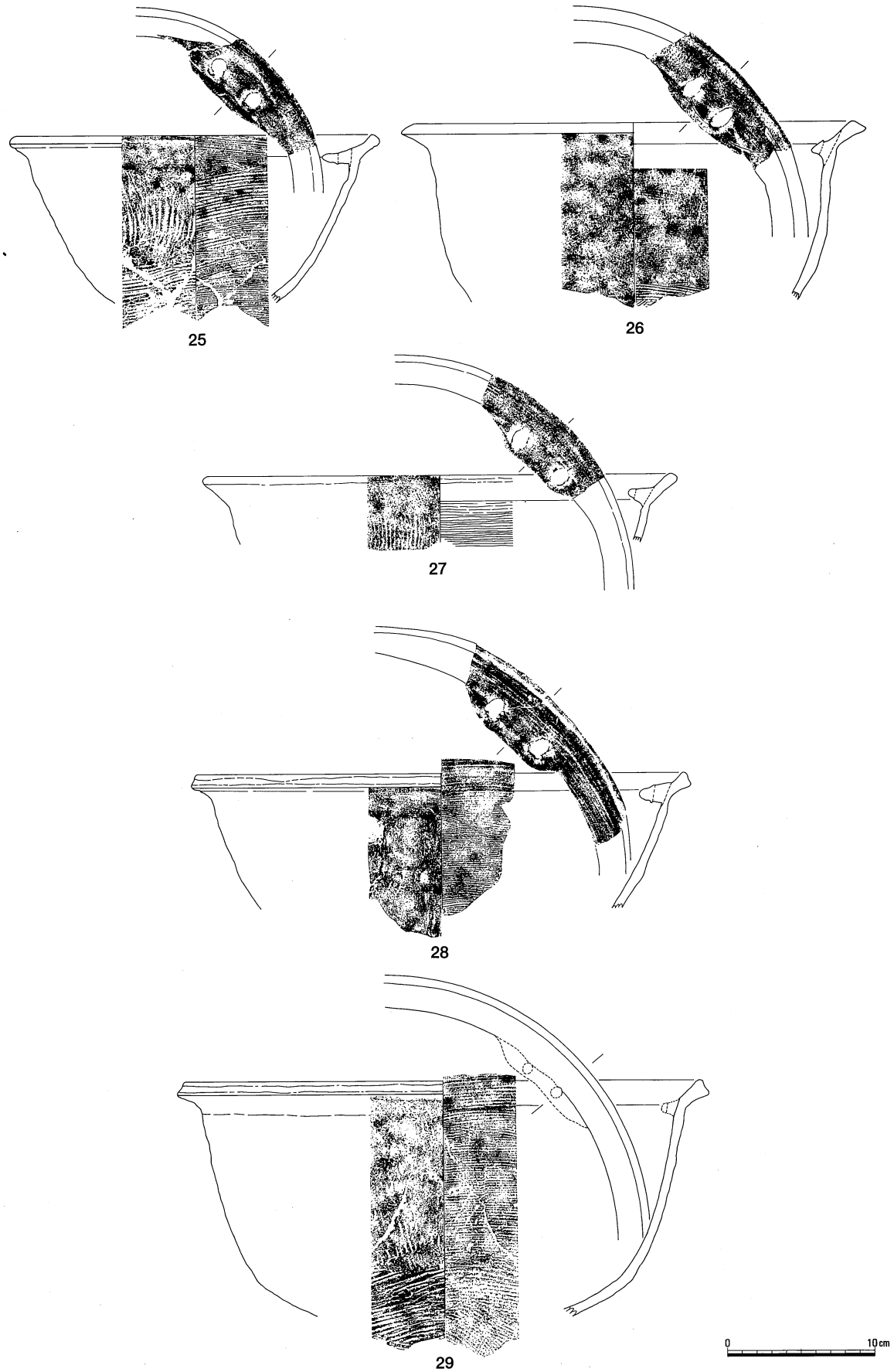
第８図　貝塚２（1／80）



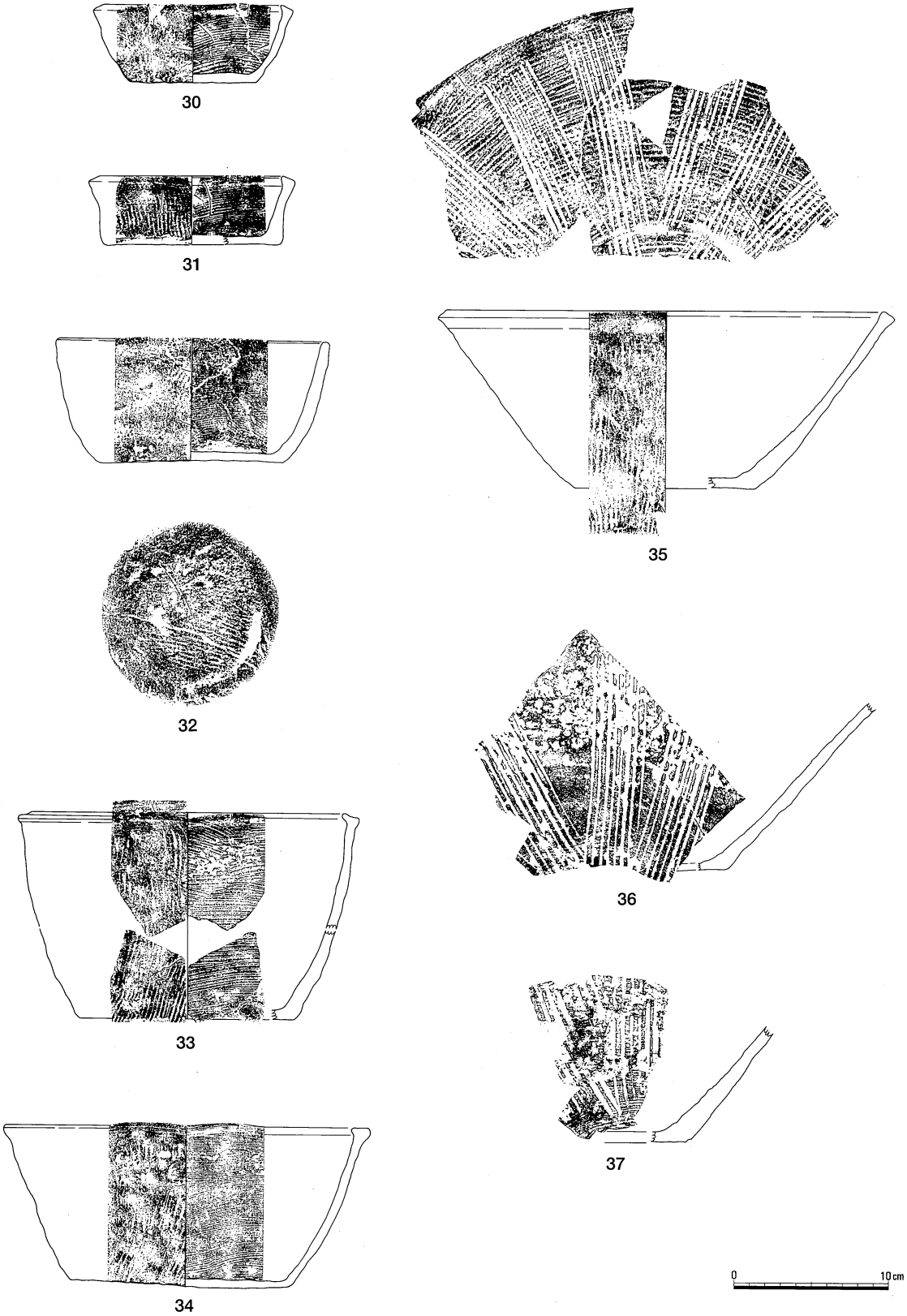
第9図　貝塚2出土遺物（1）（1／4）



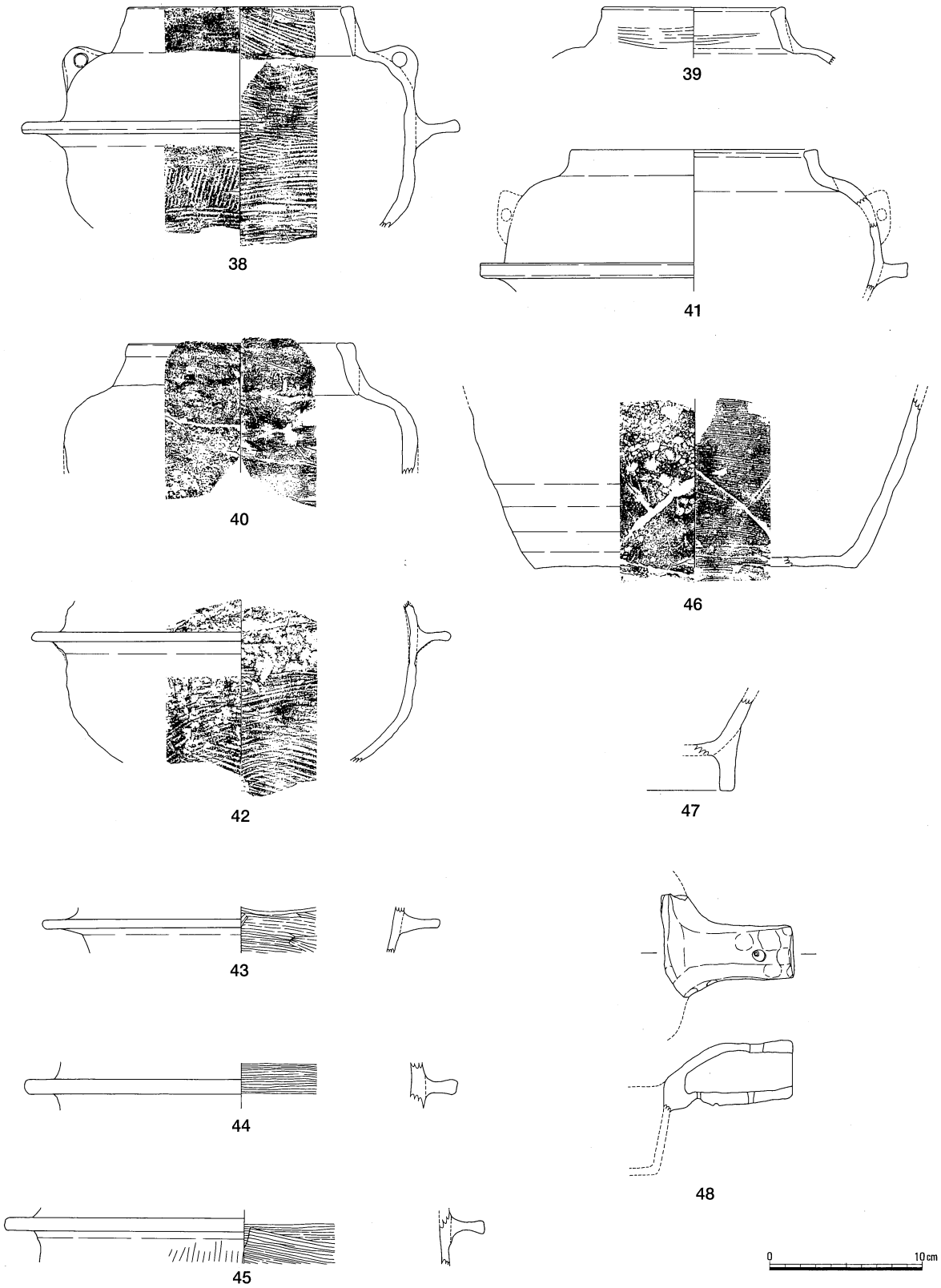
第10図　貝塚2出土遺物（２）（１／4）



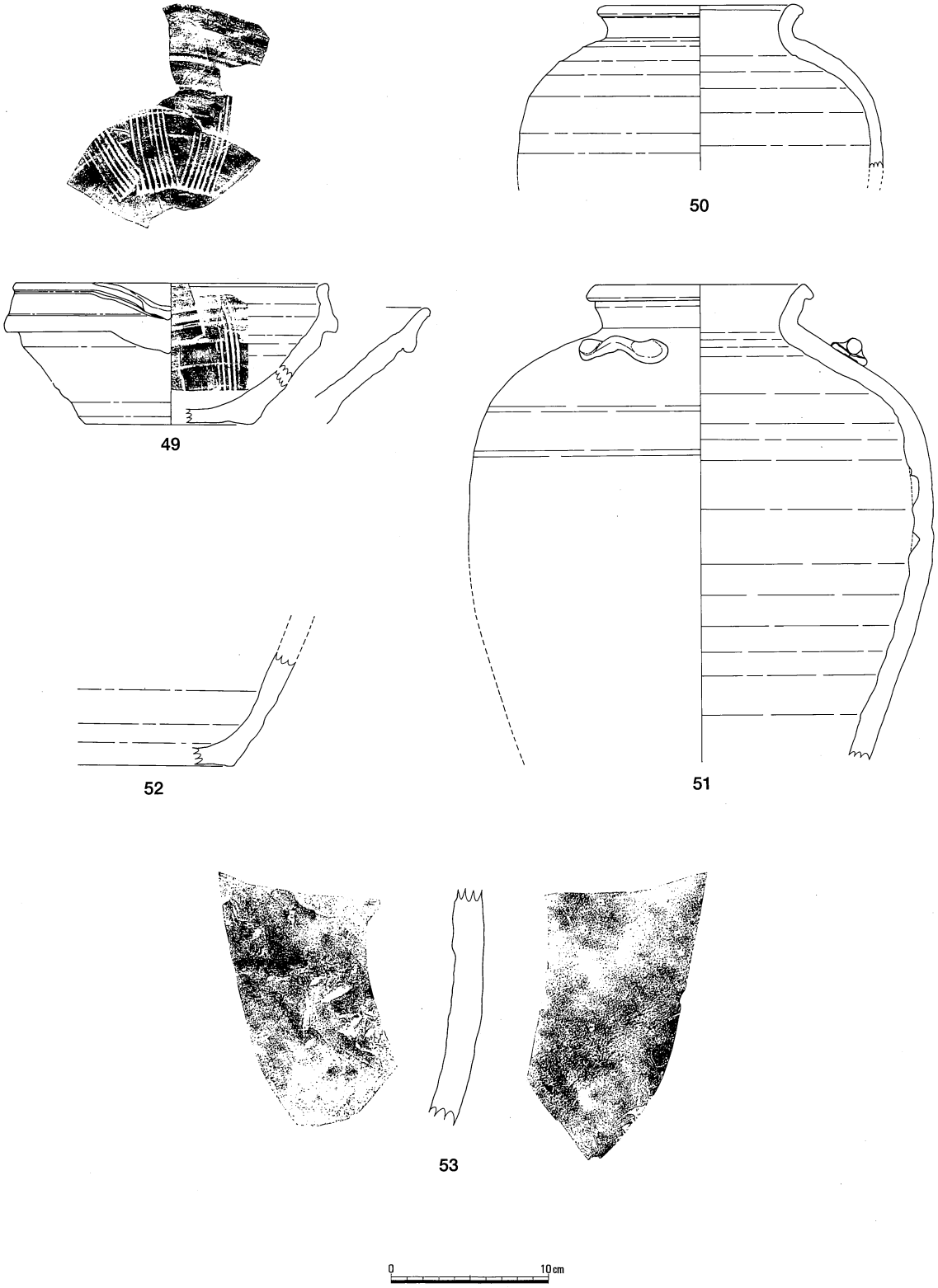
第11図　貝塚２出土遺物（３）（１／４）



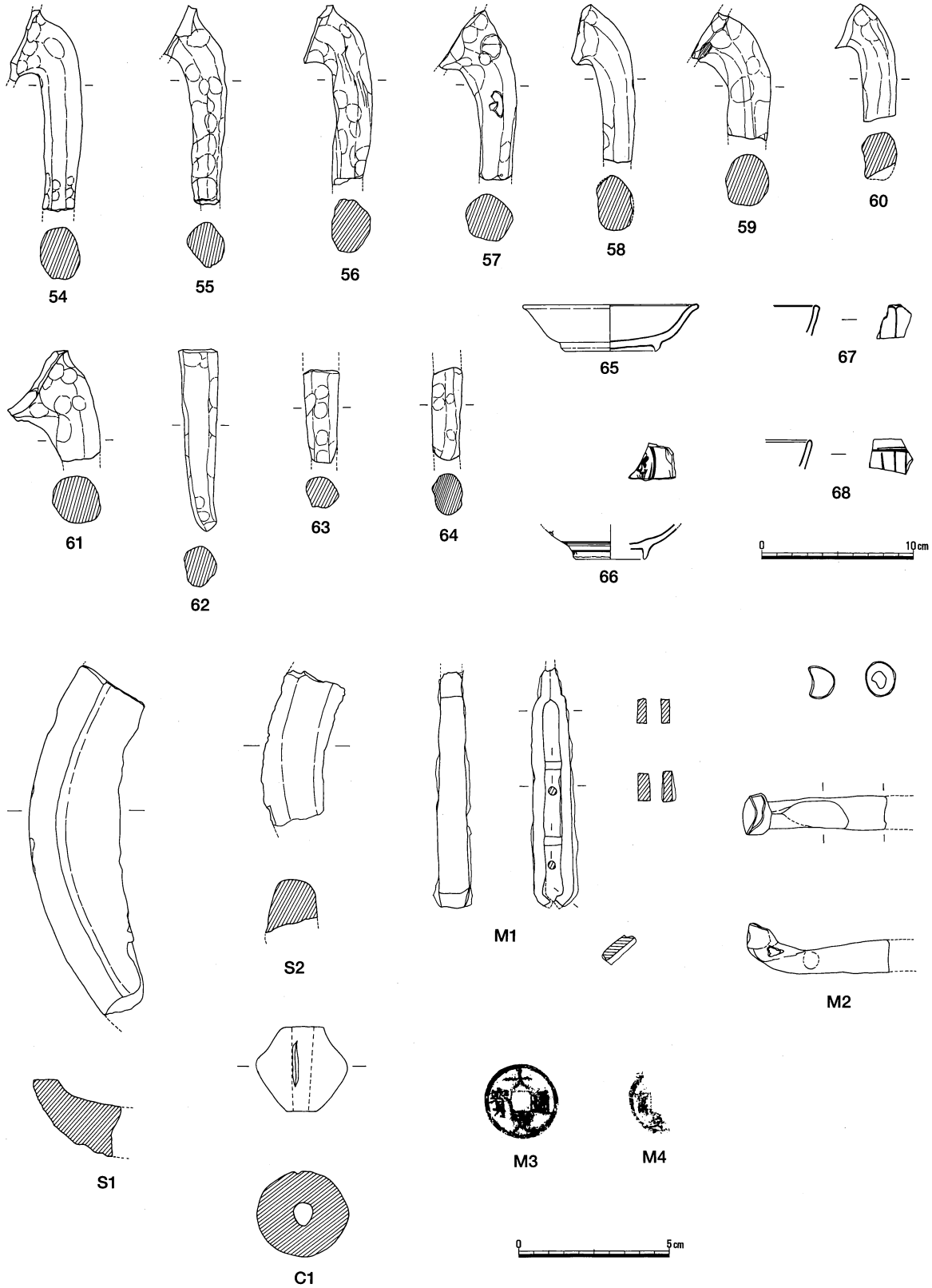
第12図　貝塚２出土遺物（４）（１／４）



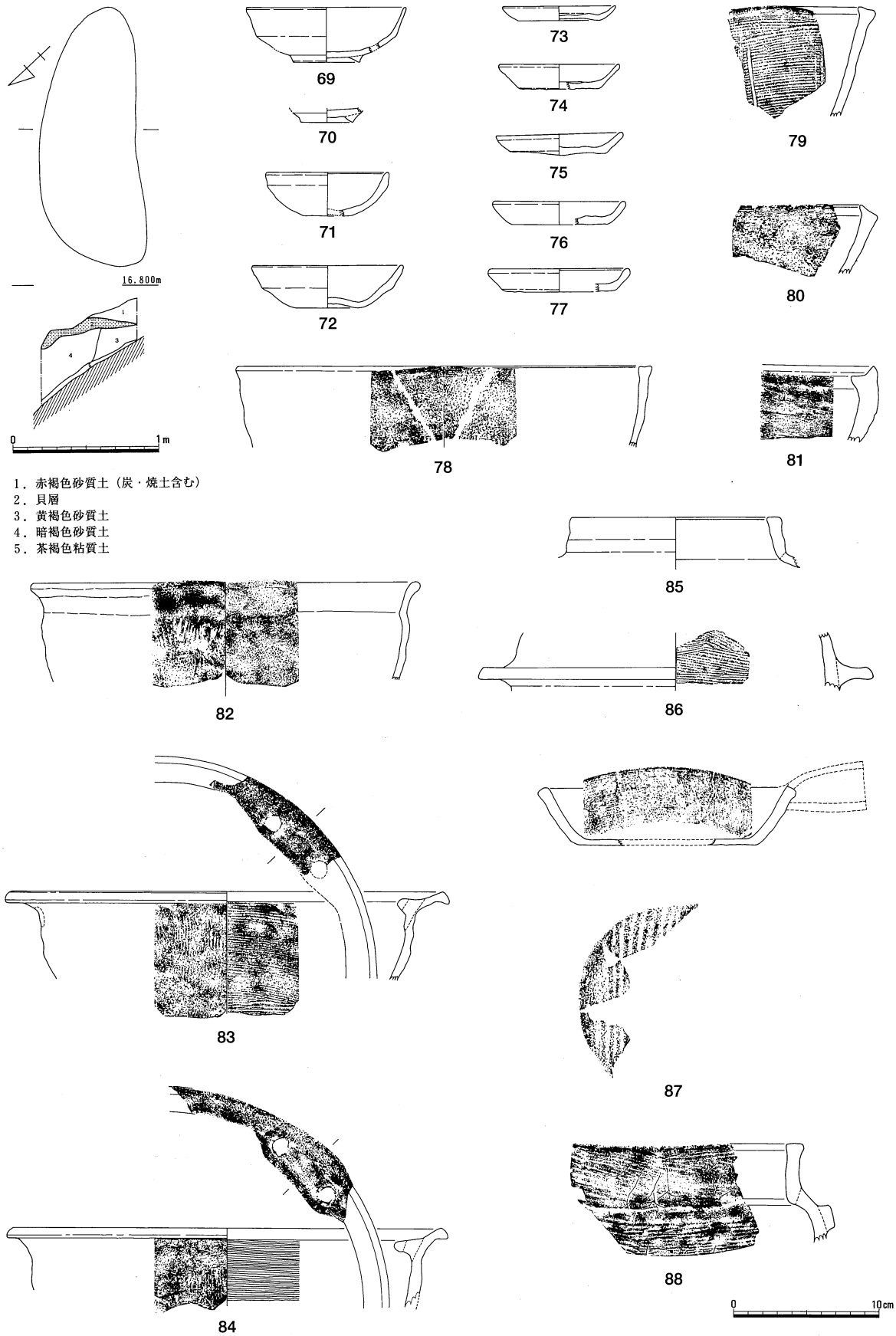
第13図　貝塚2出土遺物（５）（１／４）



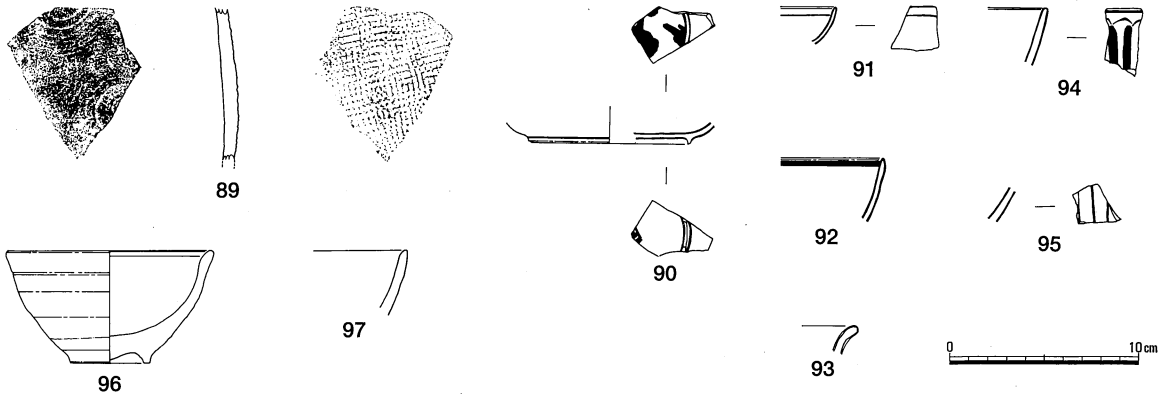
第14図　貝塚2出土遺物（６）（１／４）

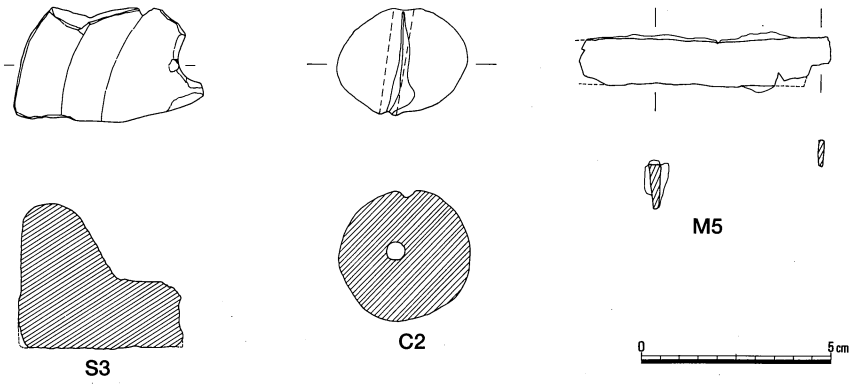


第15図　貝塚2出土遺物（７）（１／４・１／２）



第16図　貝塚３・出土遺物（１）（１／40・１／４）

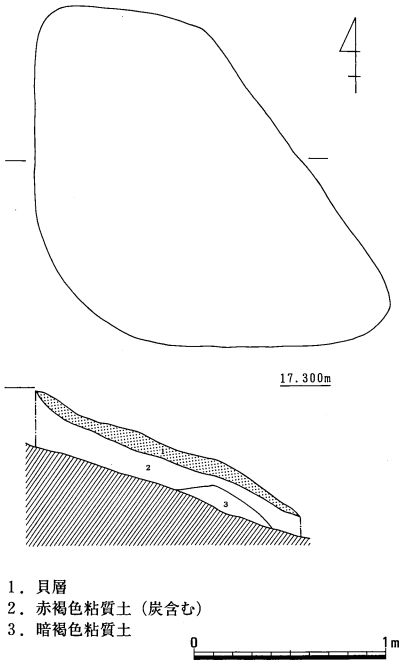




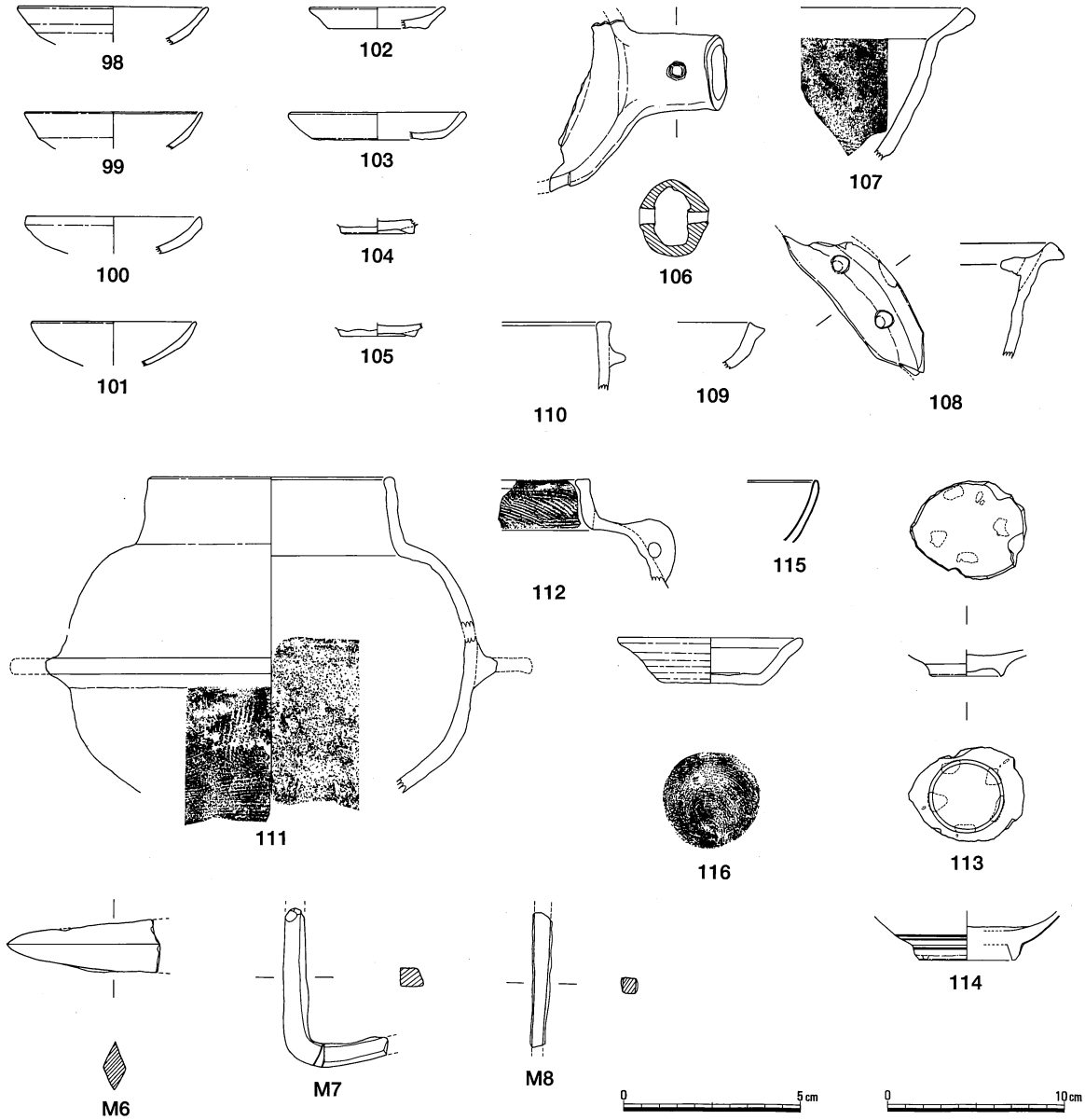
第17図　貝塚３出土遺物（2）（1／4・1／2）

貝塚３は6区中央部に位置し、貝塚上面レベルは標高16．6mにある。南西から北東に向かって傾斜している。大きさは長さ1．8m、幅65cm、貝層の最大厚11cmを測る。調査区の南西隅は硬い地山が露出している。

貝種は小振りのハイガイ、マガキを主体に少量のアカニシ、ゴマフダマガイ、ヒラマキガイタイプ、ヤマトシジミ、ウネナシトマヤガイを含む。貝層には赤褐色砂質土が混じる。遺物は貝層、上層、下層から出土した。**69**～**72**は土師器椀である。**69**は早島式で口径11cm、器高38mm、底径46mmを測る。高台は断面鈍い三角形を呈し一周しない。**70**は同底部である。**71**・**72**はヘソ椀である。口径84mm～104mm、器高20mm～44mmを測る。安定のために底部外面を窪ませる。**73**～**77**は土師質小皿である。口径77mm～96mm、器高10mm～17mmを測る。**73**は底部糸切り**74**～**77**はヘラ切り後ナデ調整である。**73**以外はみな下層出土である。**78**～**81**は鉢である。**78**・**79**・**81**は土師質、**80**は瓦質である。**79**は擂鉢である。**82**は土師質鍋、**83**・**84**は土師質内耳鍋である。**85**・**86**は瓦質羽釜である。**87**は土師質甲羅である。外面は2次的に熱を受け赤化し、内外面には煤が付着している。底部外面は叩きが入る。**88**は瓦質の甕である。粘土紐の装飾が付く。**89**は亀山焼破片である。**90**～**92**は染付である。**90**・**91**は景徳鎮窯、**92**は漳洲窯系である。**93**～**95**は青磁である。**94**・**95**は細連弁文碗である。**96**は肥前陶器である。1590～1610年代との鑑定を受けた（注２）。**97**は瀬戸灰釉陶器である。**Ｓ３**は豊島石製の石臼である。**Ｃ２**は有溝の土錘である。**Ｍ５**は刀子である。**89**・**93**・**94**・**97**は下層出土、他は貝層中及び上面出土である。



第18図　貝塚４（1／40）

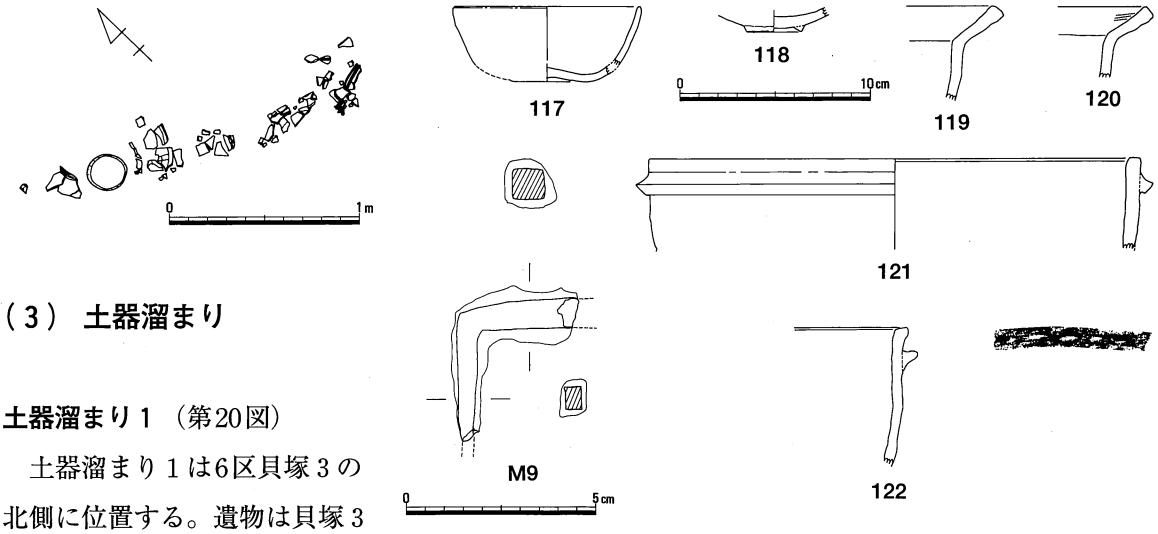


第19図　貝塚４出土遺物（１／４・１／２）

以上の出土遺物の内容により、貝塚3の時期は16世紀後半から末頃時期と考えられる。

貝塚４（第18図・第19図）

貝塚4は7区中央部やや西よりの斜面に位置する。貝塚上面レベルは標高17．3mで西から東になだらか傾斜している。大きさは長さ1．8m、幅1．7m、貝層最大厚11cmの台形状を呈する。貝種はハイガイを主体にマガキ、少量のアカニシ、サザエ、ゴマフダマガイ、ウネナシトマヤガイ、ゴイサギガイを含む。貝層中からは動物遺存体及び植物遺存体等が検出されている。遺物は貝層中と下層から出土した。**98～101**は土師器杯である。**102・103**は土師器小皿である。口径7．6cm～9．8cm、器高1．2cm～1．5cmを測る。底部はヘラ切りのちナデを施す。**104・105**は土師質椀底部である。高台は一周しない。下層出土である。**106**は瓦質甲羅、**107**は土師質鍋、**108**は土師質内耳鍋である。**109**は土師質鉢、**110**は土師質鍔付鍋、**111**は土師質羽釜、**112**は瓦質羽釜である。**113**は李朝陶器、**114**は景徳鎮窯染付、**115**は漳洲窯系青磁碗である。**116**は備前焼杯である。**M6**は鉄剣、**M7・M8**は鉄釘である。出土遺物の内容からみると貝塚４の時期は16世紀末頃と考えられる。

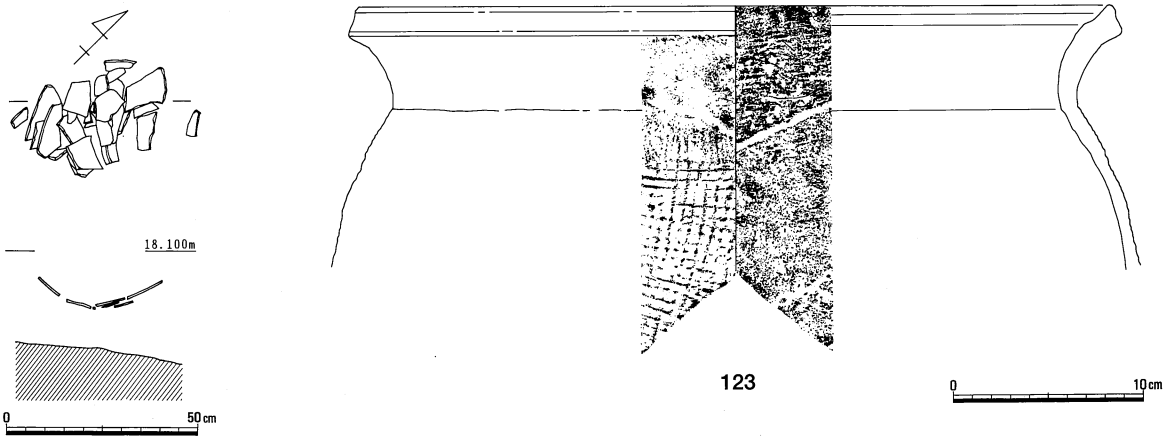


第20図　土器だまり１・出土遺物（1／40・1／4）

（３）土器溜まり

土器溜まり１（第20図）

土器溜まり１は6区貝塚３の北側に位置する。遺物は貝塚３及び周辺から転落したものと思われる。小片が多く接合できるものは少なかった。**117**・**118**は土師質椀である。**117**はヘソ椀で口径9．8cm、器高推定4．4cmを測る。丁寧な作りではないが焼成は良好である。**118**は早島式土器椀の底部である。高台は断面三角形を呈する。粗雑な作りで、高台は一周しない。**119**・**120**は土師質鍋の破片である。**121**・**122**は口縁直下に凸帯の付く土師質鍋である。**122**には凸帯を貼り付けて撫でた時の親指の爪痕が明瞭に残っている。**Ｍ９**は鉄釘である。打ちつけた時に屈折したものと思われる。頂部と先端部を欠損している。遺物には14世紀代ものと16世紀代のものが見られる。



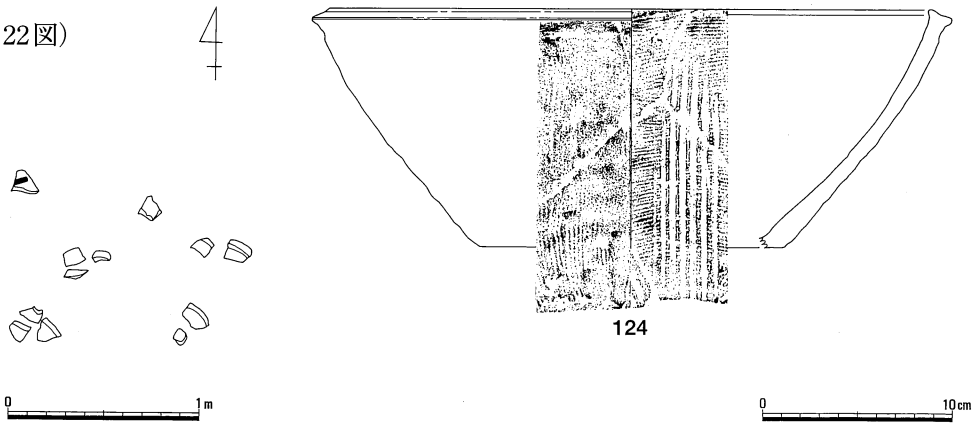
第21図　土器溜まり２・出土遺物（1／20・1／4）

土器溜まり２（第21図）

土器溜まり２は、7区の調査区西端に位置する。5区から8区にかけての調査区の西側付近では、かなり粘性の強い赤褐色土が堆積していた。その中には砂粒などが多く見られた。この層と上方から流出し堆積した層とは明確に分層できるが、地山面との相違の見極めには困難を極めた。遺構はこの層中で検出された。遺物は**123**の土師質甕1点のみである。口径は40cmを測る。体部上半まで内湾して立ち上がり、頸部で外反し口縁端部に至る。端部は肥厚し面をもつ。ナデ調整を施す。口縁内面には荒い横刷毛目、外面には荒い縦刷毛目のち指頭圧ナデを施す。体部内面には細い横刷毛目が、外面には格子目叩き痕が見られる。砂粒を多く含み焼成はやや甘い。底部は丸底になると思われる。器表は全面で剥離が著しい。共伴遺物が無いので時期決定は難しいが、16世紀代と考えておきたい。

土器溜まり３（第22図）

土器溜まり３は8区調査区の西端で検出された。上層には、多量の腐植土と流土が堆積していた。石列３の上部にある緩いテラス状の所でまとまって見つかった。遺物は形に復元できるものは**124**以外になかったが、他にも土師質鍋破片が出土している。**124**は土師質擂鉢である。口径31．8cm、器高12．7cm、底径20cmを測る。口縁部は斜め方向に緩くやや内湾気味に立ち上がり端部へいたる。端部は内外にやや拡張し丸くおさめ、端面は中窪みする。口縁部外面はナデ調整を施す。体部外面は幅2mmの縦刷毛目のち指頭ナデをする。そのため凹凸が目立つ。口縁・体部内面には幅2mmの横刷毛目を施した後、7条を一組とする卸し目を底部から口縁に向かって放射状に入れる。底部内外面は調整不明である。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好である。時期は共伴する遺物が少なく、判断に困るが概ね16世紀代と考えている。



第22図　土器溜まり３・出土遺物（1／40・1／4）

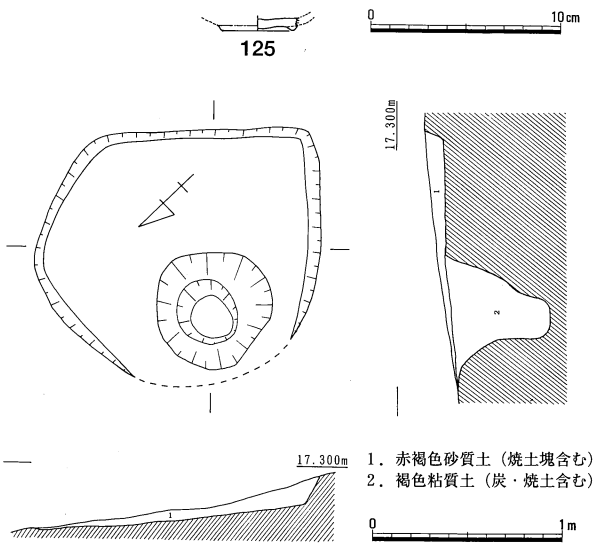
（４）土壙

土壙１（第23図）

土壙１は5区中央南よりに位置する。遺構の西側の一部を削平で失うが凡そ平面形は不整な五角形を呈するものと思われる。規模は最大長1．52m、最大幅1．36mを測る。断面形は皿状を呈するといえるが、底面は平坦ではなくやや起伏があり、南東から北西に向かって緩やかに傾斜する。検出面からの深さは最大13cmある。埋土は赤褐色の砂質土で焼土塊と炭を含んでいた。また、遺構の西側でピットを検出した。上面径64cm、底面径20cm、深さ52cmを測る。垂直に掘り込まれるのではなく、斜め上方から底部より20cm位の所まで傾斜をつけて掘り込まれ、そこからほぼまっすぐに底部にいたる。褐色粘質を呈する埋土中には細かい炭や焼土が混在していた。

遺物は第1層埋土中から土師質椀**125**が1点出土した。底面における出土遺物は何もない。

125は土師質椀の底部である。底径は3．8cmを測る。体部・口縁部は欠く。高台は断面鈍い三角形を呈する。かなり雑な作りである。胎土には細砂を含み焼成はよい。時期は14世紀の中頃と考えられる。



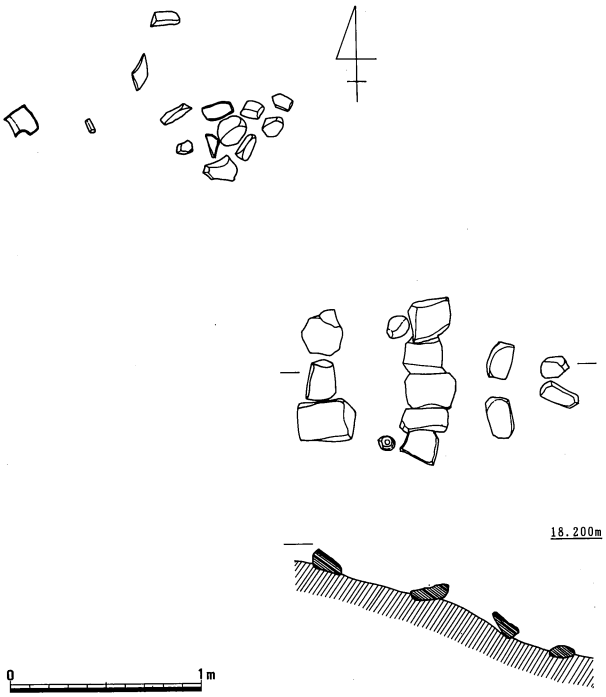
第23図　土壙１・出土遺物（1／40・1／4）

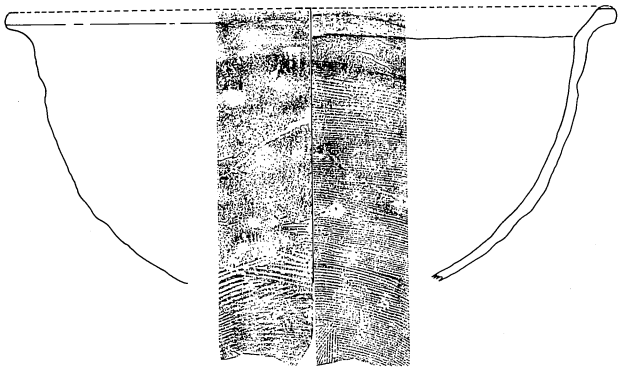
（５）石列

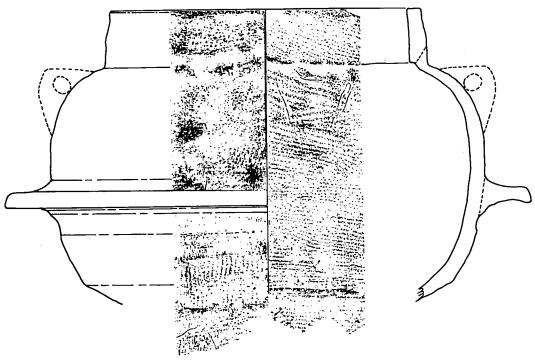
石列１（第24図）

石列１は1区中央やや南よりに位置し、貝塚１に近接する。平坦面から傾斜地へ移る変換点にある。旧耕土直下地山直上で検出された。石列は概ね南北方向に4つ並列している。長さは西から70cm、90cm、50cm、25cmを測る。石列間は内法で西から34cm、24cm、17cmを測る。石材は西から3列目が長辺を南北に向ける他は東西に向けている。材質は砂岩、花崗岩製の割り石や丸石を使用している。特に加工痕は見られない。遺跡周辺で採集可能であったと思われる。石列は西側では地山に接し安定するが東側では部分的に中に浮いている箇所がある。そこには土を充填し補強している。

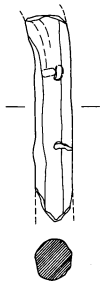
また、石列の北西部で石列に使用した石材と同質の石材が集積していた。遺物に接合関係が見られるので同時期のもと思われるが、作る前に集積したものか、石列を作った後に取り外して

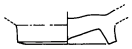



126


127

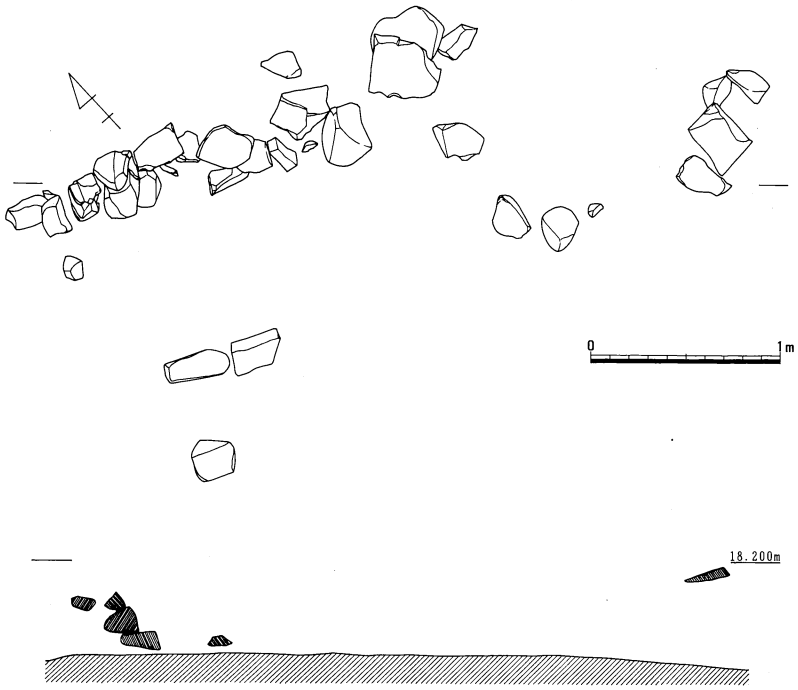
128


129


130

0　10cm

第24図　石列１・出土遺物（1／40・1／4）



第25図　石列２（1／40）

集積したのかははっきりしない。遺物は石列と集石から出土した。**126**は瓦質鍋である。口径33cmを測る。色調は黒色を呈する。口縁部内外面はナデ調整、体部外面は荒い縦刷毛目のち指頭ナデを施す。凹凸が目立つ。内面は細い横刷毛目調整である。底部は不整方向の刷毛目調整である。

127は土師質羽釜である。**128**は瓦質羽釜である。肩に把手がつく。**129**は土師質鍋の脚部である。**130**は青磁碗底部である。底径44mmを測る。遺構の時期は青磁碗が古い要素であるが、概ね16世紀代におさまるものと思われる。

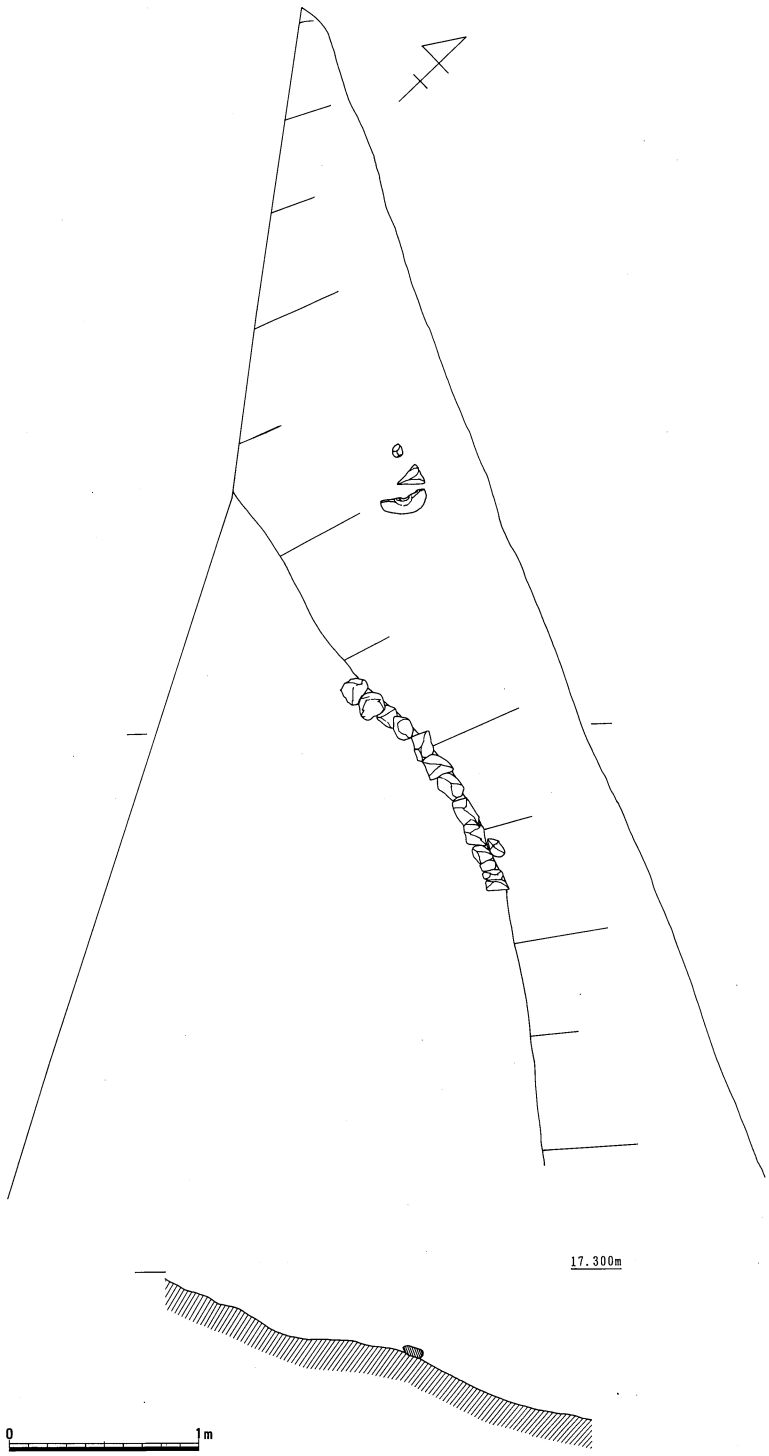
石列２（第25図）

石列２は、4区中央やや西よりに位置し、貝塚2に近接する。平坦面からやや下ったところにあり、概ね北西・南東方向軸でほぼ直線状に伸びる。南東部で南側の石列が貝塚2の貝層と接する。2列確認されうち北側の方が残りがよい。規模は2列ともほぼ同じである。北側のものは残存長2．7mを測る。石列間は北西部内法で80cm、南東部内法で110cmを測る。使用された石材は、砂岩・花崗岩製の平石や丸石で特に加工された痕跡は見られない。遺跡周辺で採集可能であった考えられる。石材の大きさは、小は縦横高さが10cm程度のものから、大は縦40cm、横30cm、高さ20cmのものが見られる。南東部へ向かうにつれに大きめの平石と丸石が使用されているようである。北側石列の北西部付近では石列の一部に火を受けた痕跡がみられるものがあった。また、それに付随して、石列周辺や下層では、焼土や焼土塊が炭と混在して見られた。

石列自体は、検出できた分が全てではなく、後世の掘削を受けているので本来はもう少し規模が大きかったと考えられる。また、遺物はまったく出土しなかった。石列の機能はよく分からないが、その一部に熱を受けた痕跡があることや周辺で焼土塊等が多量に見られること、貝塚中にも同じようなものが含まれていたことなどから、貝を処理するにあたっての何らかの関連性をもったものではないかと推測されるのである。

石列３（第26図・第27図）

石列3は、8区調査区の西端に位置し、遺跡のある段の最も北側にあたる。石列は調査区西端から緩やかに東に向かって傾斜した、段の上端部にありそこからややさがり段の下端にいたる。この付近には腐植土及び上方からの流土、昭和期に周辺で牛が飼われていたことによる堆肥土が分厚く堆積していた。石列は1列で東西軸に中央部でやや湾曲して伸びる。規模は残存長1．37mを測る。使用された石材は全て砂岩製である。大きさもみなほぼ同じで縦横約15cm、高さ約10cm内外の角石や丸石

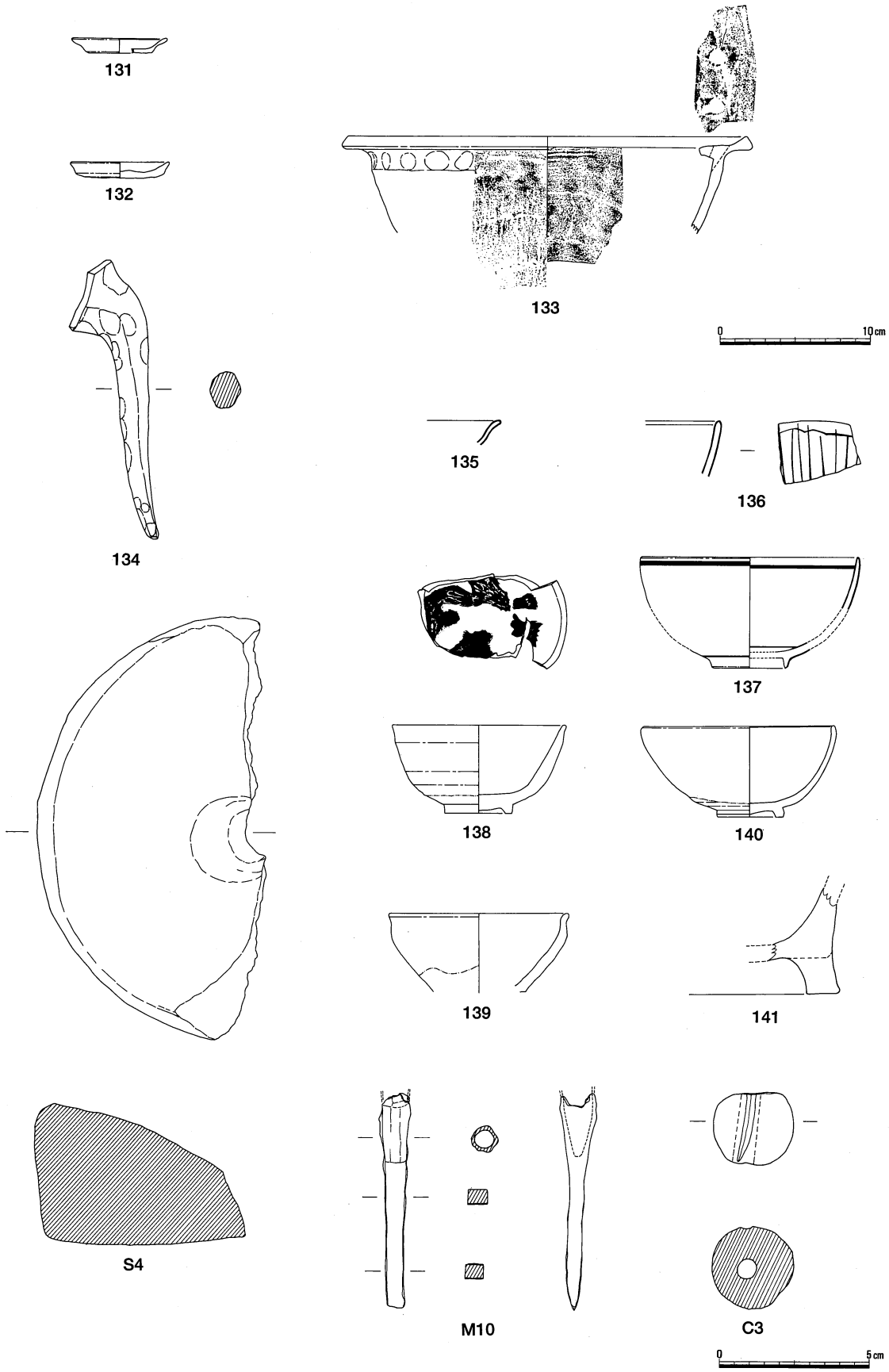


第26図　石列３（1／40）

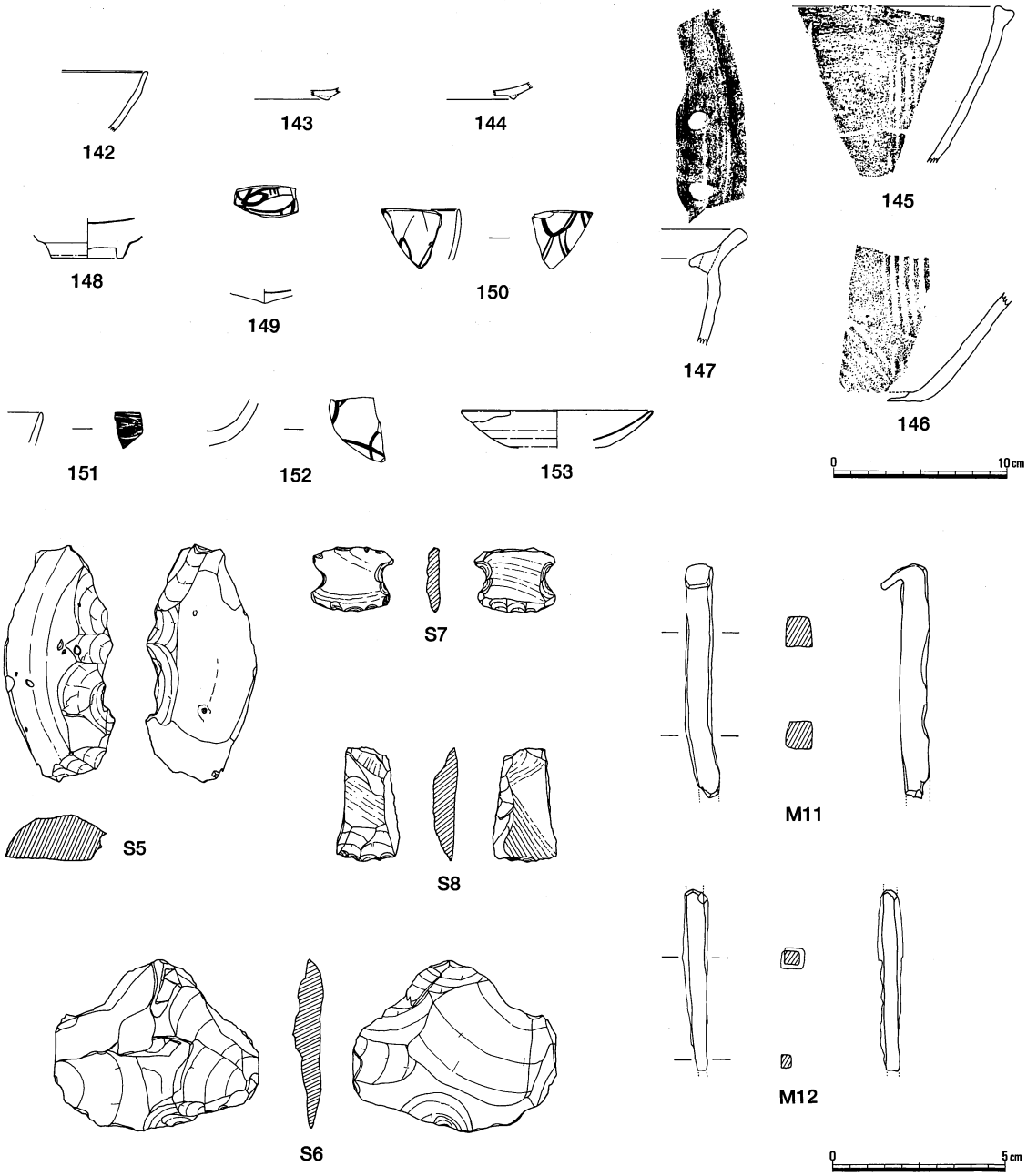
を使用している。特に加工した痕跡はみられない。色調は灰黄色を呈している。遺跡周辺で採集可能であったと思われる。また、この石列の北西部の法面で2個の砂岩製の石材と石臼が埋め込まれた状態で見つかっている。

遺物は石列周辺で検出された。遺構の直ぐ南側で検出された土器溜まり３の遺物と接合関係にある遺物はなかった。**131・132**は土師質小皿である。口径６．２cm～６．４cm、器高1cm～1．1cm、底径4．２cm～4．6cmを測る。器壁は最も薄いところは1．2mmしかない。底部はヘラ切り後ナデ調整である。**133**は土師質内耳鍋である。口径は26．6cmを測る。**134**は土師質鍋の脚部である。**135**は明代の白磁端反り皿である。**136**は明代の細蓮弁文青磁碗である。蓮弁文は退化し、線状を呈している。**137**は明代の染付碗である。**138・139**は瀬戸・美濃系天目茶碗である。**140**は肥前陶器である。体部下端に釉溜まりが見られる。**141**は脚のつく土師質甕の底部である。

Ｓ４は遺構の北西部で検出された豊島石製の石臼である。径28．5cm、高さ９．５cm、重量４．１ｋｇを測る。上面は中央部へと緩く傾斜し、中央には径３．５ｃｍの連結部がある。内外面に鑿による削痕が顕著に見られる。**Ｍ10**は有袋鑿である（注３）。残存長14．5cm、最大幅袋部2．5cm、刃部1．３cm、最大厚１cm、袋部内深4．3cm、重量70ｇを測る。**Ｃ３**は片方に浅い溝のある土錘である。遺構の時期は、出土遺物の内容から16世紀の後半頃が想定される。



第27図　石列３出土遺物（１／４・１／２）



第28図　Ａ地点包含層出土遺物（1／4・1／2）

3．Ａ地点包含層出土の遺物（第28図）

142～144は早島式土器椀の破片である。高台は断面鈍い三角形をなし粗雑に貼り付けた感じである。**145・146**は瓦質の擂鉢である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部で肥厚する。端面は中凹みをする。口縁部外面はナデ調整、体部外面は荒い縦刷毛目のち指頭圧ナデを施す。内面は細い横刷毛目を施したのちに6条一組とする卸し目を底部から口縁部に向かって放射状に入れる。外面は凹凸が目立つ。**147**は瓦質の内耳鍋である。**148**は龍泉窯系青磁碗の底部である。**149**は景徳鎮窯の染付蓮子碗の底部である。**150～152**は肥前陶磁である。**150**は肥前磁器で内外面に二重網目文を施し

ている。**151**は刷毛目唐津である。**152**は佐世保木原窯系の肥前磁器である（注４）。この他にも図示していないが、17世紀後半から幕末前後くらいまでの肥前陶磁器が破片ではあるが一定量出土している。**153**は関西系の灯明皿である。**Ｍ11・Ｍ12**は鉄釘である。**Ｍ11**は残存長6．8㎝、幅8㎜、厚さ8㎜、重量10ｇの折曲頭の角打釘である。先端部を欠損している。

Ｓ５はサヌカイト製のナイフ形石器の石核と思われるもので、井島遺跡出土石器に類似タイプがあるという（注５）。貝塚３付近出土である。**Ｓ６**は凝灰岩製の剥片である。8区出土である。同じく後期旧石器時代のものと思われる。**Ｓ７**はサヌカイト製の異形石器である。瀬戸内等の縄文前期の遺跡でしばしばみられるものである（注６）。確認調査時出土したものである。**Ｓ８**はサヌカイト製の楔形石器である。弥生時代のものと思われる。貝塚２付近出土である。図示していないがその他にも剥片が若干出土している。

また、貝塚周辺からは焼土塊などに混じって、不明土製品としか言いようのないものが出土している（巻末図版20－２参照）。その特徴は、いずれも不整形の小塊状をなし、焼成は良好であるが、その胎土が極めて荒く多くの3㎜～4㎜大の砂粒を含んでいて、径１㎝～３、４㎝の直線状に穿孔された平滑な面を塊の１ヶ所あるいは複数箇所に持つものと凸帯状のものを塊の一部に持つものがある。さらに熱を受け黒斑状のものが見られるものがある。現時点では全体像の分かるものはなく、他に類例を知らないのでこの土製品の用途は不明と言わざるを得ないが何かの鋳型の可能性もあるとの指摘をうけた（注７）。

（注１）間壁忠彦氏の御教示による。

（注２）大橋康二氏の御教示による。

（注３）金田善敬氏の御教示による。

（注４）乗岡実氏の御教示による。

（注５）藤原好二氏の御教示による。

（注６）藤原好二氏の御教示による。

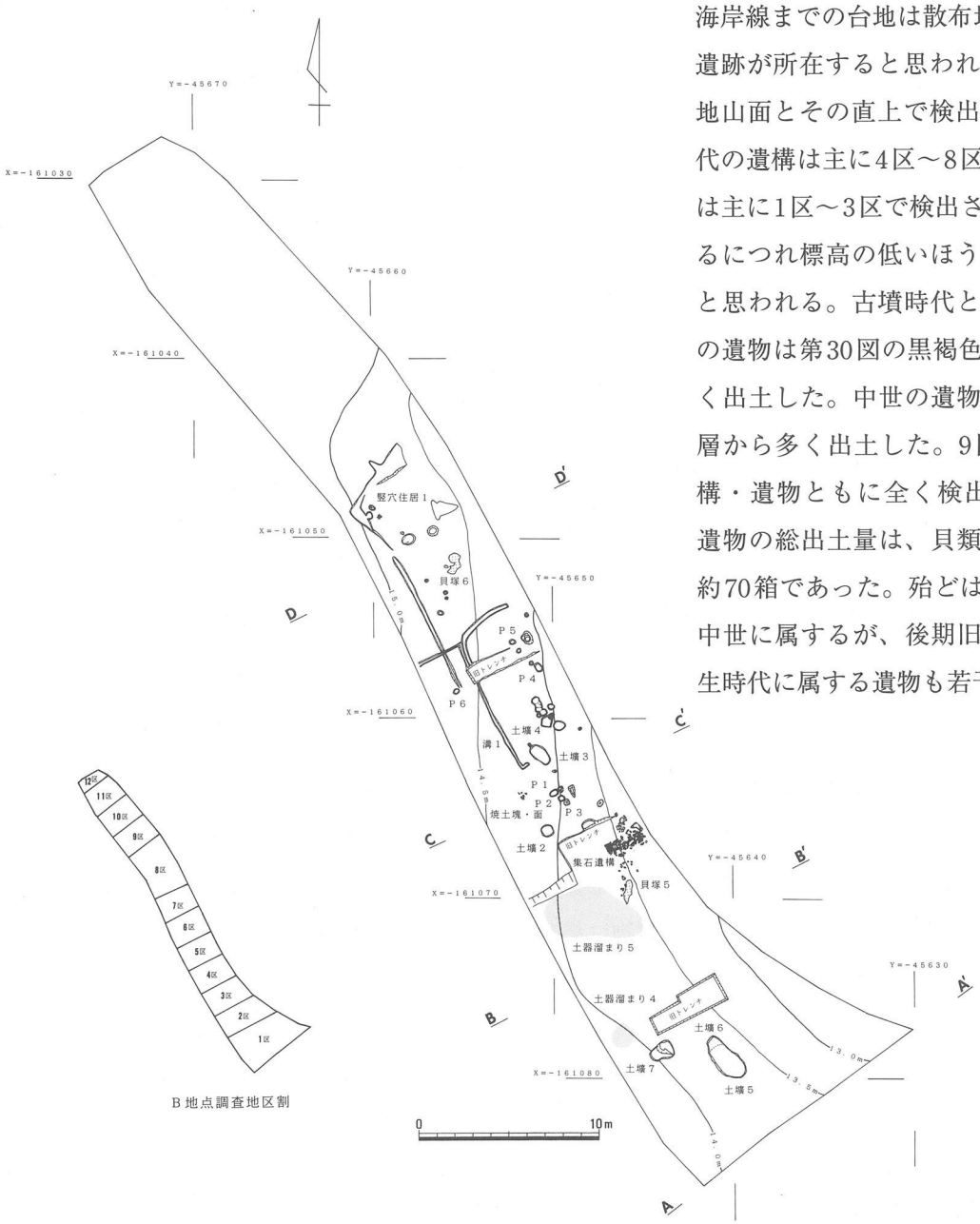
（注７）平井泰男氏、光永真一氏の御教示による。

第2節　左古谷遺跡B地点の調査

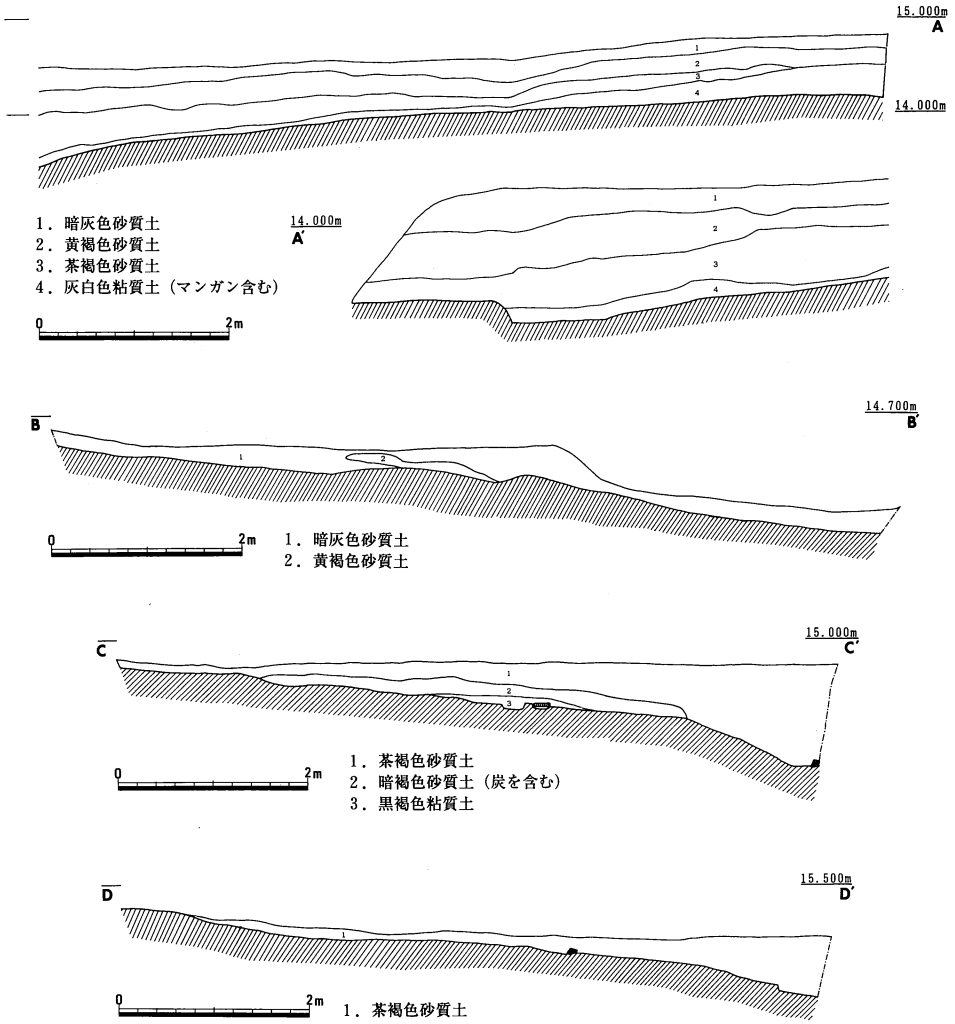
1．概　要

左古谷遺跡B地点は、開発区域の北東部に位置し、標高13m～15mの丘陵台地上にある。A地点との距離は枝尾根を一つ挟んで約250m程である。当時の海岸線までは約70mの距離である。遺跡の標高は北西から南東に向かって緩やかに下る。そこから250m程東に彦崎貝塚がある。また、付近では明治後期の国鉄宇野線の敷設工事に伴った大規模な土採りの痕が残る。削られた山肌や南東の尾根頂部には花崗岩の巨石が覗いている。地元の方たちが小祠を拵え信仰するほど立派なものであった。

海岸線までの台地は散布地となっており、遺跡が所在すると思われる。遺構は全て地山面とその直上で検出された。古墳時代の遺構は主に4区～8区で、中世の遺構は主に1区～3区で検出された。時期が下るにつれ標高の低いほうに移動したものと思われる。古墳時代とそれ以前の若干の遺物は第30図の黒褐色砂質土層から多く出土した。中世の遺物は茶褐色砂質土層から多く出土した。9区～12区では遺構・遺物ともに全く検出されなかった。遺物の総出土量は、貝類も含めコンテナ約70箱であった。殆どは古墳時代後期と中世に属するが、後期旧石器・縄文・弥生時代に属する遺物も若干出土した。



第29図　B地点遺構全体図（1／400）



第30図　Ｂ地点土層断面図（１／80）

２．古墳時代後期以前の遺構と遺物

（１）概　要

古墳時代以前の遺構は、５区調査区の南端で焼土塊・焼土面と小ピットが１ヶ所で検出されたのみであった。当初はそれぞれが時期の異なる遺構と思っていたが、周辺で他の遺構や遺物が全く検出されないことと焼土面の広がりが限定された範囲にしか見られないことから、これらの遺構は同時期のものではないかと判断したのであった。出土遺物は第31図のＳ９のみであった。精査を行ったがそのほかにはなにも検出されなかった。遺構は地山面で検出した。

（２）焼土塊・焼土面

焼土塊・焼土面（第31図）

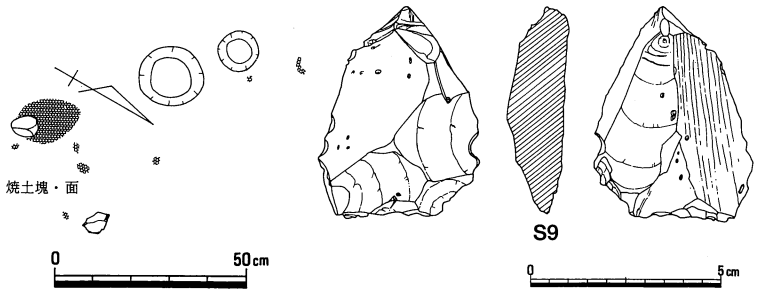
焼土の広がりは、30cm×80cmの極狭い範囲に見られる。標高は14．３mで北東に向かって緩く傾斜している。焼土塊は最大で長さ18cm、幅12cm、高さ15cmを測る。明赤褐色を呈している。古墳時代

後期の竪穴住居１の焼土に比べやや粘性があるようである。花崗岩の小石が上面で検出された。

また、焼土塊に近接して浅く小さいピット状のものを２つ検出した。１つは上面径16．2cm、底面径10cm、深さ７cmを測る。もう１つは上面径11cm、底面径6．5cm、深さ６cmを測る。いずれも擂鉢状を成すものである。埋土は灰色粘質土である。遺物・焼土・炭等は含まれない。遺物は第31図のＳ９のみである。焼土塊の北東側で出土した。

Ｓ９はサヌカイト製の剥片である。長さ6．7cm、最大幅4．3cm、最大厚1．5cm、重量31．４ｇを測る。全体的によく風化をしており、背・腹両面の表面には多くの縞状のものが走っている。腹面側の上部が打点になっている。腹面側で剥片を打ち欠いてとった後に残ったものである。

背面には自然面を一部残している部分が見られる。遺構に伴うと考えられる後期旧石器類はこの１点だけであった。



第31図　焼土塊・出土遺物（1／20・1／2）

3. 古墳時代後期の遺構と遺物

(1) 概　要

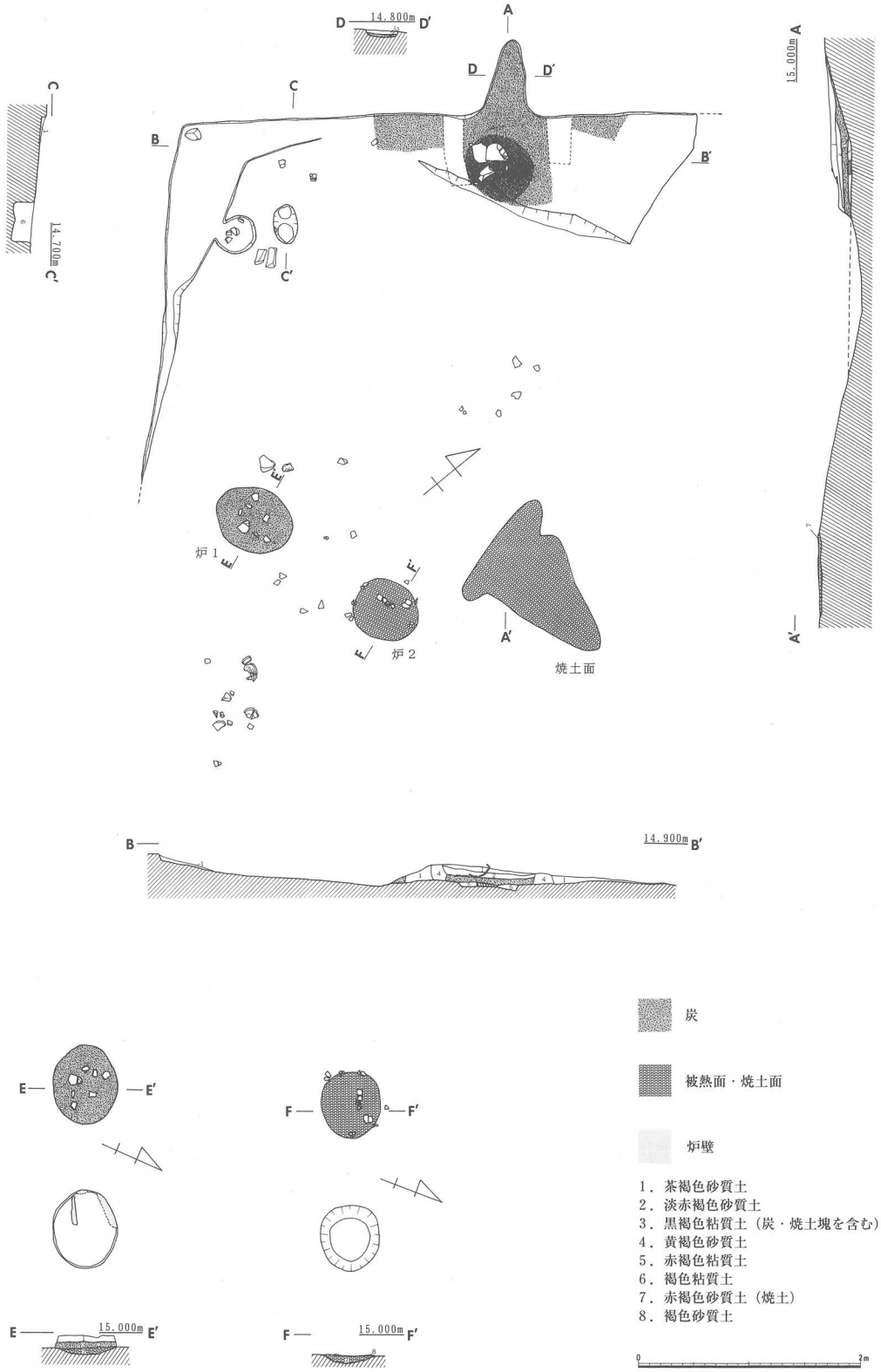
古墳時代後期の遺構は4区～8区で検出した。検出遺構は、竪穴住居１軒、土壙３基、ピット群である。遺構は全て地山面で検出した。特に調査区の西側では旧耕土下10cm程で地山面にいたる場所もあった。標高は8区が一番高く海抜15ｍほどで、徐々に東にむかって低くなり、海抜13ｍまで下がる。また、調査区外の下段の畑との比高差は２ｍほどある。８区は後世の掘削を大きく受けていた。

遺物は、須恵器、土師器、製塩土器、土製品、鉄器等が遺構及び包含層で出土している。

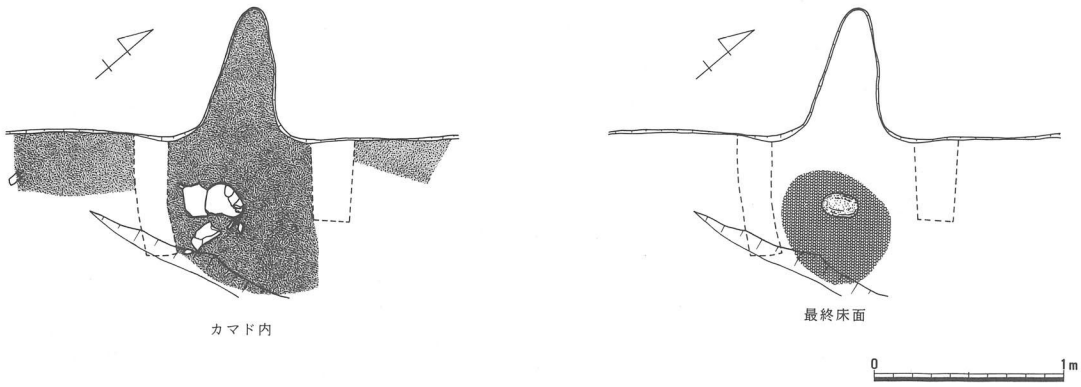
(2) 竪穴住居

竪穴住居１（第32図～第35図）

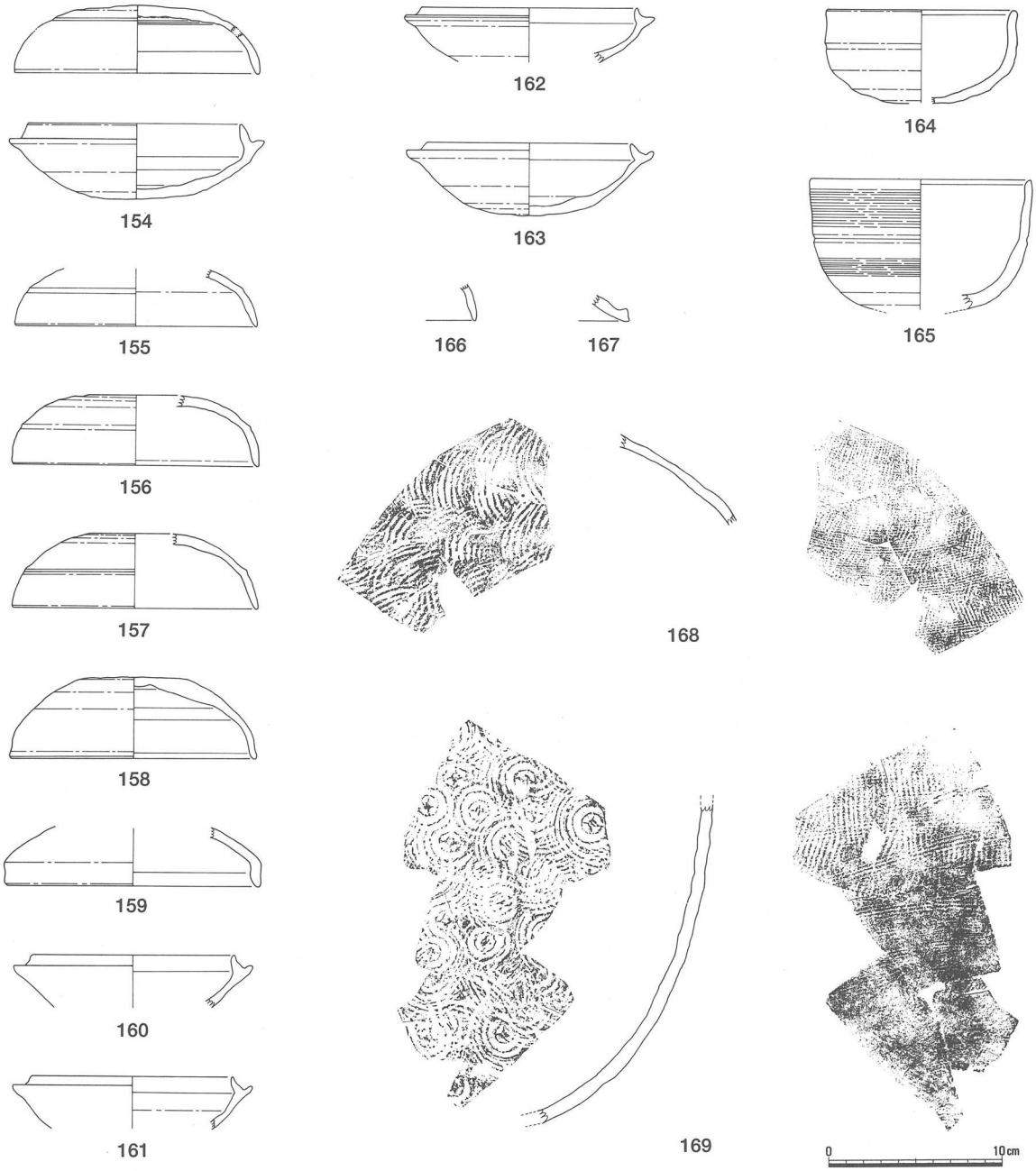
8区中央、標高15m付近に位置するカマド付きの竪穴住居である。単独で存在し付近には同時期の遺構はない。全体的に後世の削平がひどく東側から南東側にかけての部分では遺構面の肩が残っていない。平面形は方形を呈するものと思われる。規模は残存長で北西辺4．15ｍ、南辺3．32ｍを測る。遺構の深さは、最も残りのよいカマド付近でも15cmを測るに過ぎない。床面は掘削にもよるのだろうが平坦ではなく傾斜している。主柱穴は4つと考えられるが検出できたのは１つだけである。大きさは上面径40cm、深さ15cmである。床面に壁体溝は見られない。カマドは住居の北西壁のやや北よりに附設され、住居の外に煙道が70cm延びる。カマドに使用された粘土はかなり粗悪なもので１層との見極めが難しかった。カマドの袖は僅か15cmを残すのみで、上部は失われている。カマド本体の規模は袖前面を失っているが推定長1．3ｍ、幅70cm前後になろうかと思われる。カマド最下層では径65cmの範囲に強い被熱面が見られた。また、花崗岩製の支脚が一つ寝た状態で検出された。



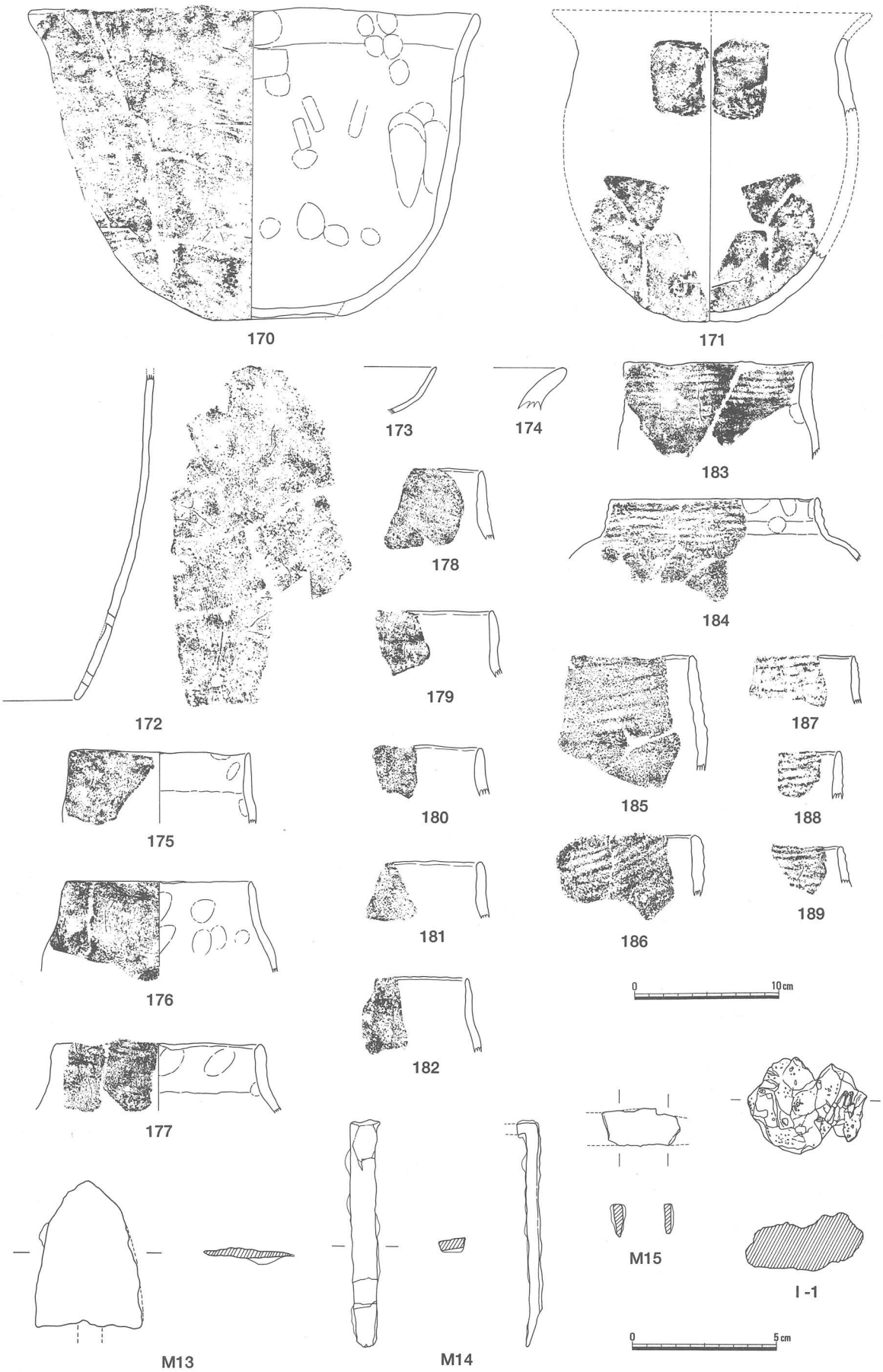
第32図　竪穴住居１（１／60）



第33図　カマド付近拡大図（1／40）



第34図　竪穴住居1出土遺物（1）（1／4）



第35図　竪穴住居１出土遺物（２）（１／４・１／２）

カマド付近では炭の面が、カマド内では炭の層が煙道まで見られた。この中からは炭化材が検出されている。煙道は断面皿状を呈し、住居外へとレベルが上がる。また、住居の南側で炉２基と焼土面を検出した。レベルはカマド付近よりやや高い。

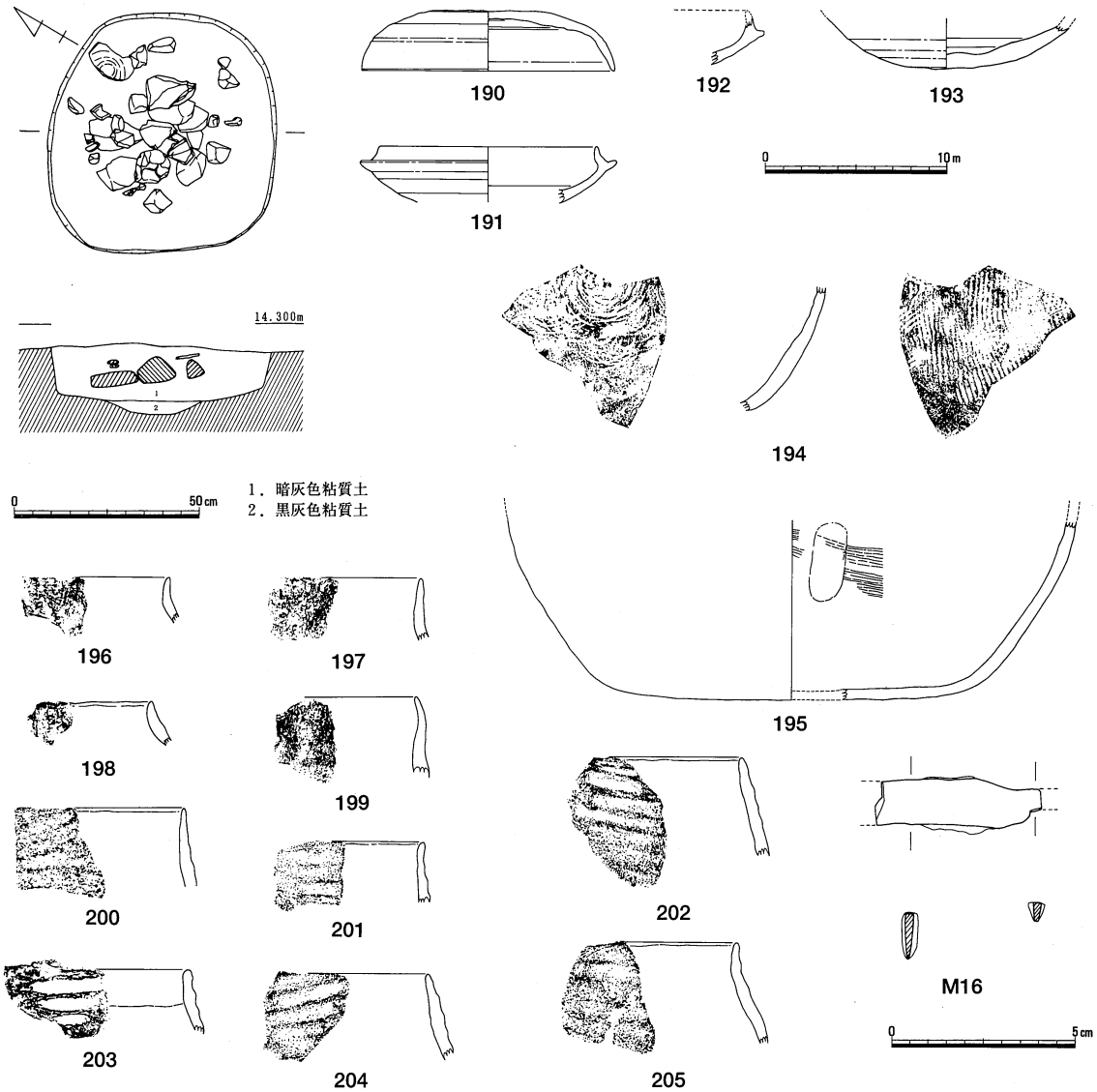
炉１は平面径60cmの円形を呈す。断面は深さ6cmで浅い擂鉢状をなす。炭・焼土を含む黒褐色粘質土と赤褐色砂質土が堆積していた。底面付近では炉壁の一部が確認された。上部構造は不明である。炉２は平面径55cmの円形を呈し、断面は深さ７cmで浅い擂鉢状をなす。赤褐色砂質土が堆積していた。焼土面は長さ１．４m、幅１m、深さ4cmを測る。上部構造は不明である。遺物はカマド及び柱穴、炉、床面で検出された。

154～169は須恵器である。**154**は杯蓋、杯身でセットになる。杯蓋は口径14．1cm、器高4．5cm、杯身は口径12．8cm、器高4．4cmを測る。天井部と底部は丸みをもち、回転ヘラ削りを施す。杯身の立ち上がりは内傾する。焼成は不良である。**155～159**は杯蓋である。口径14．2cm～14．8cmを測る。なお、**155～157**はやや古い要素を持つ。**160～163**は杯身である。口径11．8cm～12．6cmを測る。立ち上がりは**154**よりやや短く内傾ぎみに外反する。炉周辺床面と柱穴付近床面で出土した。**164・165**は鉢である。**165**は脚がつく。外面には1条の沈線が入り、回転カキメ調整を施す。住居西側床面で出土した。**166**は蓋杯の小片で炉２出土である。**167**は高杯の脚小片である。埋土中からの出土である。**168・169**は甕である。**168**はカマド内出土とカマド外西側の炭面から出土したものが接合したものである。**169**は住居中央部床面出土と炉１周辺地山面出土のものが接合したものである。内面には車輪文叩きが入る。４つの線状の放射状文を同心円文の中央圏に収めるものである（注１）。岡山県内でも類例が報告されている（注２）。

170は土師質の深鉢形土器である。カマド内より押し潰れた状態で出土した。焼成や胎土は製塩土器とよく似る。口径30．8cm、器高21．6cm、底径9．2cmを測る。器壁は口縁部と体部で1cm前後、底部で5mm前後である。底部からやや内湾気味に立ち上がり、体部でやや直線的になり口縁部は外反して端部は丸く収める。底部はやや窪む。口縁部外面は指頭圧ナデ調整である。体部外面は平行及び斜平行叩きを施した後指頭圧ナデを施し叩きのナデ消しをしている。底部にも叩きが入る。内面は外面より強い指頭圧ナデ調整を全面に施し圧痕が著しい。製作工程は先ず底部用の粘土塊を置き粘土紐を輪積みにしていって作られたと思われる。外面には黒斑や2次的被熱面が顕著に認められる。胎土には砂粒を多く含み、器表全面で剥離が著しい。**171**は土師器の甕である。炉2出土である。砂粒を多く含み、色調は灰黄色を呈す。器壁は1cmほどである。底部外面は2次的被熱を受けている。**172**は土師器の甑である。炉1出土である。底部付近には小孔が穿たれている。**173**は高杯の破片である。床面出土である。**174**は甕の破片である。カマド内出土である。

175～182は無文の製塩土器である。**177～179**は口縁部に板状工具による叩きが入る。**183～189**は平行叩きのものである。3mm～７mm幅のものがある。器壁は４mm～９mmを測る。内面は顕著な指頭圧ナデを施す。形態には口縁部から直線上に底部に向かうもの、緩い肩を持つもの、明瞭な肩を持つものがある。なお、**175**は搬入品と考えられるものである（注３）。床面、カマド内、柱穴内、炉2からの出土である。**M13**は平根系の長三角形式鏃である。埋土中出土である。**M14**は鋤である（注４）。床面出土である。**M15**は刀子である。刃部は断面三角形を呈する。先端と茎部を欠損している。床面出土である。**I 1**は鉄滓である。製錬滓と思われる（注5）。床面近くの出土である。

出土遺物の内容から、竪穴住居1の時期は6世紀後半から7世紀初頭前後頃であると考えられる。



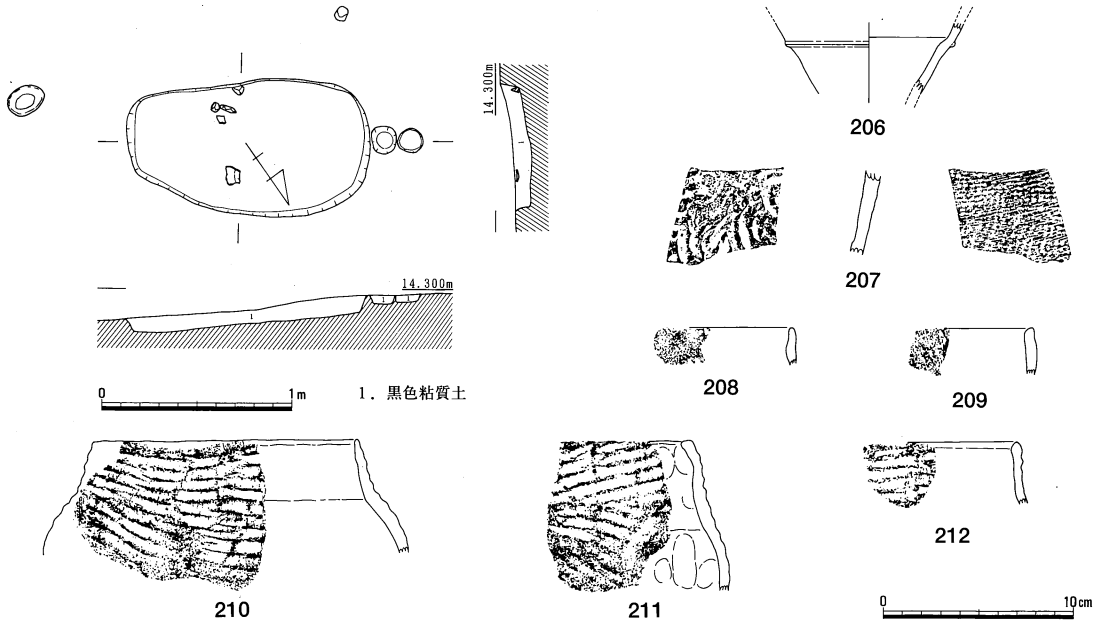
第36図　土壙２・出土遺物（１／２０・１／４・１／２）

（３）土　壙

土壙２（第36図）

土壙２は4区中央やや西よりに位置し、ピット群と近接する。標高は14．18ｍにある。平面形は、径66㎝の不整円形を呈する。断面形は皿状を呈するが、中央部付近は浅い擂鉢状に窪む。検出面からの深さは中央部で18㎝を測る。埋土は、暗灰色粘質土と黒灰色粘質土からなる。また、土壙内の中央部付近で砂岩・花崗岩製の拳大の礫が20個ほど集中して見られた。それらには特に加工した痕跡は認められない。遺物はこの礫中と上面から出土した。

190～194は須恵器である。**190**は杯蓋で口径13．6㎝、器高3．3㎝を測る。天井部と口縁部の境に浅い凹線が入る。天井部は平坦でヘラ削りが施される。**191**は杯身である。口径11．8㎝を測る。**192**は杯身の口縁部破片、**193**は底部である。**194**は甕の体部破片である。**195**は土師器の壺か甕の底部である。平底である。**196～199**は無文の製塩土器である。**199**には板状工具による叩きが見られる。**200～205**は平行叩きの入る製塩土器である。叩きの幅は7㎜～9㎜とやや広めである。製塩土器の器壁は3㎜～7㎜を測る。形態には、口縁部から直線的に斜め方向に向かい底部へ至るもの、口縁

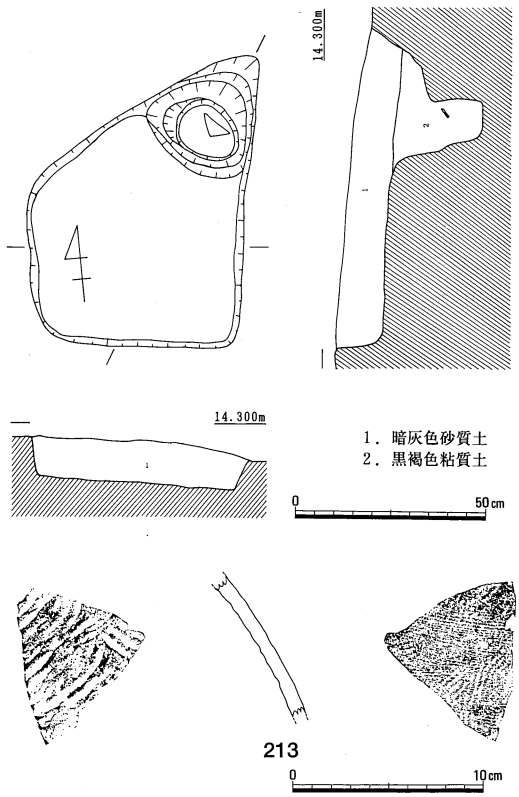


第37図　土壙3・出土遺物(1／40・1／4)

部が緩く外反するもの、口縁部が内湾するものが見られる。内面にはいずれも指頭圧ナデを施し、器表の凹凸が顕著である。焼成は良好、砂粒を多く含み、全面に剥離が認められる。**M16**は刀子である。刃部の断面は三角形を呈する。関の断面形は長台形の角関である。先端と茎部を欠損する。

土壙3（第37図）

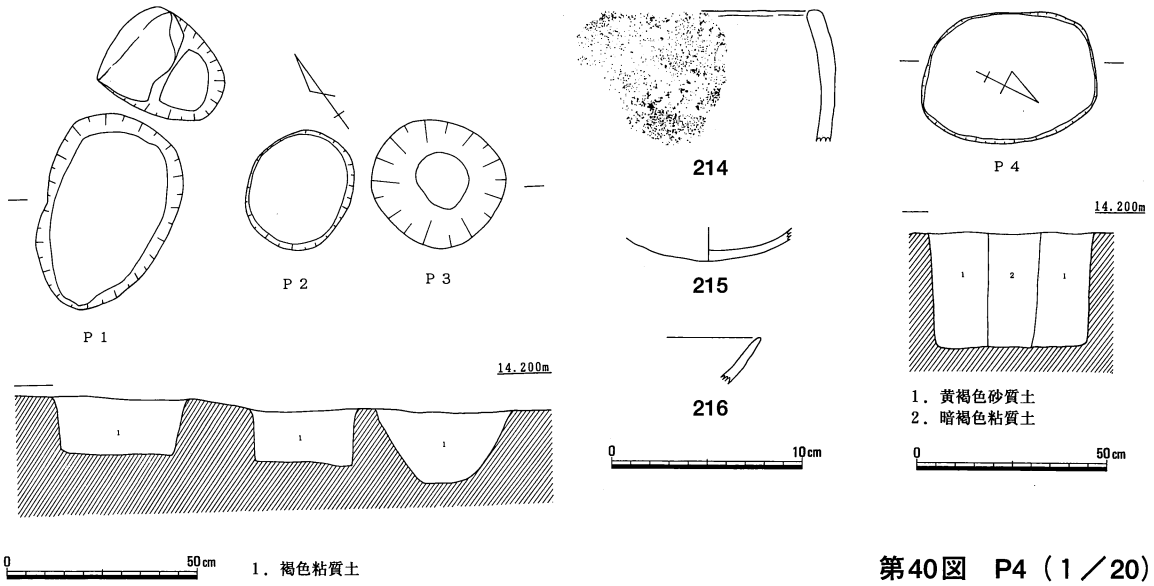
5区中央やや南よりに位置し、ピット群に近接する。平面径は長楕円形を呈する。規模は、長さ1.28m、幅70cmを測る。断面形は皿状を呈するが、底面は平坦ではなく緩い起伏を持ち、北東部側へ向け傾斜する。検出面からの深さは最大9cmを測る。埋土は黒色粘質土である。また、遺構の北西側でピットを2つ検出した。径15cm、深さ5cmと径13cm、深さ4cmを測る。断面皿状をなす。遺物は遺構内で検出した。**206**は須恵器のハソウの破片である。**207**は甕の破片である。**208**・**209**は無文の製塩土器である。**210**～**212**は2cm×5mm角の格子目叩きの入る製塩土器である。全体のプロポーションは、直線的に底部に向かうもの、緩い肩部を持つものがある。また、口縁端部は先窄まりに丸く収めるもの、肥厚して面をもつもの等が見られる。また、この遺構に伴う遺物ではないと考えられるが、近接して**S19**・**S20**（第54図）が出土した。**S19**は安山岩製の石皿である。**S20**は花崗岩製の磨石である。磨石は5cm程の深さで地山面に刺さっていた。



第38図　土壙4・出土遺物（1／20・1／4）

土壙4（第38図）

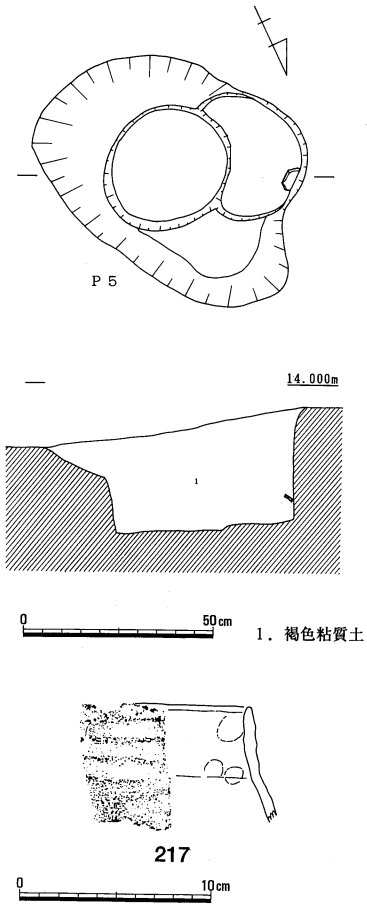
土壙4は、5区中央北よりに位置し、土壙3、



第39図　Ｐ１～Ｐ３・出土遺物（１／20・１／４）

第40図　P4（１／20）

ピット群に近接する。平面形は台形を呈する。規模は長辺77cm、短辺40cmを測る。断面形は皿状を呈するが、底面は平坦ではなく起伏がある。東側へ緩く傾斜する。検出面からの深さは最大で11cmである。埋土は暗灰色砂質土である。また、北東部でピットを１つ検出した。上面径25cm、検出面からの深さ23cmを測る。遺物はピット内から１点出土した。**213**は須恵器の甕の体部破片である。



第41図　Ｐ５・出土遺物（1／20・1／4）

（４）ピット

Ｐ１（第39図）

P1は4区中央西よりに位置し、Ｐ２・Ｐ３と近接する。平面形は不整円形を呈し、長軸55cm、短軸35cm、深さ15cmを測る。底は平坦である。**214**は厚手無文の製塩土器で埋土中出土である。

Ｐ２（第39図）

Ｐ２はＰ１に近接する。平面形は径27cmの円形を呈し、深さは最大15cmを測る。底は平坦ではなく起伏が認められる。**215**は器壁6mmを測る製塩土器の底部である。

Ｐ３（第39図）

平面形は径35cmの円形をし、深さ18cmを測る。断面形は擂鉢状をなす。遺物は**216**の土師器高杯破片1点だけである。

Ｐ４（第40図）

5区北側にあり、径約35cmの円形で、深さ30cmを測る。2層は木質が腐朽したものと考えられる。

Ｐ５（第41図）

P5はP4に近接する。段掘りにし、上面からの深さ25cmを測る。**217**は幅1cmの平行叩きのある製塩土器口縁部破片である。

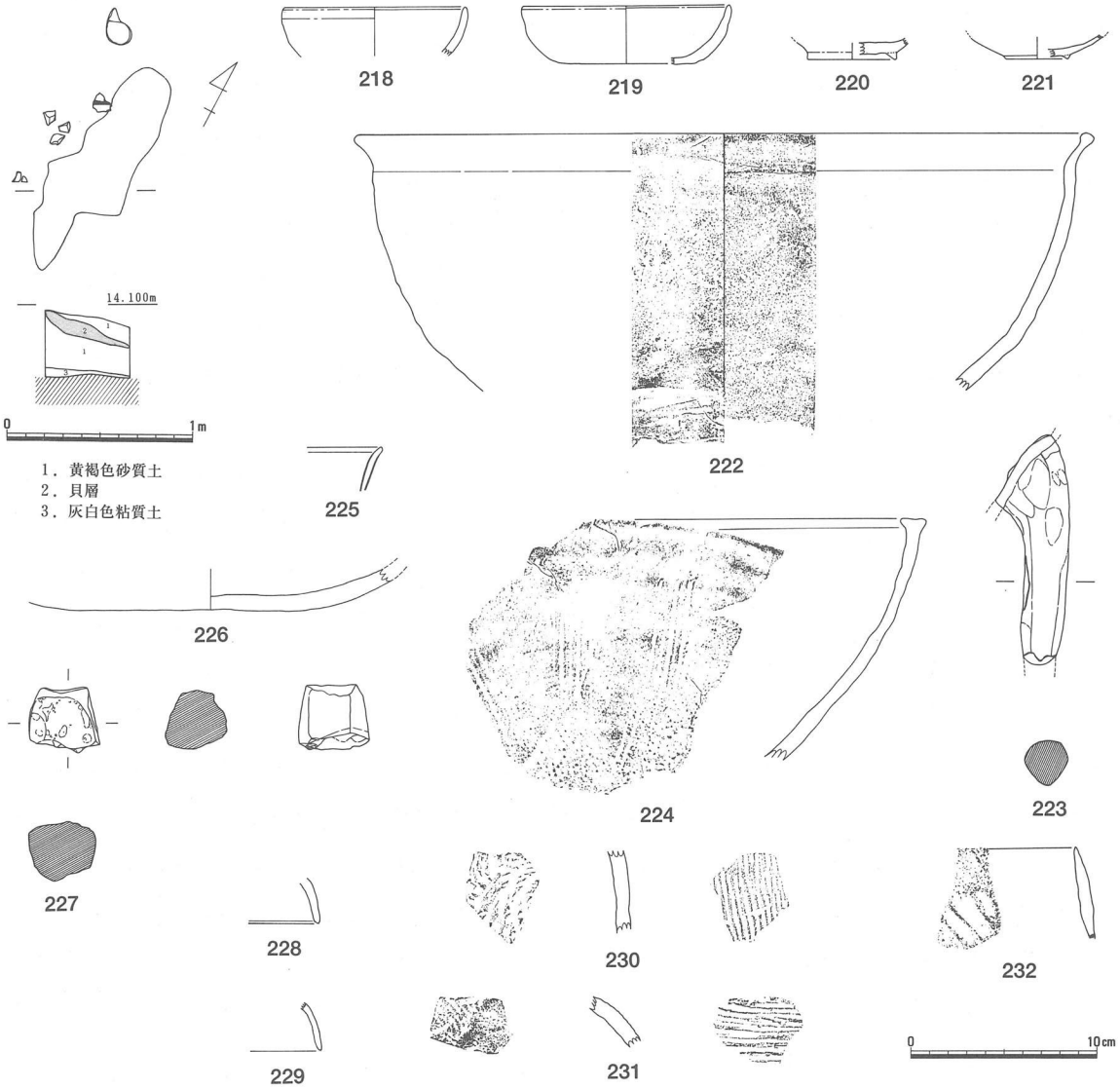
4．中世の遺構と遺物

（1）概　要

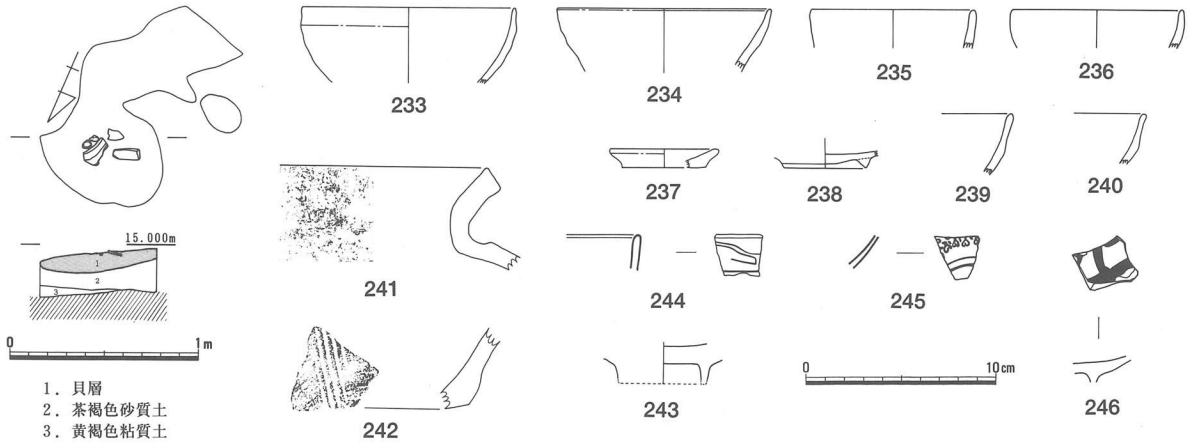
中世に属する遺構は、調査区の1区～3区、5区～7区で検出された。最も標高の高いところに位置するのは貝塚6である。4区辺りで地山の色調と土質に変化が見られる。1区～3区では中世以前の遺構面を削平・造成したうえに中世の遺構面がのっているようである。遺構は地山面及びその直上で検出された。また、1区～3区の地山にはマンガン質のものが多く見られた。検出遺構は、貝塚2ヶ所、土壙3基、溝1条、ピット、土器溜まり2ヶ所、集石遺構1ヶ所である。

（2）貝　塚

貝塚5（第42図）



第42図　貝塚5・出土遺物（1／40・1／4）



第43図　貝塚６・出土遺物（１／40・１／４）

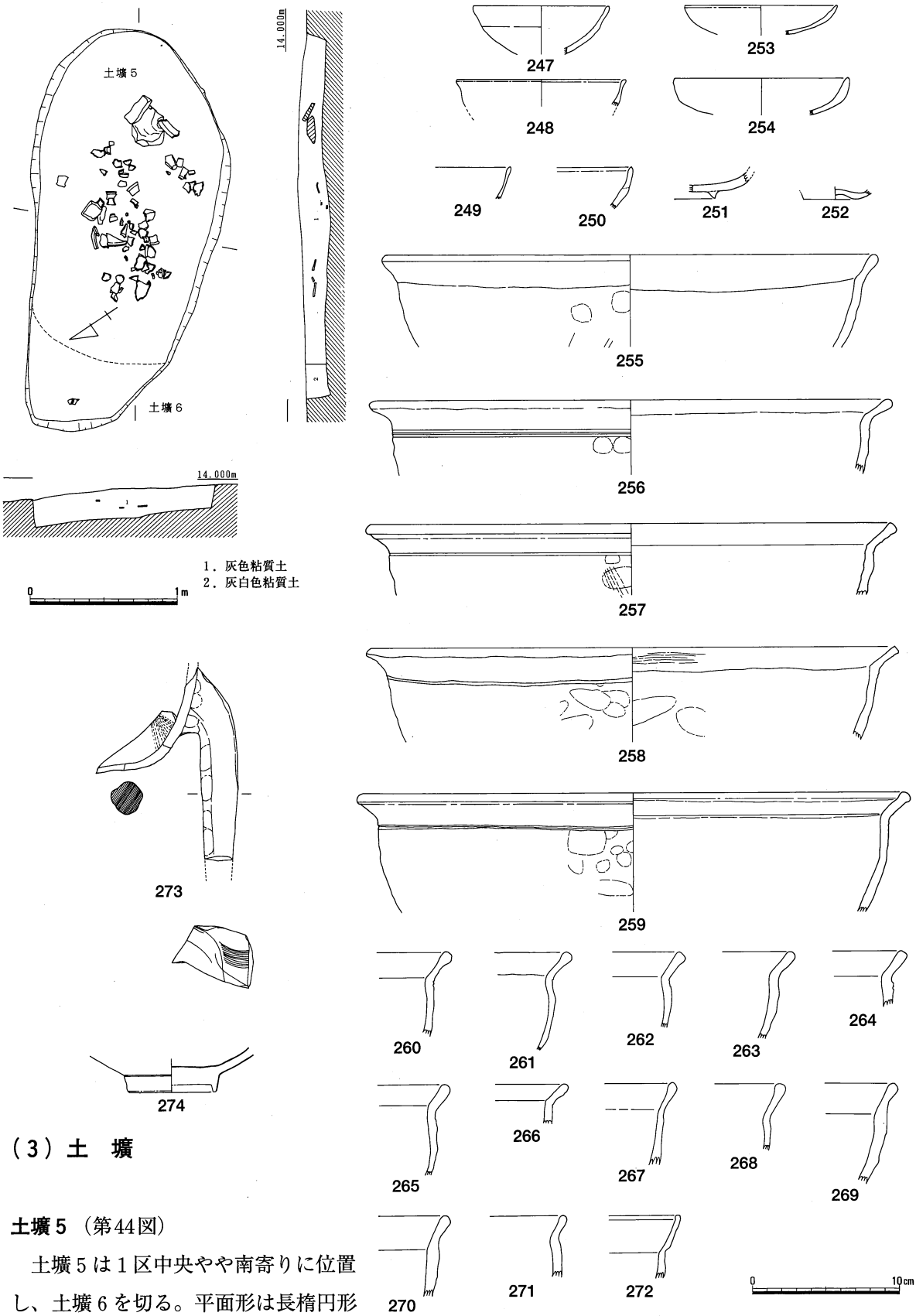
貝塚5は3区中央やや北よりに位置し、土器溜まり５及び集石遺構に近接する。貝塚上面レベルは14．1m、検出面は長さ1．25m、幅45cm、貝層の最大厚8cmを測り、西から東へ傾斜する。貝種はウミニナ、アカニシ、ゴマフダマガイ、ハイガイ、マガキ、ハマグリ、オキシジミが見られた。遺物は、黄褐色砂質土、貝層、灰白色粘質土から出土した。また、貝層からは炭化材も検出している。

218・220・221は早島式土器椀である。高台は断面三角形を呈す。**219**は土師質小皿である。**222**は土師質鍋である。口縁部外面には炭化物が付着している部分が認められる。**223**は鍋脚部である。**224**は土師質擂鉢である。内面に5条一組の卸し目を底部から口縁部に向けて放射状に入れる。淡黄色を呈し、焼成良好である。**226**は土師質盤である。**225**は舶載の口禿白磁碗である。**227**は焼土である（注６）。また、径1cm程の小鉄滓も出土している。以上は1層・2層出土である。**228～231**は古墳時代後期の須恵器である。**232**は幅8mmの斜平行叩きの入る古墳時代後期の製塩土器である。これらの遺物は3層出土である。貝塚５の時期は出土遺物の内容から14世紀前半～中葉頃と考えられる。

貝塚６（第43図）

貝塚６は７区中央西寄りに位置する。貝塚上面レベルは標高15m、検出面は長さ1．15m、幅90cm、貝層の最大厚10cmを測り、西から東へ傾斜する。貝種は大きめのハイガイとマガキを主に、少量のウミニナ、アカニシ、ゴマフダマガイ、オキシジミが見られた。また、貝層中からは、微小の動物遺存体や炭化材等も検出されている。遺物は貝層及び上面、茶褐色砂質土より出土した。本来はもう少し広がりをもっていた貝塚であろうと思われる。

233～240は土師質土器である。**237**は小皿である。口径5．2cmを測る。その他は早島式土器椀である。口径8．6cm～11．3cmを測る。高台は断面三角形を呈し雑なナデ調整を施す。**241**は亀山焼の甕である。焼成は不良である。内外とも器表の剥離が著しく調整不明である。**242**は備前焼擂鉢底部破片である。**243**は肥前の陶胎染付碗である。**244**は明代の雷文帯青磁碗である。**245**は景徳鎮窯染付蓮子碗の破片である。**246**は肥前磁器である。**244**は15世紀～16世紀前半、**245**は16世紀前半～中葉、**243**は18世紀前半、**246**は1630～1650年代との鑑定をそれぞれ受けた（注７）。以上の出土遺物内容の検討から、貝塚６の時期は14世紀前半から中葉頃と考えられる。また、貝塚６に直接伴わないと思われる新しい時期の遺物の上面での検出は、この貝塚形成以後に周辺で何らかの人工的作用を受けた時に混入したのではないかと推測されるのである。

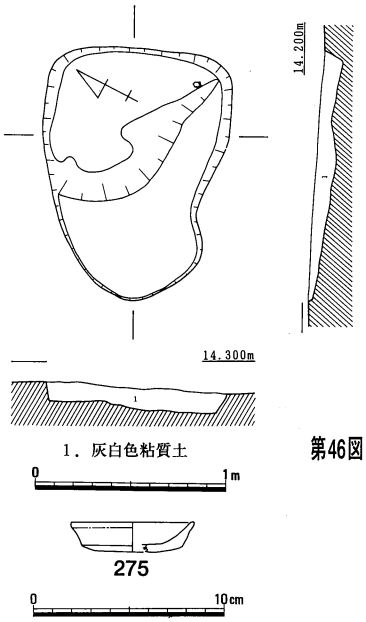


第44図　土壙5・6・出土遺物（1／40・1／4）

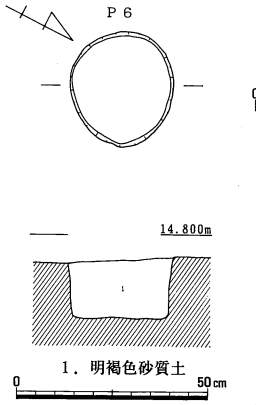
（3）土　壙

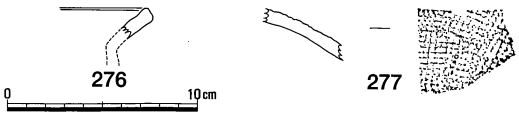
土壙5（第44図）

土壙5は1区中央やや南寄りに位置し、土壙6を切る。平面形は長楕円形を呈する。規模は最大長2．26m、最大幅1．36mを測る。断面形は皿状を呈すると言えるが、底面は平坦ではなく起伏があり、南西から北東に向け傾斜している。検出面からの深さは最大21cmを測る。埋土は灰色粘質土である。遺物は、



第45図　土壙７・出土遺物（1／40・1／4）





第46図　Ｐ６・出土遺物（1／20・1／4）

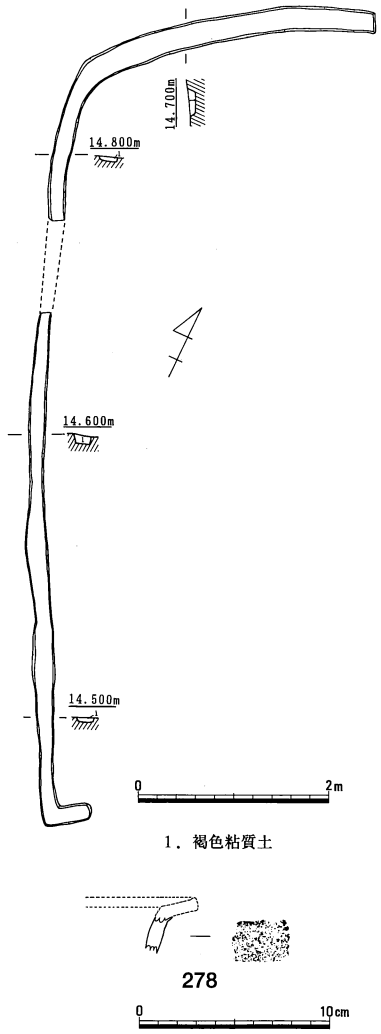
砂岩製の石４点とともに遺構の中央部で纏まって出土した。4つの石には被熱面や加工痕は見られない。**247～252**は土師質椀である。**247・248**は早島式土器椀で、口径９cm～11.4cmを測る。**252**はヘソ椀底部である。**255～272**は土師質鍋である。口径33cm～36．8cmを測る。色調は灰黄色・淡黄色を呈す。口縁部及び体部内面は丁寧なナデ調整を施す。体部外面は荒い縦刷毛目ののち指頭圧ナデを施す。内外面に黒斑や炭化物の付着が見られるものもある。口縁部は短く、肥厚し端部を丸く収め、内面は浅く中窪みし、口縁直下にヘラ状工具による一条ないし二条の沈線が入るものが多く見られる。体部外面は凹凸が目立つ。**273**は土師質鍋脚部である。出土遺物の内容から、土壙５の時期は、14世紀前半～中頃の時期が想定される。

土壙６（第44図）

土壙５に切られている。残存最大長55cm、幅約１m、深さ17cmを測る。埋土は灰白色粘質土である。遺物は底面で**274**が１点出土したのみである。**274**は白磁碗底部である。内面には劃花文が入る。高台内面と畳付けは釉を掻きとるが、高台外面では掻きとりきれていない部分がある。出土遺物の内容及び土壙５に切られていることから、土壙６の時期は土壙５より古いと考えられる。

土壙７（第45図）

１区西寄りに位置し、土壙５・６、土器溜まり４に近接する。平面形は不整楕円形を呈する。規模は最大長1．34m、最大幅99cmを測る。断面形は皿状を呈するが底面は平坦ではなく起伏があり、南東から北西に向け傾斜している。検出面からの深さは最大で11cmを測る。埋土は灰白色粘質土である。遺物は底面より**275**が１点出土した。**275**は土師質小皿である。口径6．2cmを測る。共伴遺物がなく時期決定に窮するが、ほぼ土壙５と同時期と考えている。

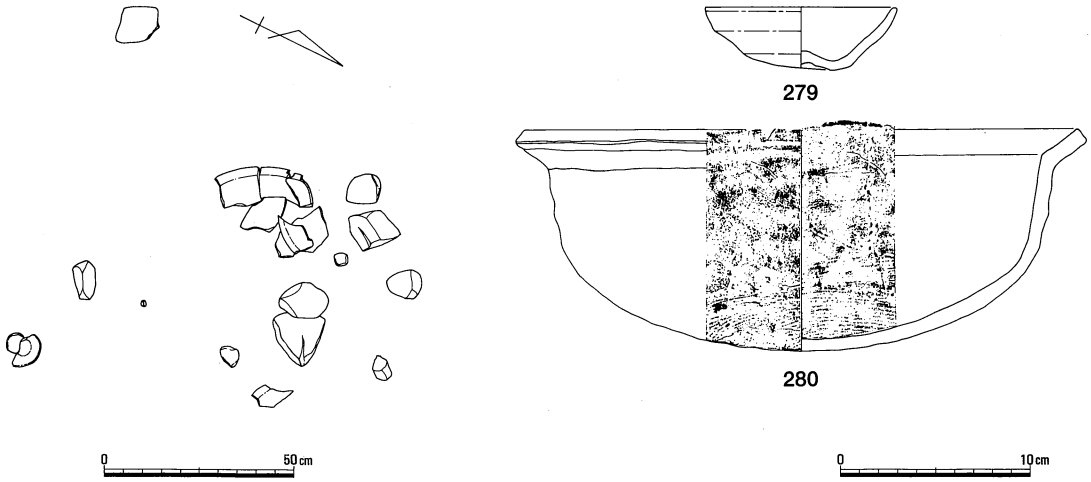


第47図　溝１・出土遺物（1／80・1／4）

（４）ピット

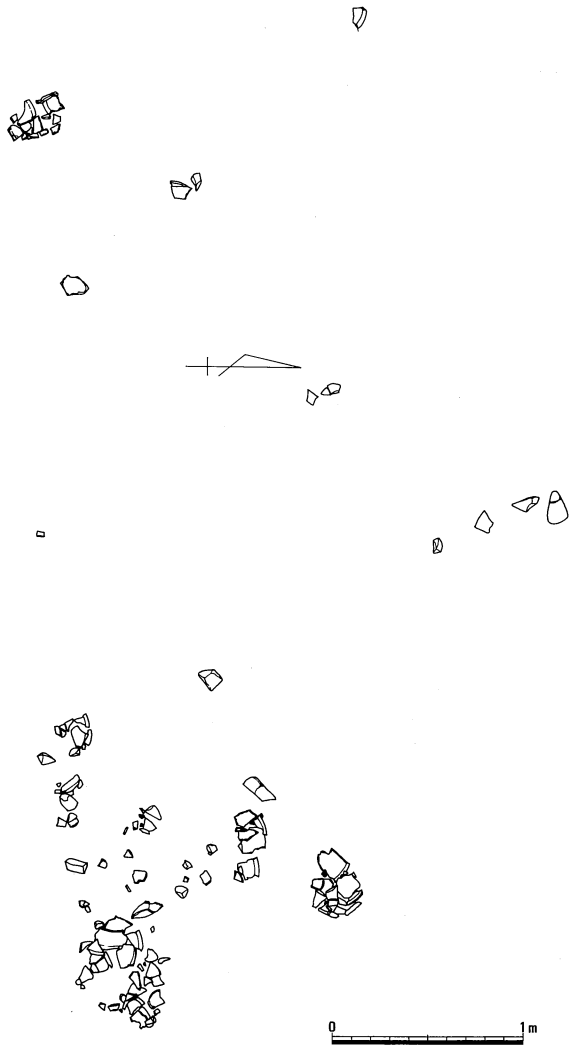
Ｐ６（第46図）

Ｐ６は6区西端付近に位置し、溝１に近接する。標高は14．72



第48図　土器溜まり4・出土遺物（1／20・1／4）

mにある。平面形は径27cmの円形で深さ16cmを測る。ほぼ垂直に掘り込むが、底面は平坦ではない。埋土は明褐色砂質土である。遺物は底面近くで**276**が、埋土中で**277**が出土した。**276**は土師質鍋の口縁部破片である。**277**は亀山焼甕胴部破片である。



第49図　土器溜まり5（1／40）

（5）溝

溝1（第47図）

溝1は5区・6区の中央やや西寄りに位置し、平面形は逆L字形をなす。全長約11．6m、最大幅29cm、深さ最大10cmを測る。底は平坦ではなくやや丸みをもつ。北西から南東に向かって緩く傾斜をもつ。比高差は30cmほどある。

埋土は褐色粘質土である。遺物は溝中より1点出土した。**278**は土師質鍋の口縁部破片である。小片のためと他の共伴遺物がないので明確な時期比定は困難である。

（6）土器溜まり

土器溜まり4（第48図）

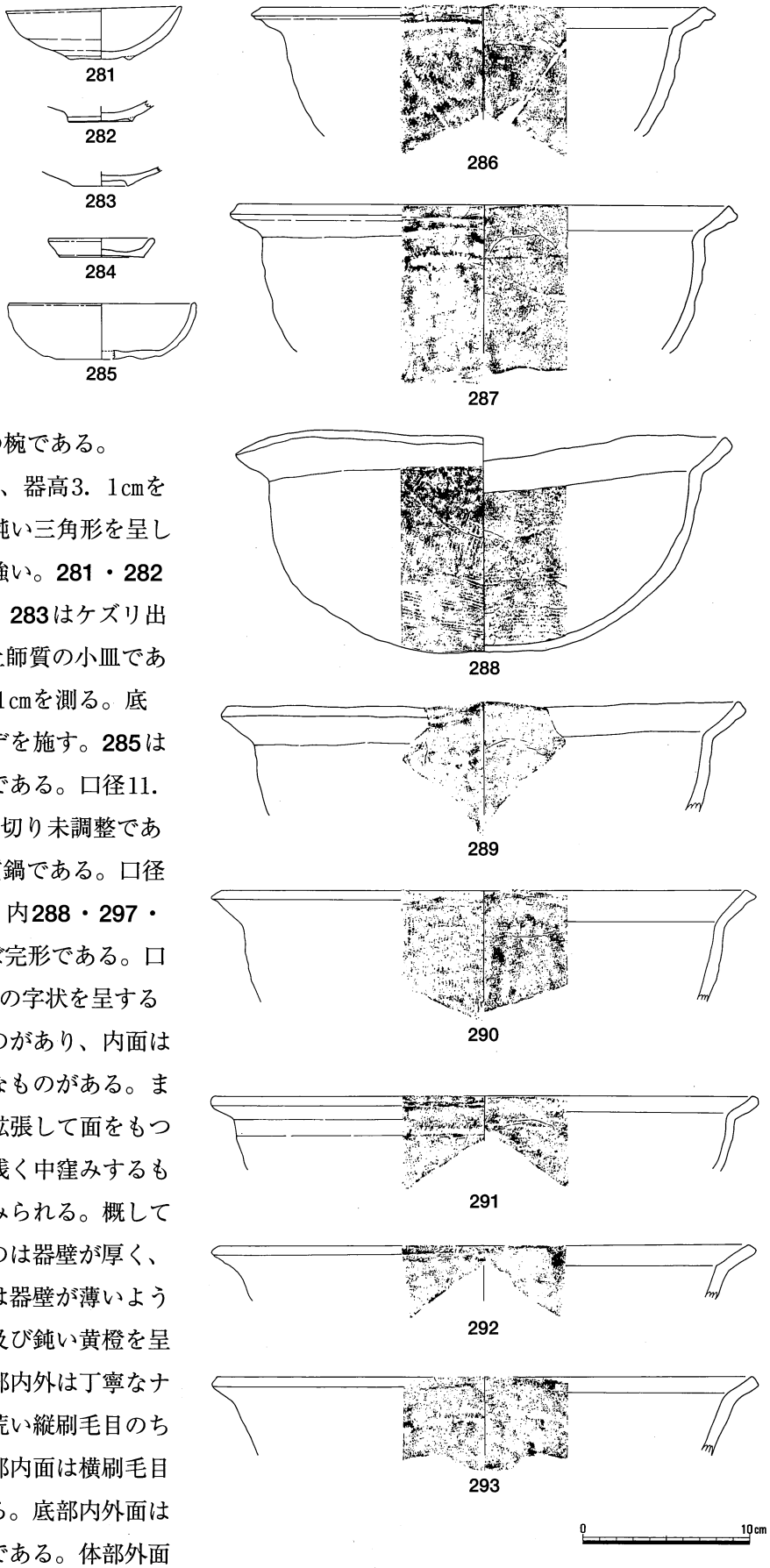
土器溜まり4は、2区南端に位置し、土壙7に近接する。遺物は2点出土した。**279**は土師器のヘソ椀である。口径10．2cm、器高3．3cmを測る。**280**は土師質鍋である。口径29．4cm、器高11．7cmを測る。口縁部は短く、端部に面をもつ。丁寧な作りである。煤が付着する。

土器溜まり5（第49図～第52図）

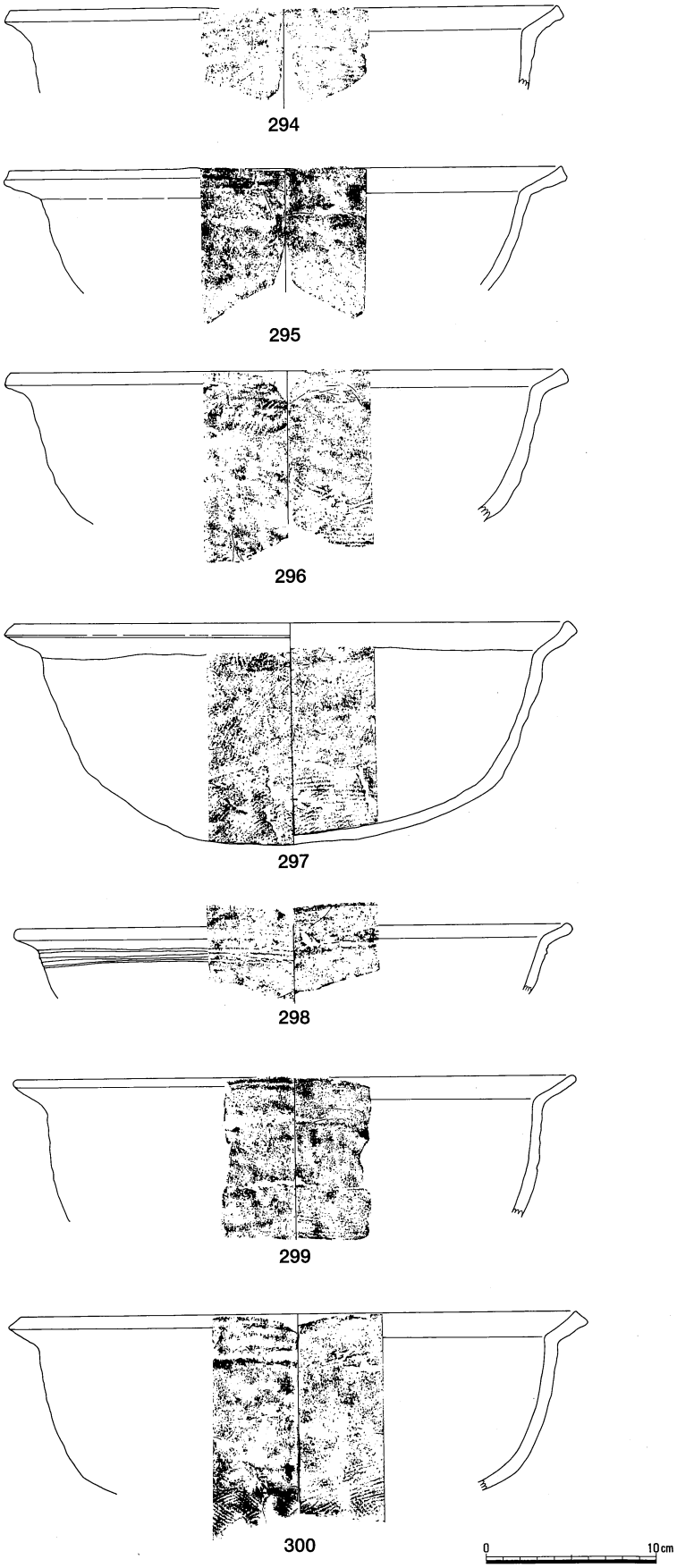
土器溜まり５は、３区中央から西にかけての地点で集中して見られた。標高は西から東へ緩くレベルが下る。出土遺物は圧倒的に土師質鍋が多かった。貝塚５に近接する。付近では、焼土や焼土塊、炭等が多く見られた。

281～283は土師質の椀である。

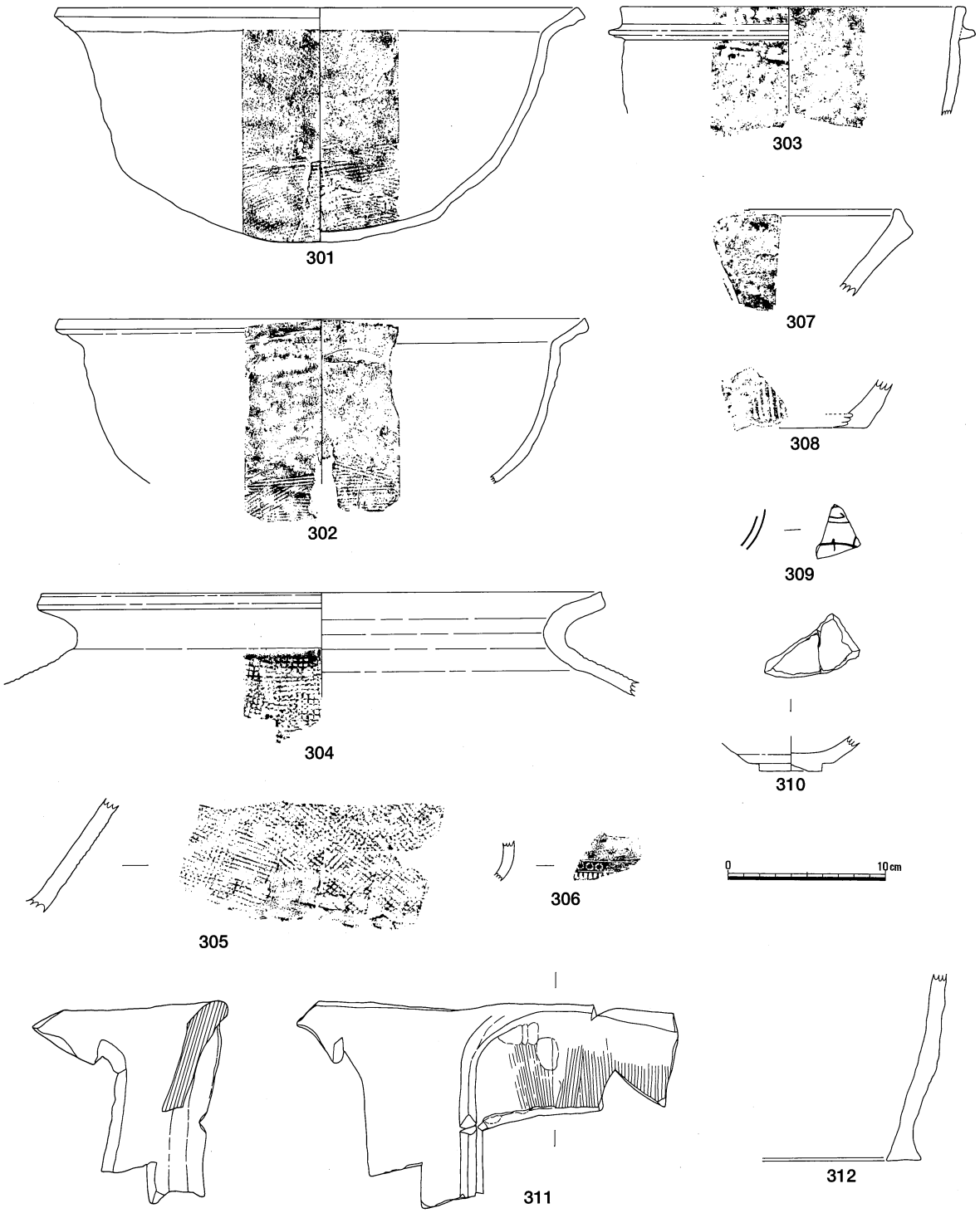
281は、口径10．5cm、器高3．1cmを測る。高台は断面形が鈍い三角形を呈しているが粗雑な感じが強い。**281・282**は早島式土器椀である。**283**はケズリ出し高台である。**284**は土師質の小皿である。口径6cm、器高1．1cmを測る。底部外面はヘラ切り後ナデを施す。**285**はやや大きめの土師質皿である。口径11．2cmを測る。底部はヘラ切り未調整である。**286～303**は土師質鍋である。口径27cm～33．6cmを測る。内**288・297・301**は完形もしくはほぼ完形である。口縁部の形態には、「く」の字状を呈するタイプとそうでないものがあり、内面は中窪みするものと平坦なものがある。また、端部の形態には、拡張して面をもつもの、面をもつもの、浅く中窪みするもの、丸く収めるものがみられる。概して口縁端部に面をもつものは器壁が厚く、端部を丸く収めるものは器壁が薄いようである。色調は概ね橙及び鈍い黄橙を呈し、焼成はよい。口縁部内外は丁寧なナデ調整で、体部外面は荒い縦刷毛目のち指頭圧ナデを施す。体部内面は横刷毛目もしくはナデ調整である。底部内外面は不整方向の刷毛目調整である。体部外面は凹凸が目立ち、煤や炭化物の付着する



第50図　土器溜まり５出土遺物（１）（１／４）

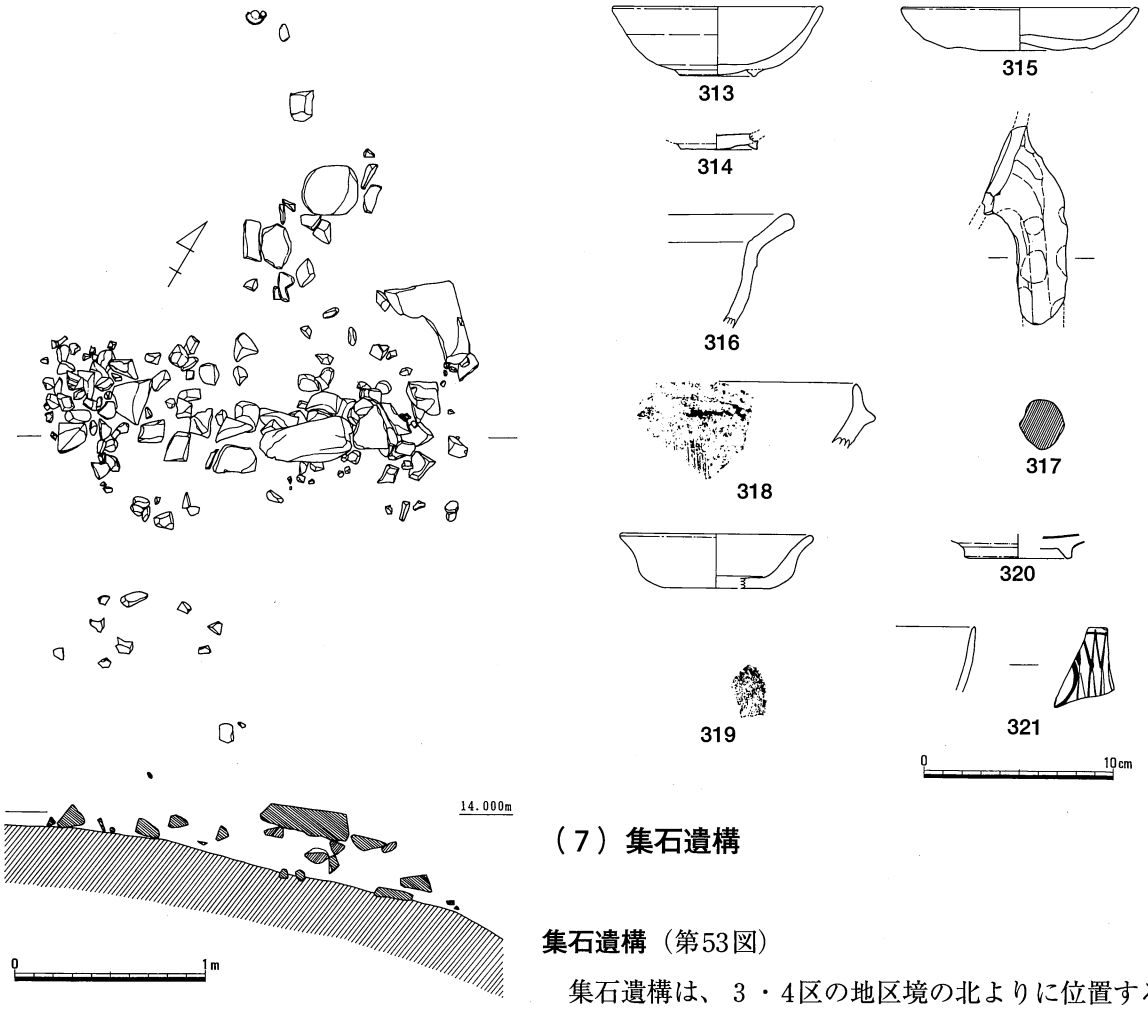


第51図　土器溜まり5出土遺物（2）（1／4）



第52図　土器溜まり５出土遺物（３）（１／４）

ものも見られる。**298**は焼成及び胎土、口縁部形態、口縁直下に３条の沈線を有すること等土壙５出土の鍋とよく似た特徴をもつものである。**303**は口縁部に鍔のつく土師質鍋である。**304**は口径35．８cmを測る亀山焼の甕である。**305**は亀山焼の甕胴部破片である。**306**は奈良火鉢の破片である。**307**・**308**は備前焼擂鉢である。**309**は明代の雷文帯青磁碗の破片である。**310**は瀬戸・美濃系の天目茶碗底部である。**311**・**312**は移動式カマドである。以上の出土遺物の内容から、土器溜まり５の時期は、やや時期の下る国産陶磁器類が後世の流れ込みと考えると、概ね14世紀の前半～中頃の時期に比定できるのではないかと思われる



第53図　集石遺構・出土遺物（1／40・1／4）

（7）集石遺構

集石遺構（第53図）

集石遺構は、3・4区の地区境の北よりに位置する。調査区の北東端にあり、地山レベルは南西から北東へむかって標高13．97mから標高13．35mまで緩く傾斜している。石の検出レベルも同じように傾斜をもつ。集石の広がりは、最大で南北幅約4m、東西幅2．3mの範囲に認められる。高さは、最も残りのよい中央部付近で約40cmを測る。また、周辺へ向かうにつれて散在する傾向にある。石材には花崗岩・砂岩・安山岩が使用されている。特に石材を加工して大きさや面を揃える工夫は認められず、積み方にも規則性は見られない。敢えてあげれば、概して小振りの石材を下の方に使用しているくらいである。石材は小さいもので5cm角のもの、大きいもので長さ50cm、幅25cm、厚さ20cmほどのものを使用しているようである。また、集石の北東端は調査区外へ延びる可能性を残す。集石遺構の下部構造は何も見られず、地山面から積み上げが開始されている。この遺構は後世の撹乱をかなり強く受けているものと思われる。そのことは時期の大きく異なる遺物が同じ場所から出土したことなどからも窺われる。遺物は集石の間や地山近くで検出された。ほとんど破片である。

313・314はいわゆる早島式土器椀と呼ばれるものである。**313**は口径11cm、器高3．7cmを測る。唯一完形に近い遺物である。高台は断面三角形を呈するが一周しない。**315**は土師質皿である。口径12cmを測る。**316**は土師質鍋破片である。**317**は土師質鍋脚部である。**318**は備前焼擂鉢、**319**は備前焼杯である。底部は糸切りである。**320**は漳州窯系の染付である。**321**は一重網目文のある肥前磁器である。この他にも椀形滓（注8）やより新しい時期の遺物が若干見られた。遺構の明確な時期決定は難しいが中世に属するもの（14世紀以降）ではないかと考えている。なお、機能は不明である。

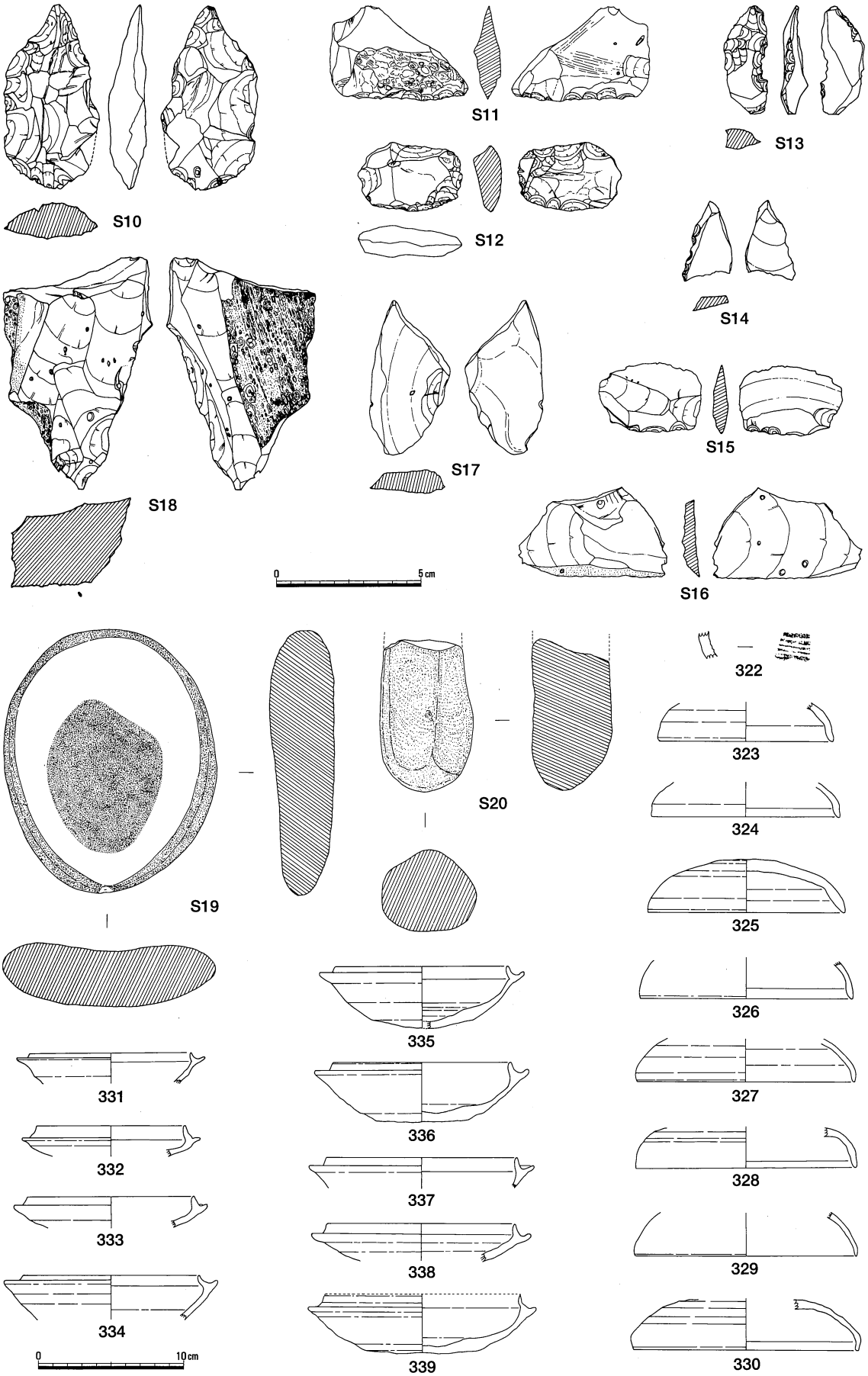
５．Ｂ地点包含層出土の遺物（第54図～第57図）

Ｓ10～Ｓ20は石器類である。**Ｓ10**は尖頭器の未製品で、一部欠損している。両面ほぼ全面にやや粗い調整を加え、基部は丸みをもつ。8区出土である。**Ｓ11**は削器である。縁辺部を両側から加工して薄い刃部を作り出している。6区出土である。**Ｓ12**は掻器である。両面の縁辺部を細かく調整して刃部を作り出している。4区出土である。**Ｓ13**は火打ち石である（注９）。8区出土である。**Ｓ14**・**Ｓ15**はリタッチドフレイクである（注10）。4区、5区出土である。**Ｓ16**・**Ｓ17**は剥片である。1区、7区出土である。**Ｓ18**は剥片石核である。両面で薄く小さい剥片を何枚か剥ぎ取ったものと思われる。6区出土である。材質は**Ｓ13**がチャート製以外は皆サヌカイト製である。出土遺物は後期旧石器時代に属するものも含まれると考えられる（注11）。いずれの石器もよく風化している。**Ｓ19**は安山岩製の石皿である。**Ｓ20**は花崗岩製の磨石である。上部がやや欠損している。縄文時代に属すると考えられる（注12）。5区土壙３に近接して出土した。

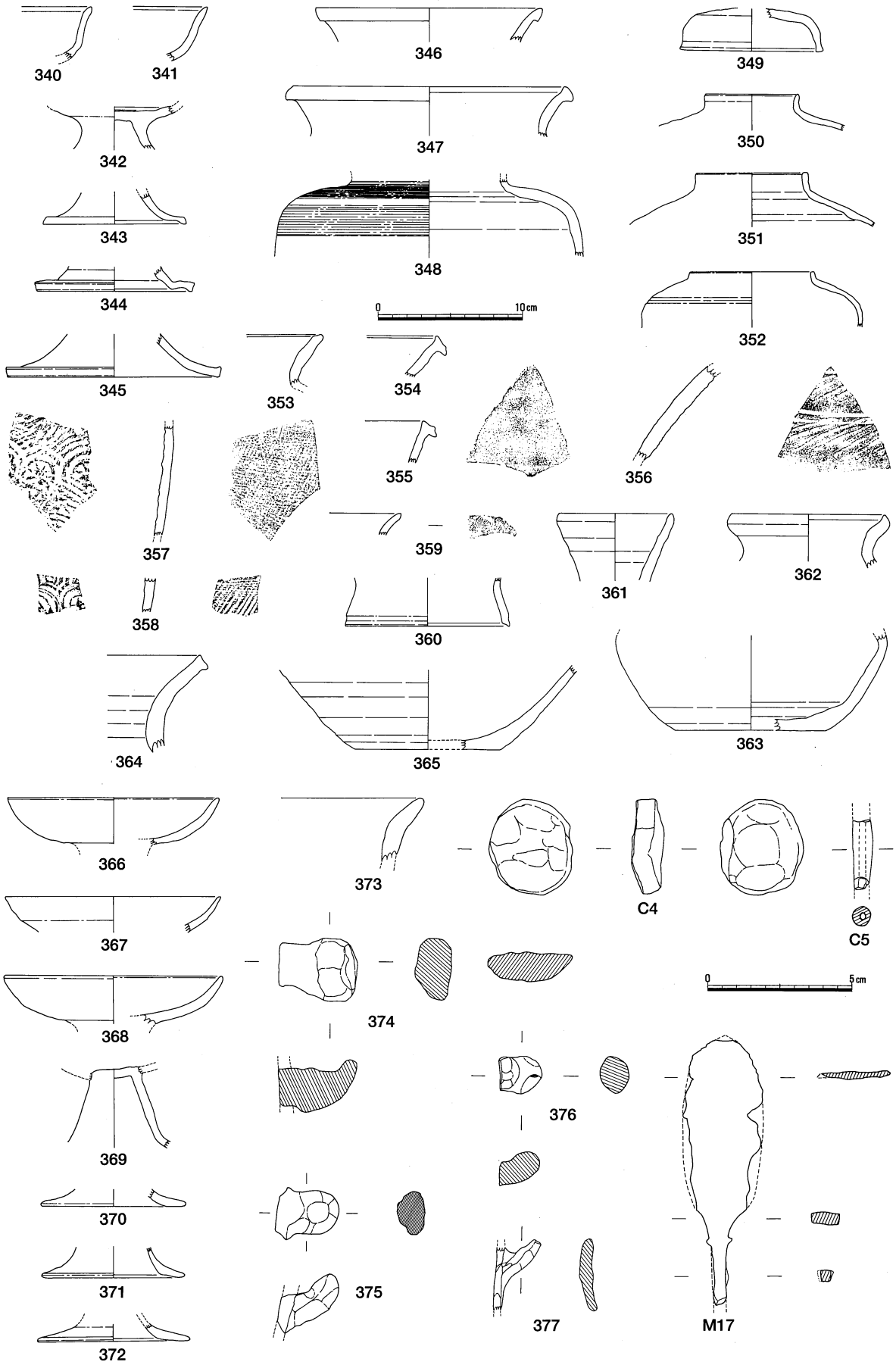
322は弥生土器と思われる小片である。後期のものだろうか。**323～365**は須恵器である。**323～330**は杯蓋である。口径12cm～15．6cmを測る。**331～339**は杯身である。口径10．8cm～13cmを測る。**340～345**は高杯である。**346～348**は壺である。**349**は短頸壺の蓋である。**350～352**は短頸壺である。**353～358**は甕の口縁部及び体部破片である。**357**・**358**の内面には車輪文叩きが入る。**357**は直線状の８つの放射状文が同心円文の中央圏内に収まるもの、**358**は竪穴住居１出土と同じ構図をとるものである。**359**はハソウ、**360**は脚台付き壺の脚部である。**361～363**は提瓶・横瓶・平瓶である。**364**・**365**は奈良時代以降の須恵器である。**365**の底部は糸切りである。**366～377**は土師器である。**366～372**は高杯である。**373**は甕である。**374～377**は把手である。**Ｃ４**は土製円盤である。呪いか遊びに関するものと思われる（注13）。**Ｃ５**は管状土錘である。**Ｍ17**は有茎平根系の柳葉式鏃である。6世紀後半頃のものである（注14）。**378～393**は無文の製塩土器である。**381～383**・**387**・**389**・**390～392**は板状工具による叩きが口縁部に見られる。内外面には指頭圧痕が顕著である。口径は12cm～16cm前後に復元できるものがある。**394**は純粋な製塩土器ではないと思われるものである（注15）。**395～410**は平行及び斜平行叩きが入る製塩土器である。**408～410**は口縁端部から直下もしくは斜めに叩きが入るものである。**411**は格子目叩きが入るものである。**412～415**は矢羽根状の叩きが入るものである。**416**は山形の叩きが入るものである。**417**は粘土帯を口縁部外面に貼り付けたものである。**418**・**419**は底部である。有文の製塩土器の口径は16cm前後に復元できるものがある。出土した製塩土器の叩き以外の内外面調整は指頭圧ナデ調整で、同心円文叩きや貝殻の腹縁で調整が施されるものは１点もなかった。全体的な形態の分かるものは少ないが概ね**395**のようなボール状を呈するものと思われる。口縁部形態には、直線的に胴部に向かうもの、緩い肩を持つもの、明瞭な肩をもつもの、内湾するもの等が見られる。また、端部の処理には尖るもの、丸く収めるもの、面をもつものなどが見られる。器表全面で剥離が見られ、胎土には砂粒をかなり多く含む。焼成は良好である。

420～427は師楽的土師器と呼ばれるものである（注16）。胎土や焼成及び指頭圧ナデ調整、２次的に被熱している点等では製塩土器と同じである。**420**は椀形、**421～424**は高杯形の杯部、**425～427**は脚部である。出土量は製塩土器や日常土器に比べ少ない。これらの遺物の多くは、4区～6区の黒褐色土中から出土した。6世紀後半の時期のものが殆どを占める。

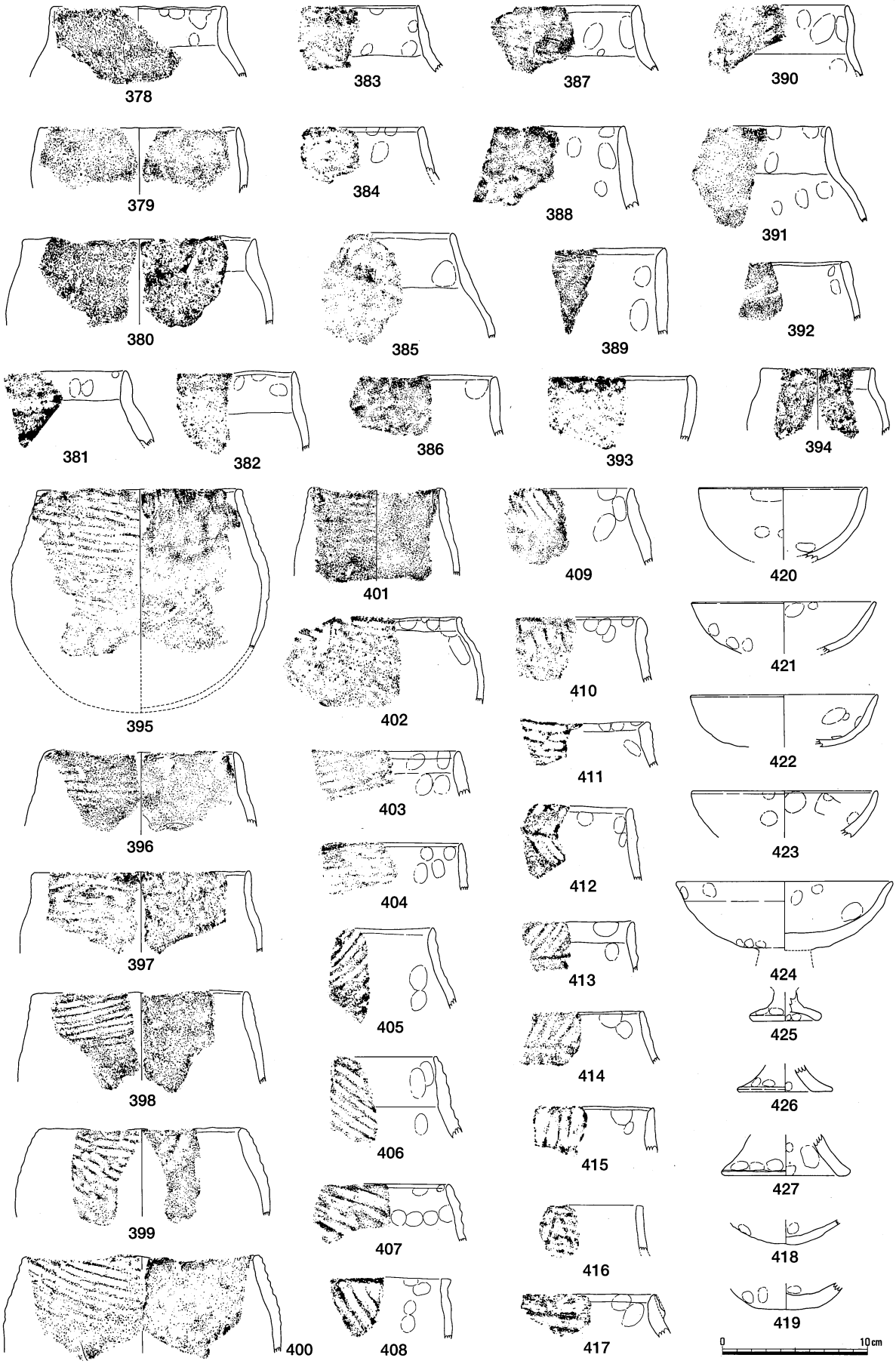
428～439は早島式土器椀である。口径は9cm～11cm前後と小振りである。**440～448**は土師質小皿



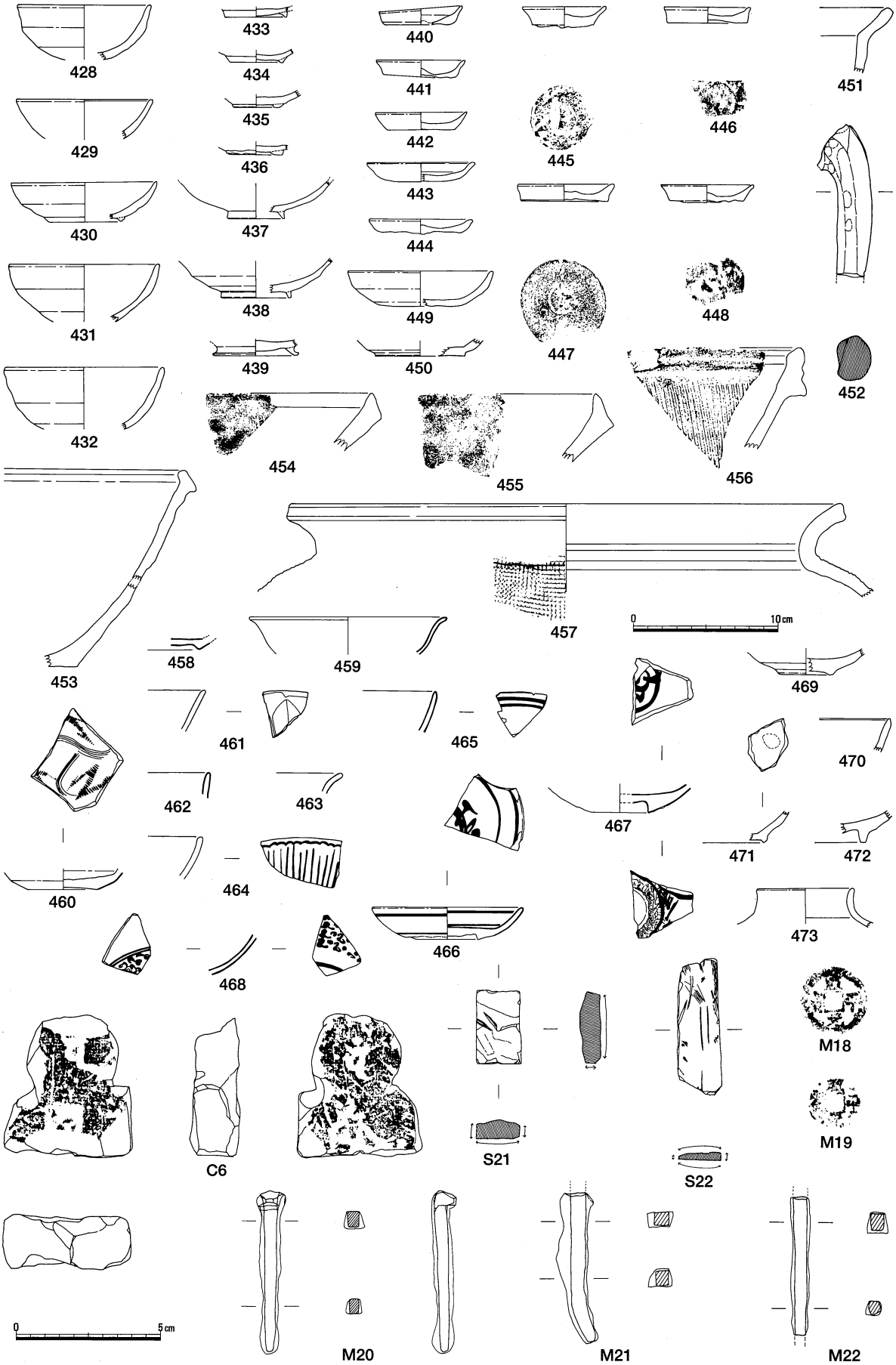
第54図　B地点包含層出土遺物（1）（1／2・1／4）



第55図　B地点包含層出土遺物（２）（１／４・１／２）



第56図　B地点包含層出土遺物（3）（1／4）



第57図　B地点包含層出土遺物（４）（１／４・１／２）

である。口径5．7cm～7cm、器高1．1cm～1．5cmを測る。底部はヘラ切りである。**449・450**は土師質皿である。**450**は底部糸切りである。**451**は土師質鍋、**452**はその脚部である。**453**は東播系の捏鉢である（注17）。**454～456**は備前焼擂鉢である。**456**は江戸期のものである。**457**は亀山焼の甕である。口径38．6cmを測る。**458・459**は白磁である。**459**は景徳鎮窯である（注18）。**460～464**は同安窯系・龍泉窯系の青磁である。**465～468**は景徳鎮窯・漳州窯系の染付である（注19）。**469～472**は肥前陶器である。**469**は岸岳系とされるもので1580～1590年代との鑑定を受けた（注20）。**473**は瀬戸・美濃系の短頸壺である。**C 6**は扁平五輪塔形泥塔である（注21）。素焼きで型作りによる小型の供養塔である（注22）。空・風・火輪部を欠く。両面には梵字が見られる。残存長4．9cm、最大幅4．4cm、最大厚1．7cm、重量48gを測る。2区出土である。県内にも若干類例がある（注23）。**S 21・S 22**は粘板岩製の携帯用砥石である。**M 18・M 19**は北宋銭の咸平元宝である。初鋳は咸平元年（998）である。**M 20～M 22**は鉄釘である。遺物の多くは茶褐色土等からの出土である。

（注1）横山浩一「須恵器に見える車輪文叩き目の起源」『九州文化史研究所紀要』第26号九州大学九州文化史研究施設1981

（注2）武田恭彰「倉敷市玉島道口窯址採集の須恵器」『古代吉備』第9集古代吉備研究会1987など

（注3）大久保徹也氏の御教示による。大久保氏によるとこの製塩土器の胎土中には角閃石の分量が多く、児島近辺にはない土質で、こうした土質は県内では弥生時代後期の備中の特殊器台等に見られるという。また、香川県ではこの土質は石清尾山付近で見られ、左古谷遺跡出土の製塩土器類は櫃石島の大浦浜遺跡の製塩土器に似ているという。

（注4）金田善敬氏の御教示による。

（注5）光永真一氏の御教示による。

（注6）平井泰男氏、光永真一氏の御教示による。

（注7）大橋康二氏の御教示による。

（注8）光永真一氏の御教示による。

（注9）藤原好二氏の御教示による。調査者は最初後期旧石器ではないかと考えていたがそうではないことがわかった。

（注10）村田裕一氏の御教示による。

（注11）中村友博氏、平井勝氏、藤原好二氏、間壁忠彦氏の御教示による。

（注12）平井勝氏の御教示による。

（注13）間壁忠彦氏の御教示による。

（注14）尾上元規氏の御教示による。

（注15）大久保徹也氏の御教示による。

（注16）「広江・浜遺跡」『倉敷考古館研究集報』第14号　倉敷考古館1979

（注17）間壁忠彦氏の御教示による。

（注18）大橋康二氏の御教示による。

（注19）大橋康二氏の御教示による。

（注20）大橋康二氏の御教示による。

（注21）亀山行雄氏、高田恭一郎氏の御教示による。

（注22）畑大介「扁平形泥塔について」『山梨考古学論集Ⅱ』山梨県考古学協会1989

（注23）注22文献及び「矢部大坑遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』82岡山県教育委員会1993　なお、後者については岡山県古代吉備文化財センターの御好意で実見させていただきました。厚くお礼申し上げます。

第4章 ま と め

この度調査を行った左古谷遺跡からは後期旧石器時代から近世に至るまでの各時期の遺構や様々な遺物が量的には多少がありながらも検出された。それらの内、特徴のある遺構と遺物に関して若干の考察をしてまとめとしたい。

1. 古墳時代後期以前の遺構と遺物について

B地点5区南端で焼土塊・面とピット状のものが検出された。遺構の付近では他の時期の遺構や遺物が全く見られないこととS 9以外に遺物がないことから若干の検証の余地は残すものの後期旧石器時代の遺構であると判断したのである。こうした点的な遺構の在り方から移動中の一時的な所産であると考えられる。また、調査区外に遺構等の存在の可能性を残したのが残念である。その他にも尖頭器や削器、掻器、剥片石核、横長剥片などが包含層等から検出されており、明確なナイフ形石器の出土は見ないものの、後期旧石器時代に属するものと考えられる（注1）。また、材質は殆どがサヌカイトであるがそうでないものS 6も含まれていて注意が必要である。今回の調査によって初めて当該期の遺物が確認されたことで、今後の町内での資料の増加にも期待がもたれる。

縄文時代に属する遺構は検出されなかった。また、出土遺物には縄文土器はなくA地点包含層出土の異形石器S 7とB地点土壙3付近地山面出土の石皿S19と磨石S20があるのみである。異形石器は、近辺では彦崎貝塚（注2）や倉敷市一尺谷上池遺跡、磯の森貝塚、やや離れて福井県鳥浜貝塚等の縄文前期の遺跡での出土例が報告されている（注3）。また、それらの遺跡の石器構成にはその多くで共通点が見られるという（注3）。そして、内容を比較してみると、S 7には類似点が見られることから縄文前期のものと考えてよいと思われる。なお、土器型式は先の磯の森貝塚より彦崎貝塚が同じ前期の範疇でも後続する型式の内容をもつものである。

石皿と磨石は粉砕・製粉等を主目的とする道具であるとされている（注4）。また、よくセットで出土する例が多いとされる（注5）。S19・S20は近接して出土した。特に注目されるのはその出土の仕方である。S19はその底面側の一方が地山面が緩く窪む程度で検出されたのに対し、S20は地山面に対し垂直に5㎝程突き刺さって検出されたのである。しかし、こうしたことが意図的になされたことなのか偶発的におこったことなのかは明確には断言できない。それは、住居址などの遺構に伴わず、単独で存在していることに起因しているからである。また、住居址からの出土の場合には、その在り方などの検討から祭祀的・呪術的な意味合いをもたせる考え方もある（注5）。いずれにしても、石皿や磨石は実用的な側面と非実用的な側面の2面性を持ち合わせていると思われるがその出土状況によって判断されるなら、左古谷例は非実用的な側面をもっていた可能性が高いと推定されるのである。

なお、単独で存在するのは、土器が伴っていないもののその周辺に縄文時代の遺構等（住居か？）があってそれが古墳時代の遺構面に掘削されてしまったという可能性もある。それは、磨石が地山に突き刺さったままでその上部が折れていることからも推測されるのである。

今後は、このような石器類の研究も縄文文化を総合的に理解するには必要と思われるので、今回を契機として地域的に把握できるように努力していきたい。

2. 古墳時代後期の遺構と遺物について

当該期の遺構は、竪穴住居1軒、土壙3基、ピット群が検出された。出土遺物は須恵器、土師器、製塩土器、鉄器、鉄滓、土製品である。いずれもB地点での検出である。まず須恵器の年代について見てみる。出土した須恵器類には各器種を含むが、破片が多く全体を掴める資料が少ない。そこで、時期的変化が比較的追いやすい杯蓋・杯身で口径と器高のわかるもの（1／6以上の残存形態をもつもの）を資料に用い須恵器の年代を検討することとする。

杯蓋は、天井部を丸く収めるもの（A類：**154・325・329・330**等）と平坦に仕上げるもの（B類：**156～158・190**等）に大きく分けられる。

A類は、口縁部径13．6～15．6cm、器高3．7～4．5cmを測る。いずれも外面の1／2～1／3にかけてヘラ削りを行う。他の部分は横ナデである。端部は全て丸く収める。**330**のように口縁部がやや内傾するものもみられる。内面は、天井部が不定方向のナデで、その他は横ナデである。焼成は**154**以外は良好である。色調は、灰・青灰色である。ロクロ回転は右方向である。

B類は、口縁部径13．6～14．4cm、器高3．3～4．8cmを測る。天井部が平坦になった分、器高がやや低くなるが、**158**のようにA類より高いものみられる。外面はやはりヘラ削りを施し、その他は横ナデを行う。端部は全て丸く収める。天井部と口縁部の境に緩い稜をもつもの（**155・156・157**）やその名残り程度の浅い沈線のはいるもの（**328**）なども見られる。内面は、天井部が不定方向のナデで、その他は横ナデである。焼成は良好である。ロクロ回転は右方向である。

杯身は、口径が大きく立ち上がりが長いもの（A類：**154・339**等）、A類に比べて口径がやや小さく立ち上がりも短くなるもの（B類：**163・335・336**等）、器壁が薄く極端に口径が小さく立ち上がりも短いもの（C類：**331**等）の三種類に分けられる。

A類は、口縁部径12．8～13．6cm、器高4～4．3cm、立ち上がり9～10mmを測る。**154**は立ち上がりが内傾し受部は水平、**339**はほぼ直立で、受部は斜め上方に延びる。外面はいずれも1／2～1／3にヘラ削りが施される。内面は内底面が静止ナデの他は横ナデ・ナデ調整である。**154**は完形である。ロクロの回転は全て右方向である。端部は口縁部、受部とも丸く収める。

B類は、口縁部径12～12．6cm、器高4．1～4．3cm、立ち上がり6mm前後を測る。口径と立ち上がりはA類に比べて、小さく短くなるが器高はあまりかわらない。器壁はA類に較べてやや薄い。立ち上がりは内傾するもの（**163・335**）とほぼ直立するもの（**336**）がある。受部には水平なものと斜め上方に延びるものがある。端部はいずれも丸く収める。外面は、底部から1／2～1／3にヘラ削りを施す。内面は底部で静止ナデ、その他は横ナデである。**336**の底部はヘラ切り未調整である。ロクロの回転は右方向である。

C類は、口縁部径は復元で11cm代である。B類に較べて器壁が薄く、立ち上がりも4mm程度と低いものである。

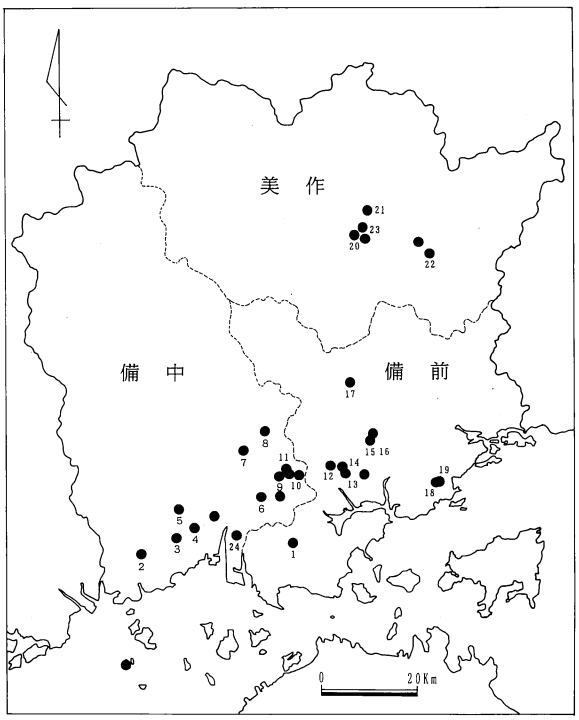
以上の整理から、杯蓋A類・B類については調整手法や口径から明確な時期差を考えにくいものがある。また、杯身A類・B類・C類では、調整手法や口径等の要素からA類が最も古いものである。このうち、杯蓋B類と杯身A類でセット関係になるものがあり、こうした特徴を陶邑編年（注6）に当てはめると、杯蓋A・B類と杯身A類はTK－43、杯身B・C類はB類にやや古い要素はあるもののTK－209の範疇におさまるものと思われる。実年代ではやや幅をもたせて6世紀後半から7世紀前葉の時期を考えておきたい。また、その他の器種も概ねこの時期におさまるものと思われる。

次に製塩土器について見てみる。製塩土器が出土した遺構は、竪穴住居１、土壙２・３、Ｐ１・２・５及び包含層である。また、旧児島湾沿岸では縄文貝塚上層からも製塩土器の出土がしばしば見られることがある。今回出土した製塩土器の総数は約１万点にのぼるが、完形はなく全て破片である。この中には、一部分だけでは区別がつかない師楽的土師器等の破片も含まれていると思われる。製塩土器の口縁部外面の叩きは、確認できた分だけでおおよそ無文対有文６：４の割合であった。また、有文の中では平行タタキが9割近くを占め、それ以外の叩きの割合は少ないようである。口縁部の形態や端部の処理及び時期については、先に検討した須恵器の年代やいくつか提示されている製塩土器の編年（注７）などの内容と比較しても大きく矛盾するものはない。ここで左古谷遺跡の製塩土器の特徴を挙げておく。その特徴は、１．胎土が粗く砂粒が非常に多い、２．内面調整には全て指頭圧ナデを施す、３．他地域からの搬入品がある（注８）、４．遺構によって製塩土器が使い分けられている可能性がある、５．児島西部及び塩飽諸島の生産地域の範囲に入る（注９）等が挙げられる。

最後に、こうした遺物や遺構をとおして見た他地域との交易を考えてみたい。先に見たように本遺跡からは須恵器や製塩土器、鉄器などが住居址等から出土した。そして製塩土器の中には他地域からの搬入品が見られることがわかった（注８）。さらに、鉄器製作の材料なども自前ではないと思われる。そうするといったい左古谷集団はどこの地域の集団と交流があったのだろうか。そこで、出土遺物の内、須恵器の甕などの成形時に使用される当て具痕と製塩土器、鉄滓などを糸口として見て行くこととする。須恵器の内面にしばしば見られる当て具痕に同心円文の一種であるいわゆる「車輪文叩き目」（以下、車輪文という。）と呼ばれるものがある。この車輪文は、「木材の年輪をモデルにした同心円文と木材の亀裂をモデルにした放射状文を組み合わせたもので、全体として木材の木口面の特徴を表現したものである」とされている（注10）。第58図は、車輪文の須恵器を出土した遺跡の分布図である。現在約30遺跡の40余りの遺構で確認されている（注11）。分布状況は散在しているが、概観すると県南と津山市周辺に分布が多いようである。また、出土遺構は表１にあるように多岐にわたり、車輪文のタイプもバラエティーに富む（注12）。

最も多いのはＢタイプである。そして器種では、甕が多い。時期的にはⅢ期が最も多く、また、製鉄関連遺物及び製塩土器と共半して出土する遺跡も看取される。中でも、岡山県最古の窯址である奥ヶ谷窯跡からの出土は注目される。それはこの窯の出土品中に陶質土器が含まれている可能性があり、調整はナデや刷毛目が主体をなすが（注13）、その中に車輪文が見られるということは、少なくともその技術的な濫觴等を捉える上で、重要な意味をもつと考えられるからである。

一方、古墳からの出土例には製鉄関連遺物が伴うものもある。製鉄関連遺物とは鉄滓等であるが、これらの遺物は副葬品や供献という形態のものが多く、被葬者が製鉄に関わっていたことを示すとする意見が一般的な理解とされるが、鉄生産を掌握していた



第58図 有車輪文叩き目の須恵器出土遺跡分布図

番号	遺　跡　名	出土遺構	器　種	出土総数	叩き目のタイプ	状態	製鉄関連遺物	製塩土器	時期	文献
1	左古谷遺跡	H・L	甕	3	B・F	○	○	○	Ⅲ	注27
2	鍛冶屋遺跡	D・XD・XA・L・SB	甕・横瓶	41	A・B・C・D・F・G	○	○	○	Ⅲ	注28
3	塚地古墳	M	甕	1	D	○			Ⅲ	注29
4	道口窯址	C	甕	4	B・C・H	○			Ⅲ	注30
5	中池ノ内遺跡	L	甕	1	B	○			Ⅳ	注31
6	管生小学校裏山遺跡	T・L	甕	15	B・C・F・G	○	○		Ⅰ・Ⅳ	注32
7	奥ヶ谷窯跡	C	甕・壺	7	A	×			Ⅰ	注33
8	くもんめふ2号窯	C	瓦	3	B・C	○			Ⅲ	注34
9	前池内3号墳	M	横瓶	1	B	○			Ⅲ	注35
10	加茂政所遺跡	K・L	甕	3	B・G・H	○			Ⅲ・Ⅳ	注36
11	津寺遺跡	K・H・D・L	甕	15	B・E・F・H	○×	○	○	Ⅲ	注37
12	北方中溝遺跡	D	甕	2	B・G	○			Ⅳ	注38
13	百間川原尾島遺跡	D・L	甕・横瓶	12	B・C	○×	○	○	Ⅱ・Ⅲ	注39
14	原尾島遺跡	D	甕	1	F	○	○	○	Ⅲ	注40
15	岩田9号墳	M	甕	1	B	○			Ⅲ	注41
16	岩田14号墳	M	甕	1	B	○			Ⅱ・Ⅲ	注42
17	新庄尾上遺跡	L	甕	4	B・G	○	○		Ⅲ	注43
18	寒風笹場池北遺跡	XD	甕	2	D	○			Ⅲ・Ⅳ	注44
19	土橋窯址	C	甕	1	G	○			Ⅳ	注45
20	大開3号墳	M	甕	2	G	○	○		Ⅱ	注46
21	大田茶屋古墳	M	甕	1	H	○			Ⅲ	注47
22	大年1号墳	M	甕	1	C	○	○		Ⅲ	注48
23	小原遺跡	XK	甕	1	B	○	○		Ⅲ	注49
24	茂浦2号墳	M	甕	1	F	○			Ⅲ	注50

出土遺構　住居:H　土器溜まり:XA　土壙:K　土壙墓:XK　窯址:C　溝:D　溝状遺構:XD　古墳:M　谷:T　包含層:L　建物:SB
叩き目のタイプ　A:三叉状　B:4本(十字含む)　C:5本(星形含む)　D:6本　E:7本　F:8本(米字様含む)　G:特殊・多数　H:不明
状態　○:中央(第一)円圏内に収まる　×:中央(第一)円圏から飛び出る
時期　Ⅰ期:5世紀前半　Ⅱ期:5世紀末～6世紀中頃　Ⅲ期:6世紀後半～7世紀前半　Ⅳ期:7世紀中葉～平安時代
※番号は第58図と対応している。

表1　有車輪文叩き目の須恵器出土遺跡内容一覧表

遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)		主軸	面積	付属施設			出土遺物						時期
			長さ	幅		(㎡)	炉	焼土面	カマド	車輪文	須恵器	土師器	製塩土器	鉄器	鉄滓	
左古谷遺跡	竪穴住居1	方形	(415)	(332)	北西	(13.9)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	Ⅲ
津寺遺跡	竪穴住居58	方形	412	375	北東	14.7			○	○	○	○		○	○	Ⅲ
	竪穴住居61	方形	498	447	北東	20.9			○	○	○	○	○		○	Ⅲ
	竪穴住居66	方形	450	445	北西	19			○	○	○		○		○	Ⅲ
	竪穴住居79	方形	370	326	北西	11			○	○	○	○		○	○	Ⅲ
	竪穴住居89	方形	392	373	北西	13.7			○	○	○	○			○	Ⅲ

(　)は残存値

表2　津寺遺跡(高田調査区)竪穴住居との内容比較表

ことと直接鉄生産に携わっていたことは、被葬者をその社会的背景の中で理解する場合には厳密に考慮する必要があるとの指摘（注14）がなされている。こうした点で考えてみた場合、特にⅢ期の車輪文が製鉄関連遺物と共伴して出土した遺跡は全てとは言えないまでも、少なくとも製鉄一貫作業や鍛冶一貫作業等を含む直接鉄生産に何らかの形で携わっていた集落やその中の集団には意識的に必要とされる場合があったといえるのではないかと思われる。また、同じ製鉄関連遺跡でもそれが必要とされる遺跡とそうでない遺跡があることはそれに対する特別な認識の有無の差ではないかと考えられる。つまり、ある種の祭祀的な動因が意識下に作用していたか否かに関係したものと思われる。

本遺跡出土の製塩土器の中には、備中の特殊器台等の土質に似た特徴つまり粗い胎土で角閃石・黒

雲母を多量に含むものが見られた（注15）。これは、楯築弥生墳丘墓等の特殊器台等を胎土組成の違いによって三分類された中の一つの特徴と一致していると思われ、また、遺跡周辺にその鉱物の母岩あり、そこで採取されたものであるとされている（注16）。ここから、北西約２ｋｍのところに津寺遺跡がある。この周辺いったいは吉備の中枢であり、各時期の膨大な遺跡が密集している。この遺跡における古墳時代後期の遺構は中屋調査区、高田調査区で多く検出されている。ここでは高田調査区を見ていきたい。この調査区では竪穴住居が105軒検出されていて、鍛冶集落として機能していたとされている（注17）。また、住居群は４群で構成され、この内、溝29等で区画されたＯ－20区北西に位置するＤ群の竪穴住居５軒から車輪文のある須恵器が検出されている。津寺遺跡では他の調査地区の住居からの出土はみられない。住居以外では野田上調査区土壙16から１点出土しているだけである。そして、住居群を区画している溝29からも車輪文の須恵器が出土している。

表2は住居内容の比較表である。住居構造はこの時期に通有の構造である。異なる点は、左古谷住居に壁体溝がみられないこと、津寺住居のカマドの支脚が抜かれていること、カマドの袖が粘土のものと地山削り出しのものがあること等である。また、この支脚が抜かれていることは、前時期と比してカマド祭祀形態の変容であるとされ、新たな住居への意識的移動と考えられている（注18）。

出土遺物をみると、車輪文と鉄滓等は共通である。車輪文のタイプはＢ・Ｅ・Ｆ見られるが、共通のものがある。このうち製塩土器が出土した住居は２軒ある。他の調査区では１件出土している。鉄滓についてみると、左古谷例は製錬滓（注19）、津寺例は鍛冶集落を物語る多種類であるが鍛錬鍛冶滓が多いようである（注20）。また、このＤ群とされる住居群では時期的差は若干あるものの量的に多くの鉄滓を持つようである（注20）。一方、高田調査区の当該期の須恵器は、県内外の各地から齎されていることが判明しているが、この中には、寒田窯からのものも含まれている（注21）。そして、時期的に近い寒田窯跡4号からも車輪文の須恵器が出土しているという（注22）。また、近くの道口窯址でも出土している（注23）。したがって、これらの窯址から搬入されたものも含まれているものと思われる。左古谷出土の製塩土器については、先にみたように津寺遺跡周辺でも充分採取可能な土であるから、検討の余地は若干残すもののこの土を使用した可能性は充分考えられると思われる。

これまでみてきたことから左古谷集団は備中南部の津寺遺跡高田調査区Ｄ群の集団と特に深く交流があったと考えられる。それは、塩と鉄で結ばれた需要と供給の関係であったのである。左古谷で生産された塩をもった集団は、船で足守川を遡上して津寺遺跡へ向かい情報や鉄素材等を交換入手し、その素材を入れる容器の一つに津寺遺跡周辺で作られた製塩土器があって、それが左古谷遺跡へ齎されたのではないかと推測されるのである。また、車輪文の須恵器もこの時に齎されたものと思われる。勿論、津寺遺跡の大集落にしてみれば塩を入手する先の一ルートであったであろうことは想像に難くないと思われる。そうして入手した鉄素材で自家消費的な小規模な鍛冶をしていたことは、住居から炉等が検出されていることからも充分考えられることである（注24）。また、当時児島を含む瀬戸内沿岸や島嶼部では製塩活動が盛んに行われており、そうした製塩活動に携わったと考えられる人の古墳の副葬品にも備中南部地域との深い関わりがあったことがそこに表徴されているという研究があり（注25）、多くの集団が交易をしていたことがわかる。しかし、左古谷遺跡は長く続いた集落ではなく、7世紀の前半には生活の痕跡が全く見られなくなってしまい、集落の移動が考えられる。そして、交易のあった津寺遺跡高田調査区でもＴＫ－217期以降の住居はなくなり、その中後半には中屋調査区に大規模な公的施設が出現してくるとされている（注26）。

3. 中世の遺構と遺物について

今回の調査では中世の遺構と遺物は他の時期に比べ多く出土した。しかし、住居や建物などと考えられる遺構の検出はなかった。ここでは土器類と特色ある遺物、遺構について概観したい。遺構と遺物の時期は、A地点が16世紀代を中心としたもの、B地点が14世紀代を中心としたものが多かった。15世紀代の遺構が見られないのは第3章でのべたように遺構面が削平されたことに起因しているものと考えられる。なお、出土炭化米と動物遺存体については後で先生方によって詳述されるのでここでは要点だけにふれることとする。

土器類には、椀、皿、小皿、鉢、鍋、羽釜、擂鉢、甕、壺等と国産・輸入陶磁器がある。圧倒的に多いのは日常雑器である。また、鉢、鍋、羽釜、擂鉢等には土師質のものと瓦質のものがある。椀は口径9～10cm、器高4cm以下、底径3．3cmあたりに法量の中心があり、また、調整や高台に著しい退化現象がみられ、ヘソ椀も存在することから高台付椀の消滅する時期に近いものと思われる（注51）。小皿はバラエティーに富むが、底部調整はヘラ切りのちナデが主体で糸切りは少ない。なお、これらは16世紀の遺構ではみられない。鍋は14世紀代のものには瓦質はみられない。B地点出土の14世紀代の鍋には口径に企画性が見られるものが多い。また、土壙5出土の鍋には頸部にヘラ状工具による沈線が入るものが多くみられた。16世紀代の鍋類等には大きさに大小があり、土師質と瓦質の割合は器種によって若干異なるが凡そ半々である。貝塚2出土の土師質鍋には口縁部内面にへら記号が見られるものが2点見られた。こうした煮沸具にはその多くで体部外面に黒斑や炭化物の付着が見られた。先にも述べたが、この時期には椀はなく皿や杯が主体となっている。なお、擂鉢に関しては、左古谷遺跡では備前焼は少なめで土師質及び瓦質のものがやや優勢のようである。

国産・輸入陶磁器は破片が多いが比較的多く出土した。総出土数は、遺構に伴うもの、包含層、表採全て含めてA地点が117点、B地点が154点であった。時期は12世紀～19世紀のものがみられた。本書に掲載したものは遺構に伴うものと包含層出土のものの一部である。掲載分で産地別にみると、備前（19％）、亀山（8％）、肥前（16％）、瀬戸・美濃系（7％）、関西系（1％）、中国産（48％）、朝鮮産（1％）で中国産が割合的に多いことがわかる。中国産の種別は、白磁（20％）、青磁（44％）、染付（36％）である。その中の染付は、景徳鎮窯（69％）、漳州窯（31％）である。全体的に主体は明代で、それより古い時期のものも若干含まれる。また、その出土点数から見ると、左古谷集落の人々は比較的活発に他地域の人々と交流を行っていたと思われる。さらに、彦崎の地には、内海漁業や干潟漁業、農業に従事する人あるいは兼業とした人々が生活をしていたと考えられることから小規模な港湾的機能も有していたものと推定される。なお、左古谷遺跡がやや山手に位置していることと周辺に山城が存在することも少なからず関係があり、それを反映したものである可能性もある。

貝塚4・5周辺及び集石遺構からは中世のものと思われる鉄滓が出土している。この内、集石遺構出土のものは椀形滓であることがわかった（注52）。また、本町には、灘崎町指定文化財『灘崎町所蔵地方文書』にみえる小字名に古い製鉄法に関する地名として、タタラ谷（彦崎地区）、カナヤマ谷・イモジヤ・アラカネ・カジヤ田（奥迫川地区）、タタラ田（宗津・片岡地区）、フロヤ（片岡地区）があり早くから注目されていた（注53）。そして、昭和56年に近くの玉野市木目で100ｋｇを超える鍛冶滓が市道工事に伴う緊急調査で層をなして出土し、時期は室町後期と比定され、付近に大鍛冶場の存在が想定されたのである（注54）。その同じ年、偶然灘崎町宗津において工事後ではあったので

あるが鉄滓が多量に発見された。その中には還元された小鉄塊を含むものや炭を巻き込んだものが見られ、その炭を放射性炭素年代測定にかけたところA．D．1090±100という結果がえられた(注55)。また、彦崎地区で出土したとされる鉄滓の成分分析なども行われ、製錬滓の可能性があるとの報告がなされている（注56)。しかし、町内においては、鉄滓の発見・検出はあるものの未だ遺構や製鉄を証明する確実な関連遺物の出土を見ていないのであり、今回本遺跡より出土した鉄滓等を含めた更なる資料の収集・検討と遺構などの確認・検出が今後も重要な課題である。

また、鉄滓以外の鉄器類も貝塚などから出土している。その多くは角打釘であるが、中でも特に注目されるのはA地点石列3出土の有袋鑿である。船大工道具を思わせるような大変しっかりした作りのものである。もう一つ左古谷遺跡の貝塚出土遺物には特徴がある。それは漁撈具が少ないことである。鉄製の漁撈具は全くなく、土錘はわずか3点しか出土していない。そのことは、貝塚の動物遺存体の構成にもあらわれており、魚類の出土が極めて低いのである。この有袋鑿の出土と漁撈具の少なさには素朴な矛盾を感じるのである。しかし、左古谷集落が魚類等の捕獲に重きを置く漁法を選択していなかったか、あるいはその集落の構成員中に成人男性が何らかの理由で少なかったというそのどちらかであれば納得はできるのである。けれどもその検証はたいへん難しい要素を含んでいる。

B地点では宗教に関する遺物として、包含層から泥塔が1基出土した。泥塔には扁平形と立体形があり、扁平形泥塔は形態によって五輪塔形と宝塔形に分けられ、「板五輪塔Ⅰa型」、「板五輪塔Ⅰb型」、「板五輪塔Ⅱ型」、「舟形光背宝塔型」、「板宝塔型」に分類されている（注57a)。本例は、空・風・火輪を欠損するが先の分類での室町～安土桃山期のものとされる板五輪塔Ⅰb型に該当するかと思われる。型作りされた表裏には発心門と菩提門の梵字の一部が陰刻されているのがみられる。底部は穿孔されず省略されている。また、県内での扁平形泥塔の出土例は、佛教寺（久米南町)、豊楽寺（建部町)、高嶋神社（岡山市)、矢部大坑遺跡（倉敷市）で知られている（注57)。いずれも、遺跡などで調査をうけた以外の出土状況や出土数は不明となっているが、豊楽寺は千余基という多量出土である(注57a)。しかし、泥塔は製作段階から寺院等への納置、その後の分散などを含めた一連の流れを捉えるためにはまだまだ謎が多い遺物である。なお、推測の域を出ないのであるが、本遺跡例は、永禄9年（1566）の三村家親暗殺と何らか関係性を感ずるのである。それは、暗殺された場所が久米南町の仏経寺（興禅寺）とされ（注58)、泥塔の出土した佛教寺と距離的に近い位置にあるからである。

A地点では中世貝塚群を検出した。遺構の広がり具合やレベルを考えるともとは一連のものであった可能性が高い。貝の採取も計画的ではなくとにかく量的に必要であった感が強い。住居や建物を明確に示す遺構は少ないがそれは16世紀後半の社会的情勢が影響しているのかもしれない。また、貝塚2からは炭化米が検出され、陸稲性の高い熱帯ジャポニカ品種であることが判明している。なお、紙面の都合で今回検討し残した点があるが、その点は今後何らかの形で明らかにしていきたい。

最後に、有益な御教示を多く頂きながら、筆者が未熟のため上手く咀嚼できなかった部分があることをお断わりして、筆を置くこととします。

(注1）平井勝氏、藤原好二氏、間壁忠彦氏の御教示による。

(注2）池葉須藤樹『岡山県児島郡灘崎町彦崎貝塚調査報告』1971

(注3）藤原好二「平井政雄氏寄贈の資料」『倉敷埋蔵文化財センター年報』5倉敷埋蔵文化財センター1998

(注4）鈴木道之助『図録石器入門事典－縄文－』柏書房1991

（注５）安達厚三「石皿」『縄文文化の研究』７有山閣1983

（注６）田辺昭三『須恵器大成』角川書店1981

（注７）a：間壁葭子「製塩土器についての一、二の問題」『倉敷考古館研究集報』第14集倉敷考古館1979

b：大久保徹也「古墳時代以降の土器製塩」『吉備の考古学的研究（下）』山陽新聞社1992

c：大久保徹也「喜兵衛島古墳群出土製塩土器について」『喜兵衛島－師楽式土器製塩遺跡群の研究－』喜兵衛島刊行会　1999

（注８）大久保徹也氏の御教示による。その後筆者はマイクロスコープを使用して肉眼観察を行ったが、他にも同じ胎土を持つものがいくつかふくまれていることわかった。

（注９）注７文献ｂ・ｃに同じ。

（注10）横山浩一「須恵器に見える車輪文叩き目の起源」『九州文化史研究所紀要』第26号九州大学九州文化史研究施設1981

（注11）今回は時間的制約から岡山県全域を全て網羅しているのではなく、あくまでも県南を中心にみたもので、報告書に資料が記載された分と確認されているとされる分を拾い上げている。番号の付いていないものの内寒田窯址4号については、藤原好二氏の御教示による。その他は、正岡睦夫他『百間川原尾島遺跡２』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56岡山県教育委員会1984及び岡田博他「鍛冶屋遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査４』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告70岡山県教育委員会1988による。今後も既出土資料中での発見や新資料の増加は充分あることが予想される。

（注12）ここでは、便宜上放射状線の数を基にタイプわけしている。拓本に基づく資料によっているため、実際の放射状線数の多少誤差が全く無いとは言い切れない。ご了承願いたい。なお、多数の中には太陽形の多放射状線も含む。また、車輪文ではないが、須恵器の内面の当て具痕に格子目叩きや平行叩きが施されるものがある。時期的には奈良・平安期に属するものが多く、公的施設などでの出土例もあるようである。遺跡名を挙げると新庄尾上遺跡（御津町）、野元遺跡（鏡野町）荒神風呂遺跡（落合町）、久米廃寺（久米町）、窪木遺跡（総社市）、北方中溝遺跡（岡山市）、大田障子遺跡（津山市）等で出土している。

（注13）柴田英樹他「奥ヶ谷窯跡」『中国横断自動車道建設に伴う発掘調査４』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告121岡山県教育委員会1997

（注14）宇垣匡雅『川戸古墳群発掘調査報告』岡山県大原町教育委員会1995

（注15）注８に同じ。

（注16）清水芳裕「楯築弥生墳丘墓出土の特殊壺・特殊器台の胎土分析」『楯築弥生墳丘墓の研究』楯築刊行会1992

（注17）中野雅美他「津寺遺跡５」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査15』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告127岡山県教育委員会1998

（注18）注17文献に同じ。

（注19）（株）三造試験センターの成分分析結果によると、鉱石系の製錬滓ではないかと考えられる。

（注20）亀山行雄他「津寺遺跡４」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査14』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告116岡山県教育委員会1997

（注21）白石純「津寺遺跡出土の須恵器、土師器の胎土分析」『津寺遺跡４』岡山県教育委員会1997

（注22）藤原好二氏の御教示による。

（注23）武田恭彰「倉敷市玉島道口窯址採集の須恵器」『古代吉備』第９集古代吉備研究会1987

（注24）現時点では製鉄一貫作業を行っていた遺跡である可能性は考えていない。しかし、今後周辺で遺跡の調査例が増してこうした考え方を見直さなければならなくなった時には修正したい。

（注25）尾上元規「副葬品から見た喜兵衛島古墳群の性格」『喜兵衛島－師楽式土器製塩遺跡群の研究－』喜兵衛島刊行会1999

(注26) 注17文献に同じ。

(注27) 本書

(注28) 岡田博他「鍛冶屋遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告70岡山県教育委員会1988

(注29) 岡本寛久他『道面遺跡・塚地古墳』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告147岡山県教育委員会1999

(注30) 注23文献に同じ。

(注31) 尾上元規他『中池ノ内遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告108岡山県教育委員会1996

(注32) 中野雅美他「菅生小学校裏山遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告81岡山県教育委員会1993

(注33) 注13文献に同じ。

(注34) 武田恭彰他「くもんめふ遺跡」『奥坂遺跡群』総社市埋蔵文化財発掘調査報告15総社市教育委員会1999

(注35) 中野雅美他「前池内遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査8』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告89岡山県教育委員会1994

(注36) 松本和男他『加茂政所遺跡・高松原古才遺跡・立田遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告138岡山県教育委員会1999

(注37) 中野雅美他『津寺遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98岡山県教育委員会1995及び注17・注20文献に同じ。

(注38) 岡田博他『北方下沼遺跡・北方横田遺跡・北方中溝遺跡・北方地蔵遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告126岡山県教育委員会1998

(注39) 正岡睦夫他『百間川原尾島遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56岡山県教育委員会1984

(注40) 宇垣匡雅他『原尾島遺跡（藤原光町三丁目地区）』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告139岡山県教育委員会1999

(注41) 神原英朗『岩田古墳群』岡山県山陽町教育委員会1976

(注42) 注41文献に同じ。

(注43) 平井泰男他『新庄尾上遺跡ほか』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告62岡山県教育委員会1986

(注44) 江見正己「寒風笹場池北遺跡発掘調査報告」『岡山県埋蔵文化財報告』12岡山県教育委員会1982

(注45) 岡田博「土橋窯址出土遺物について」『岡山県埋蔵文化財報告』13岡山県教育委員会1983

(注46) 平岡正宏他『大開古墳群・大開遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第51集津山市教育委員会1994

(注47) 岡本寛久他『大田茶屋遺跡・大田障子遺跡・大田松山久保遺跡・大田大正開遺跡・大田西奥田遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告129岡山県教育委員会1999

(注48) 正岡睦夫他『大年古墳群ほか』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告102岡山県教育委員会1995

(注49) 行田裕美他『小原遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第38集津山市教育委員会1991

(注50) 鍵谷守秀他『茂浦古墳群』倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告第5集倉敷市教育委員会1996

(注51) 高畑知功他『樋本遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告65岡山県教育委員会1987

(注52) 光永真一氏の御教示による。

(注53) 星島民記「灘崎町の鉄滓」『灘崎を知る会会報』第12号灘崎を知る会1994

(注54) 柳瀬昭彦「木目（岡谷尻）遺跡発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告』12岡山県教育委員会1982

(注55) 注53文献に同じ。

(注56) 注53文献に同じ。

(注57) a：畑大介「扁平形泥塔について」『山梨考古学論集Ⅱ』山梨県考古学協会1989

b：浅倉秀昭他『山陽自動車道建設に伴う発掘調査6』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告82岡山県教育委員会1993

(注58) 北村章『備前児島と常山城－戦国両雄の狭間で－』山陽新聞社1994

付載1　出土炭化米のDNA分析

静岡大学農学部　**佐藤洋一郎**
株式会社　ジェネテック

左古谷遺跡の種子の分析を行った。ここではそのうちA地点（室町時代から戦国時代）貝塚（貝塚2）から出土したイネ炭化種子3粒のDNA（デオキシリボ核酸）分析の結果を報告する。

本遺跡の貝塚2からはイネのほか相当数の植物種子が出土しており、その中に3粒のイネ種子が含まれていた。ここ1、2年の間にイネ遺体のDNA分析が進み、1粒の種子からのDNA抽出にもあいついで成功例が報告されているが、その多くは縄文時代晩期（または弥生時代早期）から古墳時代にかけてのもので、中世の遺物は極めて少ない。そのため中世頃の日本列島のイネ品種の特性はブラックボックスに置かれた状態になっている。特に、ごく最近になって弥生時代から古墳時代にかけて、水田に栽培されたイネの少なくない部分が、陸稲性の高い熱帯*japonica*であったこと（佐藤、1999）が明らかになり、水稲（温帯ジャポニカ）への移行がいつどのようにして行われたかが日本のイネ品種の歴史的変遷を考える上で大きな問題として浮上しつつある。この点で左古谷遺跡出土の炭化米のDNA分析には大きな意味があるといえる。

DNAの分析方法

DNA分析では米（イネ種子）なら1粒の単位でDNAを抽出して品種を特定することが可能である。またDNAは遺伝子の本体とされる物質で、その解析によって得られた結果は他の分析法での結果に比べてよりダイレクトである。特にイネの場合、品種群の判別にもみの形や大きさが用いられることが多いが、それによる判定の信頼度は60％をわずかに超える程度に過ぎない。その意味では、可能である限りDNA分析に頼るのがよいと思われる。

今回分析に用いた種子は全部で3点であった。3点はすべてデジタルカメラ付き実体顕微鏡で写真撮影をし、種子サイズ（長さ、幅、厚さ）を計測した。3点のサンプルのうちサンプル1はほぼ完形であったが、残り2粒は一部が欠損していた。

これら3点のサンプルそれぞれからDNAを抽出した。抽出の方法はSDS法を植物の遺体用に改変したものである。DNA抽出法の詳細は、別に参考書等があるのでそれを参照されたい。

抽出されたDNAは、温帯*japonica*か熱帯*japonica*かを判別するプライマーB20およびB22を用い、それぞれに対応するDNAの領域を増幅させた。図1はその結果であり、上段がB22による結果を、下段がB20による結果を示している。なお、プライマーとは、DNA増幅の際、増幅させるDNA領域を特定するのに使われるごく短いDNA断片を言う。ここではB20は温帯*japonica*に固有のDNA断片を増幅するプライマー、B22は熱帯*japonica*に固有のDNA断片を増幅するプライマーである。

分析の結果とそれに対する考察

図1に今回の分析結果（電気泳動写真）を示す。図で左端および右端は増幅されたDNA断片のサイズ（分子量）を示すマーカ、左から2、3および4番目が左古谷遺跡出土の炭化米、同じく左から5番目および6番目が、典型的な熱帯*japonica*および温帯*japonica*品種のDNA断片の増幅パターン

（現存種）である。なお、左から7番目（右から2番目）のレーンは、外部からの混入DNAを検出するためのレーンで、ここにバンドが現れた場合、当該データは廃棄することにしている。

プライマーB22によるDNA増幅の結果は図１の上段に示すように、右欄外に矢印（←）で示した位置に淡いバンドが現れている（Trのレーン）。3粒のサンプルのうちサンプル２からこの位置に淡いバンドが得られた。このことからサンプル２は熱帯*japonica*の性質をもったイネであることがわかる。

プライマーB20によるDNA増幅の結果は図１の下段に示すように、同じく右欄外の矢印（←）の位置にバンドが現れる。（Tmのレーン）。しかし今回分析に用いた３粒の中には当該位置にバンドを示すものは見られなかった。

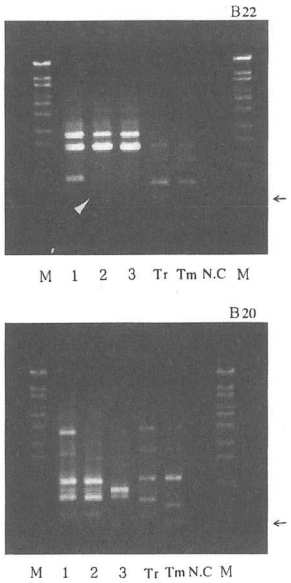
こうしたことから、左古谷遺跡Ａ地点貝塚２から出土したイネ種子３粒のうち1粒が熱帯*japonica*品種、またはそれに近似した品種であったと考えられる。なお、その割合についてであるが、母数が３と小さいため、割合を算出することは差し控えたい。

いずれにせよ、今回の結果は中世瀬戸内地方にはまだ相当程度の熱帯*japonica*品種が残存していたことを示す最初の事例である。緒言にも触れたように、日本列島にはおそらく縄文時代に渡来した熱帯*japonica*のイネが長く栽培され、その末裔は現代にまで及んでいた（佐藤、1992）。熱帯*japonica*の検出例は、中近世では長野県川田条理遺跡から出土した水田跡にあった稲株痕についで全国で2例目である。分析例を増やさない限り断定的なことはいえないが、おそらく中近世には列島の各地にまだ相当量の熱帯*japonica*が残っていた可能性が高いと思われる。

参考文献

佐藤洋一郎「古代米の遺伝的特性（１）－２つの*japonica*の混在－」『日本文化財科学会第16回大会研究要旨集』p８－９，1999.

佐藤洋一郎『稲のきた道』裳華房，1992，東京.



M：マーカ
Tr：熱帯ジャポニカ
Tm：温帯ジャポニカ
N.C：ネガティブ・コントロール

図１　左古谷遺跡・泳動写真

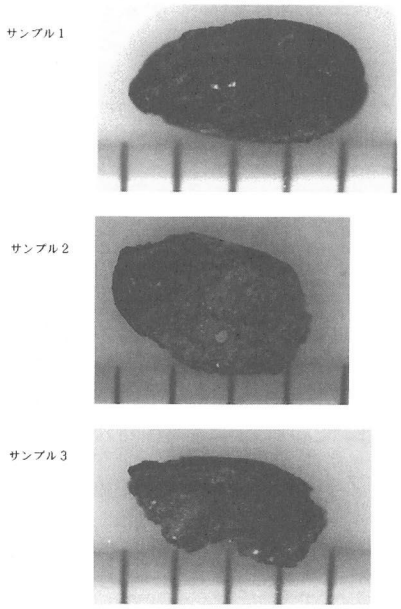


図２　サンプル写真

付載2　左古谷遺跡出土の動物遺存体分析

岡山理科大学理学部　　**富岡　直人**

はじめに

本報告文は、灘崎町教育委員会の発掘によって岡山県児島郡灘崎町大字彦崎小字左古谷・ソフコソ所在の左古谷遺跡から検出された中世に属する動物遺存体の分析について記述するものである。分析資料は、貝層発掘時に確認・サンプリングされたものと金属フルイによる水洗選別によって抽出されたもので構成されている。

第1節　出土動物遺存体の概要

本分析資料のうち、綱以上が同定できた資料を第1表に掲げる。以下に動物遺存体の内容を生物分類に従って概括する。

第1表　左古谷遺跡出土動物遺存体種名表

軟体動物門	Mollusca
腹　足　綱	Gastropoda
ウミニナ科	Potamididae
ウミニナ	*Batillaria multiformis* (Lischke)
カワアイガイ	*Cerithideo psilla djadjariensis* (Martin)
アクキガイ科	Muricidae
アカニシ	*Rapana venosa* (Valenciennes)
リュウテンサザエ科	Turbinidae
サザエ	*Batillus cornutus* (Lightfoot)
タニシ科	Viviparidae
マルタニシ	*Cipangopaludina chinensis laeta* (Martens)
タマガイ科	Naticidae
ゴマフダマガイ	*Tectonatioca tigrina* (Röding)
イトマキボラ科	Fasciolariidae gen. et sp. indet.
マイマイ亜綱（有肺類）	Pulmonata
ヒラマキガイ　タイプ	Planobidae type
キセルガイ　タイプ	Clausiliidae type
斧　足　綱	Pelecypoda
フネガイ科	Arcidae
ハイガイ	*Tegillarca granosa* (Linnaeus)
フネガイ	*Arca arabica* Philippi
マルスダレガイ科	Veneridae
ハマグリ	*Meretrix lusoria* (Rödding)
オキシジミ	*Cyclina sinensis* (Gmelin)
シジミガイ科	Corbiculidae
ヤマトシジミ	*Corbicula japonica* Prime
マシジミ	*Corbicula leana* Prime
フナガタガイ科	Trapeziidae
ウネナシトマヤガイ	*Trapezium liratum* (Reeve)

ニッコウガイ科	Tellinidae
ゴイサギガイ	*Macoma tokyoensis* Makiyama
イタボガキ科	Ostreidae
マガキ	*Crassostrea gigas* (Thinberg)
脊椎動物門	Vertebrata
爬虫綱	Reptilia
ヘビ亜目　科不明	Ophidia　fam. indet.
魚上綱　目不明	Pisces ordo. indet.
硬骨魚綱　目不明	Osteichthyes　ordo. indet.
哺乳綱	Mammalia
ウシ目（偶蹄目）	Artiodactyla
ウシ科	Bovidae
ウシ	*Bos taurus domesticus* Gmelin

1 軟体動物門　Mollusca

貝殻数の算定には灘崎町教育委員会の御協力を賜った。数量についてはpp.86～88に記載する。

ウミニナ科　Potamididae
ウミニナ　*Batillaria multiformis* (Lischke)

干潟や内湾中央部などの砂泥底に生息する比較的捕獲しやすい巻貝。カワアイガイと同様、食用とされたのか、マガキ等の貝類や貝類の生息地に繁殖した植物類や動物類等とともに遺跡に混入されたのかは不明である。

カワアイガイ　*Cerithideo psilla djadjariensis* (Martin)

ウミニナと同様干潟の砂泥底に生息する比較的捕獲しやすい巻貝である。

アクキガイ科　Muricidae
アカニシ　*Rapana venosa* (Valenciennes)

水深10～20mの内湾泥底域に生息する巻貝。左古谷遺跡出土の巻貝のなかで最も多く出土した種である。アカニシは岡山県内の縄文時代から近世の遺跡より数多く出土する貝類であるが、幼齢～若齢と考えられる小型の貝殻（図版21－1－3）も含んでいるのが左古谷遺跡の特徴である。

リュウテンサザエ科　Turbinidae
サザエ　*Batillus cornutus* (Lightfoot)

潮間帯の内湾から外洋の岩礁底に生息する巻貝。出土資料は棘の発達がみられないタイプであり、波が比較的穏やかな海域に生息したものと推定される。

タニシ科　Viviparidae
マルタニシ　*Cipangopaludina chinensis laeta* (Martens)

水田や池沼のような止水域を主とした淡水域に生息する巻貝。1点のみが貝塚2から出土した。

タマガイ科　Naticidae
ゴマフダマガイ　*Tectonatioca tigrina* (Röding)

内湾砂泥底に生息する巻貝。有明海とならんで瀬戸内海に多いことが知られている（波部他　1983）。巻貝の最小個体数でアカニシに次いで数多く出土した。保存が良好な個体には斑紋も残されていた。

イトマキボラ科　　Fasciolariidae gen. et sp. indet.

表面が摩滅・損壊し、殻の形状の保存も劣悪であったため種の特定ができなかったイトマキボラ科の一種が貝塚2から1点出土している。

マイマイ亜綱（有肺類）　Pulmonata
ヒラマキガイ　タイプ　Planobidae type
キセルガイ　タイプ　Clausiliidae type

いわゆる陸産貝類である。

ヒラマキガイタイプ（図版21－1－10）は螺頭が低く扁平を呈する。このタイプにはヒラマキガイ科、パツラマイマイ科、コハクガイ科が含まれる可能性が高く、樹幹・林間・灌木周辺・落葉下・朽木・水辺などに多くみられる。貝塚3から出土している。

キセルガイタイプ（図版22－2－1）は紡錘形を呈し、キセルガイ科、キセルガイモドキ科、オカチョウジガイ科が含まれる可能性が高い。このタイプは樹幹・林間・落葉下・朽木・水辺などに多く見られる。貝塚2から出土している。

これらは捕獲されるには極めて小さい巻貝であることから、自然に貝層中に混入した可能性が高いことと、遺跡内には河川や池が存在しなかったことから、左古谷貝塚が営まれていた期間の貝塚周辺には、湿気の多い森林の環境が広がっていた可能性が推定される。

フネガイ科　　Arcidae
ハイガイ　　*Tegillarca granosa* (Linnaeus)

貝層の主体を構成する。潮間帯から水深10m程度の泥底に生息する。瀬戸内海の一部と有明海に分布する（波部他　1983）。数多く出土した。貝殻形態の特徴を図1に示す。殻長は平均値32.16mm、最小値22.60mm、最大値52.40mmであり、殻長40mm未満の比較的小さい個体が多いことが特徴である。貝殻成長線分析の結果は、第2節に示す。

フネガイ　　*Arca arabica* Philippi

潮間帯下の岩礁に生息する。貝塚2からわずかに2点出土している。

マルスダレガイ科　　Veneridae
ハマグリ　　*Meretrix lusoria* (Rödding)

内湾砂底域の潮間帯に生息する。貝塚2と貝塚5から1点ずつ出土しているのみである。

オキシジミ　　*Cyclina sinensis* (Gmelin)

内湾砂底域の潮間帯に生息する。貝塚2と貝塚5から1点ずつ出土しているのみである。

シジミガイ科　　Corbiculidae
ヤマトシジミ　　*Corbicula japonica* Prime

汽水域に生息する。貝塚2より総数で3点、最小個体数で2点が出土している。

マシジミ　　*Corbicula* leana Prime

淡水域に生息する。貝塚2より最小個体数で2、貝塚3より1点が出土している。

フナガタガイ科　Trapeziidae
ウネナシトマヤガイ　*Trapezium liratum* (Reeve)

内湾湾奥部の干潟に生息する。貝塚2から合貝が24点、最小個体数で34、貝塚3で最小個体数3、貝塚4で最小個体数4が出土している。

ニッコウガイ科　Tellinidae
ゴイサギガイ　*Macoma tokyoensis* Makiyama

内湾の水深10～30mの泥底に多く生息する。貝塚4から最小個体数で2、総数で3点が出土している。

イタボガキ科　Ostreidae
マガキ　*Crassostrea gigas* (Thinberg)

内湾湾奥部の干潟から岩礁に生息する。左古谷遺跡でハイガイに次いで出土量の多い貝種である。

2　魚上綱 Pisces

硬骨魚綱　目不明　Osteichthyes　ordo. indet.

硬骨魚綱の櫛鱗タイプのウロコが貝塚2から、尾椎が貝塚4から検出されている。目以下の同定は不可能であった。

3 爬虫綱　Reptilia

ヘビ亜目　Ophidia

比較的大型の椎骨が貝塚6から出土している。

4　哺乳綱　Mammalia

目以下の同定が困難な骨幹部破片が貝塚4から出土した。

ウシ　*Bos taurus domesticus* Gmelin

左下顎第3後臼歯が貝塚2から出土した。小窩連結状態であり、3.5～4歳以上の成獣であることが推定される。比較的小型の在来ウシと考えられる。

第2節　貝殻成長線分析

出土した貝類資料のうちハイガイについて保存が良好な個体を正中線に沿って切断し、エッチング後にアセテートセルロースフィルムでレプリカを製作し成長線を観察し、死亡季節（＝採集季節）、成長速度、生息環境などの推定・考察を実施した。当初の分析依頼は40点が予定であったが、保存が劣悪な資料が多かったため分析点数を80点に増加した。ただし、本書入稿までに終了した分析点数は12点に止った。

資料は破壊分析であることから、破壊に先立って灘崎町教育委員会にハイガイの貝合わせを実施して頂いた。二枚貝の成長は微妙で、貝殻ごとにその形状を微妙に異としており、貝どうしを合わせてみると同一個体以外合致することはない。この結果については第3表に示し、合貝の実例を図版22－1に示す。合貝になったもののなかには採集時に既に死亡していたものが含まれる可能性があること

から、貝殻成長線分析では合貝とともに合貝にならなかった貝殻も選択し分析を実施した。

第2表　貝殻成長線分析データ

貝層	分類番号	死亡時期	成長速度	備考
貝塚1	3	不明	不明	保存が不良のため観察が困難。
貝塚1	5	3月16日	やや速い	
貝塚2	U1	不明	不明	保存が不良のため観察が困難。
貝塚2	U7	3月3日（参考値）	やや速い	
貝塚2	U12	3月6日	やや速い	合貝にならなかった個体。
貝塚2	M17	不明	不良	成長線が観察できるものの冬輪の特定が困難であった。
貝塚2	M91	3月9日	やや良好	
貝塚3	12	4月4日	やや不良	
貝塚3	13	4月18日（参考値）	不明	保存が不良のため最終-1年の冬輪が確認できなかった。
貝塚6	14	5月11日	速い	
貝塚6	21	3月17日	不良	
貝塚6	23	不明	不良	成長線の形成が不良で冬輪の認定が困難。

分類番号中のアルファベットMは合貝となった個体、Uは合貝とならなかった個体を示す。

これらの資料のうち一部の資料は成長線がほとんど見えない状態の部分が繰り返し現れる現象が確認された。このような資料は成長線が不明になりやすく、死亡月日の推定が困難な場合が比較的多かった。この現象は潮間帯下に生息し、潮の干満による成長線形成が進行しなかった個体にみられる可能性が高い。つまりかなり水深の深い地点から採集された貝殻である可能性が高いことが推定される。このような貝類の採集は素手による潮干狩りでは困難な可能性が高く、舟などに乗りジョレンのような道具を用いて海水面上から採集を行った可能性も考えられる。

死亡時期についての検討は小池（1983）を踏襲し実施している。つまり、成長線の間隔が狭い部分のうち冬の成長パターンを示す部分を冬輪とし、その中心が日本近海の最低海水温度となりやすい2月15日に仮定することで、その中心から腹縁までの日成長線本数を算定し、冬輪中心～腹縁の日成長線本数＋2月15日＝死亡時期という計算式で死亡時期を推定している。

資料数が少ないものの、貝塚ごとの死亡時期のまとまりは貝塚6を除いて比較的高いことが推定される。貝塚2は死亡時期が3月上旬、貝塚3は4月に収斂するように観察される。この所見については、今後分析資料を増加することによって深めたい。

第3節　左古谷遺跡における生業

出土した動物遺存体は、左古谷遺跡が所在した淡水域から内陸平野・丘陵域に生息したタニシ類や陸産貝類などの動物群と、遺跡が面していた倉敷川河口域に広がった旧児島湾に生息した動物群から構成されている。

遺跡の立地を考慮すると、左古谷集落の集団が直接狩猟・採集活動を行って付近の環境からこれらの動物質資源を捕獲した可能性が高い。ただし、水深10m以下に生息する一部のハイガイやアカニシ、

ゴイサギガイの捕獲には一定水準の採集技術が必要であることから、①左古谷集団が海での貝採集に長けていた．②海岸部の集落から交易などによって入手した．という2つの可能性が考えられる。

ただし、貝層を水洗選別したにもかかわらず魚類の含有量が極めて少ないことから、①の場合であっても左古谷集団は魚類を捕獲処理することが低調であったと考えられ、魚類の捕獲を主目的とするような専業的漁撈民ではなかったものと推定される。

謝辞

灘崎町教育委員会の田嶋正憲氏には資料の提供とともに、様々な御教示・御援助を頂いた。特に貝殻成長線分析と貝合わせの分析は、田嶋氏の御協力なしには不可能であった。

北海道大学吉崎昌一先生、ノートルダム清心女子大学高橋護先生、東北大学文学部教授須藤隆先生、静岡大学佐藤洋一郎先生、九州大学小池裕子先生には出土資料類の研究について御助言を賜った。奈良国立文化財研究所松井章先生には資料の同定、解釈について貴重な御助言を頂いた。同大学学生田中紀子さん、中村友美さん、太田謙君には同定作業と集計を手伝っていただいた。記して感謝いたします。

参考文献

内田　亨他　1972　『谷津・内田　動物分類名辞典』（中山書店）

紀平　肇、松田征也　1990　『琵琶湖、淀川　淡水貝類』（たたら書房）

小池裕子　　1983　「貝類分析」『縄文文化の研究2　生業』（雄山閣）

須藤　隆　　1995　『縄文時代晩期貝塚の研究2　中沢目貝塚Ⅱ』（東北大学文学部考古学研究会）

富岡直人　　1999　「貝類」『考古学と動物学』:pp.99-117

波部忠重、小菅貞男　1967 『標準原色図鑑全集/第3巻　貝』（保育社）

波部忠重、奥谷喬司　1983a　『学研生物図鑑　貝Ⅰ[巻貝]』（学習研究社）

波部忠重、奥谷喬司　1983b　『学研生物図鑑　貝Ⅱ[巻貝、陸貝、イカ、タコほか]』（学習研究社）

Angela von den Driesch 1976 "A Guide to the Mesurement of Animal Bones from Archaeological Sites"
Peabody Museum Bulletin 1, Museum of Archaeology, Harvard University

第３表　左古谷遺跡貝塚出土ハイガイ属性表

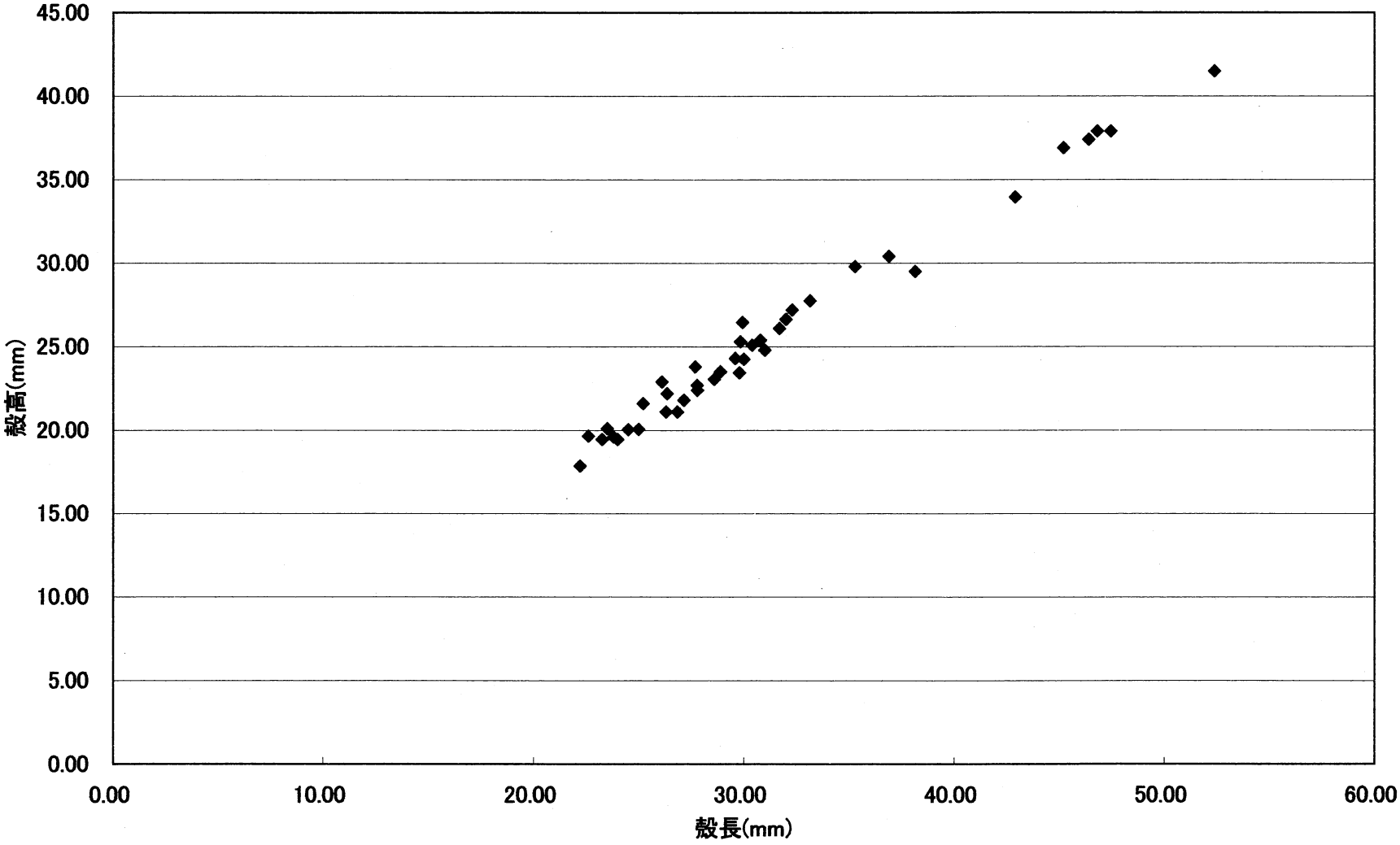
単位：(mm)

出土地点	貝層及び分類番号	殻長 SL	殻高 SH	殻頂～主歯長 UL	殻厚 SD	内面 パティナ	重量 (g)	備　　考
貝塚２	貝２U1	42.90	33.95	3.50	10.51	なし		
貝塚２	貝２U2	32.30	27.20	2.30	10.19	なし		
貝塚２	貝２U3	31.70	26.10	1.90	10.14	なし		
貝塚２	貝２U4	31.00	24.80	2.05	10.40	なし		
貝塚２	貝２U5	30.40	25.10	2.00	10.15	なし		
貝塚２	貝２U6	29.95	26.45	2.30	10.20	なし		
貝塚２	貝２U7	28.90	23.50	2.10	10.08	なし		
貝塚２	貝２U9	28.60	23.05	1.80	9.90	なし		
貝塚２	貝２U8	29.80	23.45	1.50	9.80	なし		
貝塚２	貝２U10	29.60	24.30	2.15	10.20	なし		
貝塚２	貝２U11	27.15	21.80	1.80	9.10	なし		
貝塚２	貝２U12	27.70	23.80	1.75	10.11	なし		
貝塚２	貝２U13	27.80	22.40	2.00	9.60	なし		
貝塚２	貝２U14	27.78	22.70	1.60	10.10	なし		
貝塚２	貝２U15	26.35	22.20	2.20	10.00	なし		
貝塚２	貝２U16	24.50	20.04	1.40	9.10	なし		
貝塚２	貝２U17	26.30	21.10	1.80	9.55	なし		
貝塚２	貝２U18	23.80	19.60	1.70	8.80	なし		
貝塚２	貝２U19	24.00	19.45	1.80	8.60	なし		
貝塚２	貝２U20	25.00	20.05	1.55	9.05	なし		
貝塚２	貝２U21	23.25	19.45	1.80	8.20	なし		
貝塚２	貝２U22	25.20	21.60	1.70	9.45	なし		
貝塚２	貝２U23	22.60	19.65	1.50	7.90	なし		
貝塚２	貝２U24	23.50	20.10	1.60	8.75	なし		
貝塚２	貝２U25	22.20	17.85	1.60	7.45	なし		
貝塚２	貝２M01	52.40	41.50	6.05	18.00	なし		
貝塚２	貝２M02	45.20	36.90	3.15	17.30	あり、全面		
貝塚２	貝２M03	46.80	37.90	4.00	17.30	なし		
貝塚２	貝２M04	46.40	37.40	3.60	17.60	なし		
貝塚２	貝２M05	47.45	37.90	3.80	17.00	あり、全面		
貝塚２	貝２M11	38.15	29.50	2.40	13.35	あり、左側後		
貝塚２	貝２M21	35.30	29.80	2.80	13.05	あり、全面		
貝塚２	貝２M31	36.90	30.40	2.70	12.80	なし		
貝塚２	貝２M41	33.15	27.75	2.30	12.15	なし		
貝塚２	貝２M51	32.00	26.65	2.35	13.15	あり、左側後		殻の厚みが著しい
貝塚２	貝２M61	30.80	25.40	1.90	11.95	あり、全面		
貝塚２	貝２M71	30.00	24.25	2.10	11.15	あり、部分　縁そば		
貝塚２	貝２M81	29.85	25.30	2.30	11.30	あり、左側後側半分		
貝塚２	貝２M91	26.10	22.90	2.15	10.50	あり、うすく全面		
貝塚２	貝２M92	26.85	21.10	2.20	9.50	なし		著しい成長異常
貝塚１	貝１　1	35.60	28.10	2.85	13.15	なし	3.40	
貝塚１	貝１　2	30.45	24.90	1.75	10.75	なし	2.43	
貝塚１	貝１　3	-	25.75	2.35	11.05	なし	2.94	
貝塚１	貝１　4	28.25	24.90	2.10	11.00	なし	2.33	
貝塚１	貝１　5	-	24.35	-	9.90	なし	1.66	
貝塚１	貝１　6	28.45	24.15	1.60	10.85	なし	2.09	
貝塚１	貝１　7	-	23.55	1.75	9.70	なし	1.79	
貝塚１	貝１　8	-	21.90	2.00	9.20	なし	1.63	
貝塚３	貝３　1	48.70	42.75	5.00	19.95	なし	12.46	
貝塚３	貝３　2	42.85	35.15	3.60	15.15	なし	6.80	
貝塚３	貝３　3	-	31.55	3.00	13.56	なし	4.15	
貝塚３	貝３　4	-	32.35	3.60	15.05	なし	5.54	
貝塚３	貝３　5	36.75	29.95	2.40	12.95	なし	5.02	
貝塚３	貝３　6	36.50	29.00	2.45	13.05	なし	3.95	
貝塚３	貝３　7	34.35	28.75	2.50	13.55	なし	4.10	
貝塚３	貝３　8	-	27.00	1.85	11.85	なし	3.47	

出土地点	貝層及び分類番号	殻長 SL	殻高 SH	殻頂～主歯長 UL	殻厚 SD	内面 パティナ	重量 (g)	備　　考	
貝塚3	貝3　9	-	-	-	-	なし		登録ミスのため欠番	
貝塚3	貝3　10	32.40	27.05	1.65	12.15	なし	3.32		
貝塚3	貝3　11	32.30	26.20	2.25	11.80	なし	3.29		
貝塚3	貝3　12	-	27.45	2.35	13.00	なし	2.70		
貝塚3	貝3　13	32.75	25.90	1.45	12.20	なし	3.35		
貝塚3	貝3　14	31.15	26.30	2.30	11.35	なし	3.34		
貝塚3	貝3　15	30.00	24.80	1.95	10.25	なし	2.40		
貝塚3	貝3　16	29.45	24.75	1.85	10.20	なし	2.10		
貝塚3	貝3　17	31.45	25.05	2.25	11.60	なし	2.99		
貝塚3	貝3　18	-	22.00	1.40	9.30	なし	1.29		
貝塚3	貝3　19	24.60	20.85	1.65	8.85	なし	1.31		
貝塚3	貝3　20	25.20	20.50	1.65	8.95	なし	1.25		
貝塚3	貝3　21	24.95	20.40	1.25	8.80	なし	1.14		
貝塚3	貝3　22	24.55	18.90	1.00	8.00	なし	1.20		
貝塚3	貝3　23	30.75	24.45	2.45	12.20	なし	3.25		
貝塚4	貝4　1	51.00	40.90	4.05	17.90	なし	測定不能		
貝塚4	貝4　2	-	-	-	-	なし	測定不能		
貝塚4	貝4　3	-	-	-	-	なし	測定不能		
貝塚4	貝4　4	-	-	-	-	なし	測定不能		
貝塚4	貝4　5	27.65	22.60	2.00	10.40	なし	1.56		
貝塚4	貝4　6	23.35	18.40	1.15	7.70	なし	1.07		
貝塚5	貝5　1	-	-	-	-	なし	測定不能		
貝塚5	貝5　2	25.90	20.40	1.45	8.50	なし	1.15		
貝塚6	貝6　1	52.65	42.15	5.20	19.75	なし	16.40		
貝塚6	貝6　2	45.35	36.15	3.25	16.60	なし	8.59		
貝塚6	貝6　3	42.30	34.80	3.20	15.15	なし	7.96		
貝塚6	貝6　4	41.15	34.05	3.65	16.45	なし	8.52		
貝塚6	貝6　5	38.25	32.35	3.00	14.45	なし	5.90		
貝塚6	貝6　6	35.50	29.55	2.65	13.85	なし	5.20		
貝塚6	貝6　7	36.05	28.35	2.15	12.90	なし	4.05		
貝塚6	貝6　8	-	30.85	2.65	13.15	なし	4.88		
貝塚6	貝6　9	32.60	27.85	2.40	13.40	なし	4.23		
貝塚6	貝6　10	34.85	27.40	2.10	12.00	なし	3.78		
貝塚6	貝6　11	32.65	25.70	1.85	12.35	なし	3.65		
貝塚6	貝6　12	32.90	27.15	2.25	11.60	なし	3.59		
貝塚6	貝6　13	31.60	26.20	1.90	11.90	なし	3.46		
貝塚6	貝6　14	31.25	26.00	2.30	12.60	なし	3.92		
貝塚6	貝6　15	31.35	25.60	1.80	11.70	なし	3.42		
貝塚6	貝6　16	30.90	25.40	2.15	11.50	なし	3.26		
貝塚6	貝6　17	29.75	24.30	1.60	10.90	なし	2.74		
貝塚6	貝6　18	28.80	24.50	2.25	11.75	なし	2.84		
貝塚6	貝6　19	30.35	23.40	1.65	10.90	なし	2.92		
貝塚6	貝6　20	27.45	22.75	1.55	10.35	なし	2.32		
貝塚6	貝6　21	28.40	22.90	1.80	10.50	なし	2.17		
貝塚6	貝6　22	28.35	23.55	1.85	10.45	なし	2.29		
貝塚6	貝6　23	26.50	21.35	1.45	9.55	なし	1.89		
—	平均値	32.16	26.37	2.28	11.66	-	3.72		
—	標準偏差	7.22	5.62	0.86	2.72	-	2.74		

「貝」の後ろは、それぞれの貝殻の出土した貝塚を示す。貝1:貝塚1、貝2:貝塚2、貝3:貝塚3、貝4:貝塚4、貝5:貝塚5、貝6:貝塚6
U:非合せ貝、M:合せ貝、「−」:計測不能

図１　ハイガイ貝殻形態分布図（貝塚２出土資料）



遺構一覧表

竪穴住居

遺構番号	平面形	規模（cm）長軸×短軸	標高(m)	柱穴数	時　期	備　考
竪穴住居1	方形	415×332	15	1（4）	6世紀後半	カマド 煙道 炉 焼土面等有り

土壙

遺構番号	平面形	規模（cm）長軸×短軸×深さ	標高(m)	柱穴数	時　期	備　考
土壙 1	不整五角形	152×136×13	17.15	1	14世紀中頃	
土壙 2	円形	66×66×18	14.18		6世紀後半	拳大の礫20個
土壙 3	長楕円形	128×70×9	14.28	2	6世紀後半	拳大礫数個
土壙 4	台形	77×40×11	14.26	1	6世紀後半	
土壙 5	長楕円形	226×136×21	13.85		14世紀前半～中頃	
土壙 6	台形	55×100×17	13.87		13世紀代	土壙5に切られる
土壙 7	不整楕円形	134×99×11	14.2		14世紀前半～中頃	

ピット

遺構番号	平面形	規模（cm）長さ×幅×深さ	標高(m)	存在形態	時　期	備　考
P 1	不整円形	55×35×15	14.17	群	6世紀後半	
P 2	円形	27×27×15	14.1	群	6世紀後半	
P 3	円形	35×35×18	14.1	群	6世紀後半	
P 4	円形	35×35×30	14.15	群	6世紀後半	
P 5	不整円形	75×67×26	13.94	群	6世紀後半	
P 6	円形	27×27×16	14.72	単独	14世紀代か	

貝塚

遺構番号	平面形	規模（cm）長さ×幅×厚さ	標高(m)	貝種数	時　期	備　考
貝塚 1	円形	50×50×20	17.7	1	16世紀前半～中頃	
貝塚 2	不整長楕円	1430×280×70	18.2	15	15世紀末～16世紀前半	炭化米　動物遺存体
貝塚 3	長楕円	180×65×11	16.6	7	16世紀後半～末	炭化材
貝塚 4	台形	180×170×11	17.3	7	16世紀末	炭化材　動物遺存体
貝塚 5	長楕円形	125×45×8	14.1	7	14世紀前半～中頃	炭化材
貝塚 6	変形楕円形	115×90×10	15	6	14世紀前半～中頃	炭化材　動物遺存体

溝

遺構番号	平面形	規模（cm）長さ×幅×深さ	標高(m)	存在形態	時　期	備　考
溝 1	逆L字形	1160×29×10	14.8	単独	中世	

石列

遺構番号	平面形	規模（cm）長さ×幅	標高(m)	石列数	時　期	備　考
石列 1	直線形	90×28	18.2	4	16世紀代	
石列 2	直線形	270×45	18.1	2	16世紀代	
石列 3	緩い弧形	137×10	16.9	1	16世紀後半	

集石遺構

遺構番号	平面形	規模（cm）長さ×幅×高さ	標高(m)	存在形態	時　期	備　考
集石遺構	長方形	400×230×40	13.97	単独	中世	

土器観察表

単位（cm）

掲載番号	出土遺構	種別	器種	口径	底径	器高	色調	胎土	焼成	備考
1	貝塚1	土師質土器	小皿	9	5.8	2.15	褐灰・黄橙	細砂	良好	
2	貝塚1	土師質土器	小皿	10	5.8	1.7	鈍い橙	細砂	良好	底部ヘラ切り未調整
3	貝塚1	土師質土器	鍋				赤褐・暗赤灰	砂粒	良好	外：荒刷毛目後指頭圧ナデ　内：横刷毛目後ナデ
4	貝塚1	土師質土器	鉢	18.8	10.6	10.5	明黄褐	細砂	良好	
5	貝塚1	白磁	小皿	11.4	6.5	2.75	灰白釉	細砂	良好	景徳鎮窯16世紀代
6	貝塚1	染付	皿		8	2	明青灰釉	精良	良好	景徳鎮窯16世紀前半～中頃
7	貝塚2	土師質土器	小皿	9	6.6	2.1	明黄褐	細砂	良好	煤付着・底部ヘラ切り未調整
8	貝塚2	土師質土器	小皿	9.2		2.3	橙	細砂	良好	
9	貝塚2	土師質土器	皿	11		2.2	橙	細砂	良好	3分の1残
10	貝塚2	土師質土器	皿	13		2.6	明赤褐・黄褐	細砂	良好	4分の1残
11	貝塚2	土師質土器	鍋	26.2			黒褐	細砂	良好	炭化物付着
12	貝塚2	土師質土器	鍋	26.7			橙	砂粒	良好	内外刷毛目後ナデ
13	貝塚2	土師質土器	鍋	28			黒褐	砂粒	良好	内：横刷毛後ナデ　外：荒縦刷毛後指頭圧ナデ
14	貝塚2	土師質土器	鍋	29		12.6	橙	細砂	良好	内：横刷毛後ナデ　外：荒縦刷毛後指頭圧ナデ
15	貝塚2	土師質土器	鍋	31.4			黒灰	砂粒	良好	内：横刷毛後ナデ　外：荒縦刷毛後指頭圧ナデ
16	貝塚2	土師質土器	鍋	34			橙	砂粒	良好	口縁内面にヘラ記号あり
17	貝塚2	土師質土器	鍋	35			浅黄橙	砂粒	良好	外：刷毛目後ナデ　内：横刷毛目
18	貝塚2	土師質土器	鍋	37.8			橙	砂粒	良好	外：黒斑あり
19	貝塚2	土師質土器	鍋	41.8			橙	砂粒	良好	外：黒斑あり
20	貝塚2	土師質土器	鍋				黒褐	砂粒	良好	口縁内面にヘラ記号あり
21	貝塚2	土師質土器	鍋	32.2			灰黄	細砂	良好	口縁部直下に鍔がつく
22	貝塚2	瓦質土器	鍋	30			青灰	砂粒	良好	4分の1残
23	貝塚2	瓦質土器	鍋	36			青灰	砂粒	良好	4分の1残
24	貝塚2	瓦質土器	鍋	38.7			灰	細砂	良好	4分の1残
25	貝塚2	土師質土器	内耳鍋	24.4			黒褐	細砂	良好	3分の1残
26	貝塚2	瓦質土器	内耳鍋	30			灰	砂粒	良好	3分の1残
27	貝塚2	土師質土器	内耳鍋	31.6			黒褐	砂粒	良好	6分の1残
28	貝塚2	土師質土器	内耳鍋	33.4			黄褐	砂粒	良好	4分の1残
29	貝塚2	土師質土器	内耳鍋	35.4			明黄褐	砂粒	良好	3分の2残
30	貝塚2	土師質土器	鉢	11.4	8.2	5.1	黒	砂粒	良好	4分の3残　口縁端部拡張
31	貝塚2	土師質土器	鉢	11.8	11.4	4.5	黒	砂粒	良好	4分の1残　口縁端部拡張
32	貝塚2	土師質土器	鉢	17.4	11.8	8	黒褐	砂粒	良好	2分の1残
33	貝塚2	土師質土器	鉢	20.4		14	浅黄	砂粒	良好	4分の1残　口縁端部拡張
34	貝塚2	瓦質土器	鉢	23.6	14.8	10.5	灰	細砂	良好	3分の2残　口縁部拡張
35	貝塚2	土師質土器	擂鉢	28.4	11.8	11.6	黒褐	細砂	良好	3分の1残　卸し目
36	貝塚2	瓦質土器	擂鉢				灰黄	砂粒	良好	破片　卸し目
37	貝塚2	瓦質土器	擂鉢				暗灰	砂粒	良好	破片　卸し目
38	貝塚2	瓦質土器	羽釜	14.8			青灰	砂粒	良好	3分の1残　把手付く
39	貝塚2	瓦質土器	羽釜	11.9			灰	砂粒	良好	破片
40	貝塚2	瓦質土器	羽釜	13			暗褐	砂粒	不良	破片
41	貝塚2	瓦質土器	羽釜	16.2			暗黄灰	砂粒	良好	破片
42	貝塚2	瓦質土器	羽釜				暗灰	砂粒	不良	破片
43	貝塚2	瓦質土器	羽釜				青灰	砂粒	良好	破片
44	貝塚2	土師質土器	羽釜				灰黄褐	砂粒	良好	破片
45	貝塚2	土師質土器	羽釜				浅黄橙	砂粒	良好	破片
46	貝塚2	土師質土器	甕			21.4	灰黒	砂粒	良好	破片
47	貝塚2	土師質土器	甕				灰黄	砂粒	良好	破片　脚部のみ
48	貝塚2	土師質土器	甲羅				黒褐	砂粒	良好	把手部のみ　穿孔あり
49	貝塚2	備前焼	擂鉢	20	10.4	9.1	赤褐	細砂	良好	3分の1残　内：よく摩滅する
50	貝塚2	備前焼	壺	12			青灰	細砂	良好	4分の1残
51	貝塚2	備前焼	三耳壺	13.3			灰	砂粒	良好	3分の2残
52	貝塚2	備前焼	壺				赤褐	砂粒	良好	破片
53	貝塚2	備前焼	甕				赤褐	砂粒	良好	破片
54	貝塚2	土師質土器	鍋脚部				橙	砂粒	良好	脚部のみ　指頭圧痕顕著
55	貝塚2	土師質土器	鍋脚部				橙	砂粒	良好	脚部のみ　指頭圧痕顕著
56	貝塚2	土師質土器	鍋脚部				黄橙	砂粒	良好	脚部のみ　指頭圧痕顕著
57	貝塚2	土師質土器	鍋脚部				橙	砂粒	良好	脚部のみ　指頭圧痕顕著
58	貝塚2	土師質土器	鍋脚部				鈍い橙	砂粒	良好	脚部のみ　指頭圧痕顕著
59	貝塚2	土師質土器	鍋脚部				淡黄	砂粒	良好	脚部のみ　指頭圧痕顕著
60	貝塚2	土師質土器	鍋脚部				浅黄橙	砂粒	良好	脚部のみ　指頭圧痕顕著
61	貝塚2	土師質土器	鍋脚部				明赤褐	砂粒	良好	脚部のみ　指頭圧痕顕著
62	貝塚2	土師質土器	鍋脚部				橙	砂粒	良好	脚部のみ　指頭圧痕顕著
63	貝塚2	土師質土器	鍋脚部				橙	砂粒	良好	脚部のみ　指頭圧痕顕著
64	貝塚2	土師質土器	鍋脚部				橙	砂粒	良好	脚部のみ　指頭圧痕顕著
65	貝塚2	白磁	皿	11.4	6	3.1	灰白釉	細砂	良好	2分の1残　16世紀代
66	貝塚2	染付	碗		4.6		明緑灰釉	細砂	良好	破片　景徳鎮窯16世紀前半～中葉
67	貝塚2	青磁	碗				灰オリーブ釉	細砂	良好	破片　細蓮弁文15世紀中葉～16世紀前半
68	貝塚2	青磁	碗				明オリーブ釉	細砂	良好	破片　細蓮弁文16世紀前半～中葉
69	貝塚3	土師質土器	椀	11	4.6	3.8	灰白	砂粒	良好	3分の1残
70	貝塚3	土師質土器	椀		3.6		灰白	砂粒	良好	底部2分の1残　高台断面三角
71	貝塚3	土師質土器	椀	8.4	3	3	鈍い橙	砂粒	良好	3分の1残　ヘソ椀
72	貝塚3	土師質土器	椀	10.4	4.4	2.9	浅黄橙	砂粒	良好	3分の2残　ヘソ椀
73	貝塚3	土師質土器	小皿	7.7	5.6	1	橙	細砂	良好	底部糸切り
74	貝塚3	土師質土器	小皿	8.3	5.4	1.7	鈍い橙	細砂	良好	底部ヘラ切り未調整　外面煤付着
75	貝塚3	土師質土器	小皿	8.6	6.6	1.6	鈍い橙	細砂	良好	底部ヘラ切り未調整　内外面煤付着
76	貝塚3	土師質土器	小皿	9	6.4	1.6	黄橙	砂粒	良好	底部ヘラ切り

掲載番号	出土遺構	種別	器種	口径	底径	器高	色調	胎土	焼成	備　　考
77	貝塚3	土師質土器	小皿	9.6	7.6	1.6	鈍い黄橙	砂粒	良好	底部ヘラ切り
78	貝塚3	土師質土器	鉢	27			橙	砂粒	良好	破片
79	貝塚3	土師質土器	擂鉢				鈍い黄橙	砂粒	良好	破片　卸し目
80	貝塚3	瓦質土器	鉢				灰	砂粒	良好	破片
81	貝塚3	土師質土器	鉢				黒褐	砂粒	良好	破片
82	貝塚3	土師質土器	鍋	26.6			黒褐	砂粒	良好	破片
83	貝塚3	土師質土器	内耳鍋	30			黒褐	砂粒	良好	破片
84	貝塚3	土師質土器	内耳鍋	29.6			黒褐	砂粒	良好	破片
85	貝塚3	瓦質土器	羽釜	12.6			暗灰	砂粒	不良	破片
86	貝塚3	瓦質土器	羽釜				暗灰	砂粒	良好	破片
87	貝塚3	土師質土器	甲羅	16.6	12	4	黄褐	砂粒	良好	把手欠　皿部底には叩き目
88	貝塚3	瓦質土器	甕				黄灰	砂粒	良好	外面に帯状の装飾あり
89	貝塚3	亀山焼	甕				灰	砂粒	良好	外：格子目叩き　内：同心円文ナデ消し
90	貝塚3	染付	皿		8.2		灰白釉	緻密	良好	破片　景徳鎮窯16世紀後半
91	貝塚3	染付	皿				灰白釉	緻密	良好	破片　景徳鎮窯16世紀末
92	貝塚3	染付	碗				灰白釉	緻密	良	破片　漳州窯16世紀末～17世紀初頭
93	貝塚3	青磁	碗				灰オリーブ釉	緻密	良	破片　明15世紀～16世紀代
94	貝塚3	青磁	碗				明緑灰釉	緻密	良好	破片　明15世紀～16世紀代
95	貝塚3	青磁	碗				オリーブ灰釉	緻密	良好	破片　明16世紀末
96	貝塚3	肥前陶器	碗	10.8	4.2	6	灰釉	緻密	良好	2分の1残　1590～1610年代
97	貝塚3	瀬戸美濃陶	碗				灰釉	細砂	良好	破片　14世紀～15世紀
98	貝塚4	土師質土器	皿	10.8			浅黄	砂粒	良好	破片
99	貝塚4	土師質土器	皿	10			鈍い黄橙	砂粒	良好	破片
100	貝塚4	土師質土器	皿	9.8			鈍い黄橙	砂粒	良好	破片
101	貝塚4	土師質土器	皿	9.5			鈍い赤橙	砂粒	良好	破片
102	貝塚4	土師質土器	小皿	7.6	5.4	1.2	浅黄	砂粒	良好	3分の1残　底部ヘラ切り
103	貝塚4	土師質土器	小皿	9.8	7.2	1.5	鈍い黄橙	砂粒	良好	3分の2残　底部ヘラ切り
104	貝塚4	土師質土器	椀		3.6		灰白	砂粒	良好	破片
105	貝塚4	土師質土器	椀		4.2		浅黄	砂粒	良好	破片
106	貝塚4	瓦質土器	甲羅				灰	砂粒	良好	皿部を欠損
107	貝塚4	土師質土器	鍋				浅黄橙	砂粒	良好	破片
108	貝塚4	土師質土器	内耳鍋				黒褐	砂粒	良好	破片
109	貝塚4	土師質土器	鉢				褐灰	砂粒	良好	破片
110	貝塚4	土師質土器	鍋				橙	砂粒	良好	破片　鍔が付く
111	貝塚4	土師質土器	羽釜	13			褐灰	砂粒	良好	4分の1残
112	貝塚4	瓦質土器	羽釜				暗灰	砂粒	良	破片
113	貝塚4	李朝陶器	碗		4.2		灰釉	細砂	良好	底部のみ　15世紀～16世紀　砂目
114	貝塚4	染付	碗		5.4		明緑灰釉	緻密	良好	破片　景徳鎮窯16世紀後半
115	貝塚4	青磁	碗				オリーブ灰釉	緻密	良好	破片　漳州窯16世紀後半～17世紀初頭
116	貝塚4	備前焼	杯	10.3	5.5	2.6	赤褐	細砂	良好	完形　底部糸切り
117	土器溜まり1	土師質土器	椀	9.8	4.4	4	黒灰	砂粒	良好	破片
118	土器溜まり1	土師質土器	椀		2.9		灰白	砂粒	良好	底部のみ
119	土器溜まり1	土師質土器	鍋				浅黄橙	砂粒	良好	破片
120	土器溜まり1	土師質土器	鍋				浅黄橙	砂粒	良好	破片
121	土器溜まり1	土師質土器	鍋	24.8			橙	砂粒	良好	破片　鍔が付く
122	土器溜まり1	土師質土器	鍋				橙	砂粒	良好	破片　鍔が付く　爪の痕跡あり
123	土器溜まり2	土師質土器	甕	40			黒褐・橙	砂粒	不良	同一固体破片あり　全面剥離
124	土器溜まり3	土師質土器	擂鉢	31.8	16	12.7	灰黄	砂粒	不良	3分の2残　卸し目　端部拡張
125	土壙1	土師質土器	椀		3.8		明褐灰	砂粒	良	底部のみ
126	石列1	瓦質土器	鍋	33			黒	砂粒	良	5分の1残
127	石列1	土師質土器	羽釜	16.4			鈍い赤橙	砂粒	良好	3分の1残
128	石列1	瓦質土器	羽釜	18.6			暗灰	砂粒	不良	破片
129	石列1	土師質土器	鍋脚部				橙	砂粒	良好	破片
130	石列1	青磁	碗		4.4		灰オリーブ釉	緻密	良好	底部のみ　12世紀～13世紀　劃花文
131	石列3	土師質土器	小皿	6.2	4.2	1	赤橙	細砂	良好	3分の1残
132	石列3	土師質土器	小皿	6.4	4.6	1.1	浅黄	砂粒	良好	2分の1残
133	石列3	土師質土器	内耳鍋	26.6			褐灰	砂粒	良好	3分の1残
134	石列3	土師質土器	鍋脚部				黄橙	砂粒	良好	他に破片50点ほどあり
135	石列3	白磁	皿				灰白釉	緻密	良好	破片　明16世紀末
136	石列3	青磁	碗				オリーブ灰釉	緻密	良好	破片　明16世紀末　細蓮弁文
137	石列3	染付	碗	14.4	4.8	7.5	明緑灰釉	緻密	良好	破片　明16世紀末
138	石列3	瀬戸美濃陶	碗	11.4	4.5	5.9	褐釉	細砂	良好	3分の1残　天目茶碗　16世紀末～17世紀前半
139	石列3	瀬戸美濃陶	碗	11.8			褐釉	細砂	良好	2分の1残　天目茶碗　16世紀末～17世紀前半
140	石列3	肥前陶器	碗	12.6	4.3	6.1	灰釉	細砂	良好	2分の1残　1590～1610年代　胎土目積
141	石列3	土師質土器	甕				黒灰	砂粒	良好	破片
142	A包含層	土師質土器	椀				浅黄橙	砂粒	良好	破片
143	A包含層	土師質土器	椀				浅黄橙	砂粒	良好	破片
144	A包含層	土師質土器	椀				浅黄橙	砂粒	良好	破片
145	A包含層	瓦質土器	擂鉢				灰黄	砂粒	良好	破片
146	A包含層	瓦質土器	擂鉢				黒褐	砂粒	良好	破片
147	A包含層	瓦質土器	内耳鍋				黒褐	砂粒	良好	破片
148	A包含層	青磁	碗		4.2		オリーブ灰釉	緻密	良好	底部　龍泉窯14世紀後半～15世紀中葉
149	A包含層	染付	碗				明緑灰釉	細砂	良好	破片　蓮子碗　景徳鎮窯16世紀前半～中葉
150	A包含層	肥前磁器	碗				灰白釉	緻密	良好	破片　二重網目文18世紀前半
151	A包含層	肥前陶器	碗				黒褐釉	細砂	良好	破片　刷毛目唐津18世紀初頭
152	A包含層	肥前磁器	碗				明オリーブ釉	緻密	良好	破片　佐世保木原窯18世紀前半
153	A包含層	関西陶器	皿	11			灰白釉	細砂	良好	3分の1残　18世紀～19世紀
154	竪穴住居1	須恵器	杯蓋	14.1		4.5	灰・鈍い橙	砂粒	不良	2分の1残　ヘラ削り　ロクロ右
154	竪穴住居1	須恵器	杯身	12.8		4.4	灰・鈍い橙	砂粒	不良	ほぼ完形　ヘラ削り　ロクロ右
155	竪穴住居1	須恵器	杯蓋	14.2			灰	細砂	良好	5分の1残　浅い沈線

掲載番号	出土遺構	種別	器種	口径	底径	器高	色調	胎土	焼成	備　　考
156	竪穴住居1	須恵器	杯蓋	14.4		4.1	青灰	細砂	良好	3分の1残　浅い沈線　ヘラ削り
157	竪穴住居1	須恵器	杯蓋	14.4			灰	砂粒	良好	5分の1残　浅い沈線
158	竪穴住居1	須恵器	杯蓋	14.4		4.8	灰白	細砂	良	2分の1残　ヘラ削り　ロクロ右
159	竪穴住居1	須恵器	杯蓋	14.8			青灰	砂粒	良	4分の1残
160	竪穴住居1	須恵器	杯身	11.8			青灰	砂粒	良好	5分の1残
161	竪穴住居1	須恵器	杯身	11.8			青灰	砂粒	良好	4分の1残
162	竪穴住居1	須恵器	杯身	12.6			灰	細砂	良好	3分の1残
163	竪穴住居1	須恵器	杯身	12		4.3	青灰	細砂	良好	3分の2残　ヘラ削り　ロクロ右
164	竪穴住居1	須恵器	鉢	11		5.5	灰白	砂粒	良	4分の1残　ヘラ削り　浅い沈線　ロクロ右
165	竪穴住居1	須恵器	鉢	12.4			青灰	細砂	良好	3分の1残　回転カキメ　凹線　脚欠
166	竪穴住居1	須恵器	杯身				青灰	細砂	良好	破片　炉2出土
167	竪穴住居1	須恵器	高杯				灰	砂粒	不良	破片
168	竪穴住居1	須恵器	甕				灰	細砂	良好	破片　内：同心円叩き　外：平行叩き・カキメ
169	竪穴住居1	須恵器	甕				灰白	砂粒	不良	破片　内：車輪文叩き　外：平行叩き・カキメ
170	竪穴住居1	土師器	深鉢	30.8	9.2	21.6	明黄褐	砂粒	良好	カマド内　3分の2残　内：指頭圧ナデ　外：平行叩き後指頭圧ナデ　底部凹み底　黒斑・被熱・剥離
171	竪穴住居1	土師器	甕				灰黄	砂粒	良好	破片　炉2出土　調整不良　2次的被熱
172	竪穴住居1	土師器	甑				橙	砂粒	良好	破片　炉1出土　外：刷毛目　内：調整不良　底部近くに穿孔あり
173	竪穴住居1	土師器	高杯				橙	細砂	良好	破片
174	竪穴住居1	土師器	甕				橙	砂粒	良好	破片　カマド内
175	竪穴住居1	製塩土器	鉢形	12.4			明赤褐	砂粒	良好	破片　無文　直口　全面剥離　内外共指頭圧ナデ顕著　搬入品
176	竪穴住居1	製塩土器	鉢形	12.8			橙	砂粒	良好	破片　無文　直口　全面剥離　内外共指頭圧ナデ顕著
177	竪穴住居1	製塩土器	鉢形	14			橙	砂粒	良好	破片　無文　口縁部外板状工具叩き　緩い肩　全面剥離　内外共指頭圧ナデ顕著
178	竪穴住居1	製塩土器	鉢形				灰白	砂粒	良好	破片　無文　口縁部外板状工具叩き　緩い肩　全面剥離　内外共指頭圧ナデ顕著
179	竪穴住居1	製塩土器	鉢形				黒灰	砂粒	良好	破片　無文　口縁部外板状工具叩き　緩い肩　全面剥離　内外共指頭圧ナデ顕著
180	竪穴住居1	製塩土器	鉢形				浅黄	砂粒	良好	破片　無文　直口　全面剥離　内外共指頭圧ナデ顕著
181	竪穴住居1	製塩土器	鉢形				黄褐	砂粒	良好	破片　無文　直口　全面剥離　内外共指頭圧ナデ顕著
182	竪穴住居1	製塩土器	鉢形				淡黄橙	砂粒	良好	破片　無文　緩い肩　全面剥離　内外共指頭圧ナデ顕著
183	竪穴住居1	製塩土器	鉢形	13			褐灰	砂粒	良好	4分の1残　平行叩き　直口　全面剥離　内外共指頭圧ナデ顕著
184	竪穴住居1	製塩土器	鉢形	14.4			橙	砂粒	良好	4分の1残　平行叩き　肩あり　全面剥離　内外共指頭圧ナデ顕著　カマド内
185	竪穴住居1	製塩土器	鉢形				黄褐	砂粒	良好	破片　平行叩き　直口　全面剥離　内外共指頭圧ナデ顕著
186	竪穴住居1	製塩土器	鉢形				橙	砂粒	良好	破片　平行叩き　直口　全面剥離　内外共指頭圧ナデ顕著　カマド内
187	竪穴住居1	製塩土器	鉢形				橙	砂粒	良好	破片　平行叩き　直口　全面剥離　内外共指頭圧ナデ顕著　カマド内と柱穴内出土が接合
188	竪穴住居1	製塩土器	鉢形				橙	砂粒	良好	破片　平行叩き　直口　全面剥離　内外共指頭圧ナデ顕著　カマド内
189	竪穴住居1	製塩土器	鉢形				灰白	砂粒	良好	破片　平行叩き　直口　全面剥離　内外共指頭圧ナデ顕著
190	土壙2	須恵器	杯蓋	13.6		3.3	灰	細砂	良好	2分の1残　外：ナデ・ヘラ削り　内：ナデ　ロクロ右
191	土壙2	須恵器	杯身	11.8			青灰	細砂	良好	4分の1残　外：ナデ・ヘラ削り　内：ナデ
192	土壙2	須恵器	杯身				青灰	細砂	良好	破片
193	土壙2	須恵器	杯身				灰	細砂	良好	口縁部欠　外：ヘラ削り　内：ナデ　ロクロ右
194	土壙2	須恵器	甕				青灰	細砂	良好	破片　外：叩き　内：同心円叩き
195	土壙2	土師器	甕か壺				淡黄	砂粒	良好	底部のみ4分の1残　外：調整不良　内：刷毛目・ナデ
196	土壙2	製塩土器	鉢形				明赤褐・橙	砂粒	良好	破片　無文　直口　全面剥離　内外共指頭圧ナデ顕著
197	土壙2	製塩土器	鉢形				鈍い橙	砂粒	良好	破片　無文　直口　全面剥離　内外共指頭圧ナデ顕著
198	土壙2	製塩土器	鉢形				鈍い赤橙	砂粒	良好	破片　無文　直口　全面剥離　内外共指頭圧ナデ顕著
199	土壙2	製塩土器	鉢形				明黄褐・橙	砂粒	良好	破片　無文　口縁部外板状工具叩き　直口　全面剥離　内外共指頭圧ナデ顕著
200	土壙2	製塩土器	鉢形				鈍い黄橙	砂粒	良好	破片　幅広平行叩き　直口　全面剥離　内外共指頭圧ナデ顕著
201	土壙2	製塩土器	鉢形				褐灰	砂粒	良好	破片　幅広平行叩き　直口　全面剥離　内外共指頭圧ナデ顕著
202	土壙2	製塩土器	鉢形				明黄褐	砂粒	良好	破片　幅広平行叩き　直口　全面剥離　内外共指頭圧ナデ顕著
203	土壙2	製塩土器	鉢形				鈍い黄褐	砂粒	良好	破片　幅広平行叩き　緩い肩　全面剥離　内外共指頭圧ナデ顕著
204	土壙2	製塩土器	鉢形				明黄褐	砂粒	良好	破片　幅広平行叩き　直口　全面剥離　内外共指頭圧ナデ顕著
205	土壙2	製塩土器	鉢形				赤橙	砂粒	良好	破片　幅広平行叩き　緩い肩　全面剥離　内外共指頭圧ナデ顕著
206	土壙3	須恵器	ハソウ				青灰	細砂	良好	破片
207	土壙3	須恵器	甕				灰	細砂	良好	破片
208	土壙3	製塩土器	鉢形				橙	砂粒	良好	破片　無文　直口　全面剥離　内外共指頭圧ナデ顕著
209	土壙3	製塩土器	鉢形				淡黄橙	砂粒	良好	破片　無文　直口　全面剥離　内外共指頭圧ナデ顕著
210	土壙3	製塩土器	鉢形	14			鈍い赤橙	砂粒	良好	5分の1残　格子目叩き　緩い肩　全面剥離　内外共指頭圧ナデ顕著
211	土壙3	製塩土器	鉢形				明赤褐	砂粒	良好	破片　格子目叩き　内湾　内外共指頭圧ナデ顕著
212	土壙3	製塩土器	鉢形				橙	砂粒	良好	破片　平行叩き　直口　内外共指頭圧ナデ顕著
213	土壙4	須恵器	甕				青灰	細砂	良好	破片　外：叩き・カキメ　内：同心円叩き
214	P1	製塩土器	鉢形				黄灰	砂粒	良好	破片　無文　直口　全面剥離　内外共指頭圧ナデ顕著
215	P2	製塩土器	鉢形				赤橙	砂粒	良好	破片　底部　内外共指頭圧ナデ顕著
216	P3	土師器	高杯				橙	細砂	良好	破片
217	P5	製塩土器	鉢形				橙	砂粒	良好	破片　口縁外幅広平行叩き　内面指頭圧ナデ顕著
218	貝塚5	土師質土器	椀	9.8			明黄褐	細砂	良好	4分の1残　ナデ調整
219	貝塚5	土師質土器	皿	11	5	3.2	橙	細砂	良好	3分の1残　ナデ調整
220	貝塚5	土師質土器	椀		4.6		淡橙	細砂	良好	底部　貼り付け高台断面三角形
221	貝塚5	土師質土器	椀		3.2		灰白	細砂	良好	底部　貼り付け高台断面三角形
222	貝塚5	土師質土器	鍋	39			灰白・黒褐	砂粒	良好	4分の1残　内外ともナデ　外面に炭化物・煤付着
223	貝塚5	土師質土器	擂鉢				淡黄	砂粒	良好	4分の1残　内面に卸し目　口縁端部拡張
224	貝塚5	土師質土器	鍋脚部				橙	砂粒	良好	指頭圧ナデ　しぼり
225	貝塚5	白磁	碗				灰白釉	緻密	良好	破片　口禿げ　中国輸入品12世紀～14世紀前半
226	貝塚5	土師質土器	盤		13		褐灰	砂粒	良好	口縁部欠　2分の1残　ナデ・刷毛目調整
227	貝塚5	焼土					橙	砂粒	良好	炉壁ではない
228	貝塚5	須恵器	杯蓋				灰白	細砂	良好	破片　最下層
229	貝塚5	須恵器	杯蓋				灰	細砂	良好	破片　最下層
230	貝塚5	須恵器	甕				青灰	細砂	良好	破片　最下層
231	貝塚5	須恵器	甕				青灰	細砂	良好	破片　最下層
232	貝塚5	製塩土器	鉢形				橙	砂粒	良好	破片　外面に斜平行叩き　直口　被熱・全面剥離　指頭圧痕顕著
233	貝塚6	土師質土器	椀	11.2			浅黄橙	細砂	良好	4分の1残　ナデ調整
234	貝塚6	土師質土器	椀	11.3			鈍い黄橙	細砂	良好	4分の1残　ナデ調整
235	貝塚6	土師質土器	椀	8.6			淡黄	細砂	良好	破片

掲載番号	出土遺構	種別	器種	口径	底径	器高	色調	胎土	焼成	備　　考
236	貝塚６	土師質土器	椀	9			鈍い黄橙	細砂	良好	破片
237	貝塚６	土師質土器	小皿	5.2	4.4	1	鈍い黄橙	砂粒	良好	４分の１残　底部ヘラきり
238	貝塚６	土師質土器	椀		4.2		灰白	砂粒	良好	底部のみ　貼り付け高台は断面三角形
239	貝塚６	土師質土器	椀				鈍い橙	砂粒	良好	破片
240	貝塚６	土師質土器	椀				鈍い橙	砂粒	不良	破片
241	貝塚６	亀山焼	甕	58			浅黄	砂粒	良好	口縁部５分の１残　内外共調整不良
242	貝塚６	備前焼	擂鉢				橙	細砂	良好	底部破片　卸し目
243	貝塚６	肥前磁器	碗		4.5		灰黄釉	細砂	良好	底部　陶胎染付18世紀前半
244	貝塚６	青磁	碗				灰オリーブ釉	緻密	良好	破片　雷文　明15世紀～16世紀前半
245	貝塚６	染付	碗				明緑灰釉	緻密	良好	破片　花卉文　蓮子碗　景徳鎮窯16世紀前半～中葉
246	貝塚６	肥前磁器	碗				灰白釉	緻密	良好	破片　1630～1650年代
247	土壙５	土師質土器	椀	9			橙・灰白	細砂	良好	４分の１残　ナデ調整
248	土壙５	土師質土器	椀	11.4			灰白	細砂	良好	５分の１残　端部丸く収める　ナデ調整
249	土壙５	土師質土器	椀				明灰	細砂	良好	破片
250	土壙５	土師質土器	椀				灰白	細砂	良好	破片
251	土壙５	土師質土器	椀				灰白	細砂	良好	底部破片　高台は断面三角形
252	土壙５	土師質土器	椀		3.4		灰白	細砂	良好	底部のみ　ヘソ椀　底部は窪む
253	土壙５	土師質土器	皿	10.2		2.9	鈍い黄橙	細砂	良好	４分の３残　ナデ調整
254	土壙５	土師質土器	皿	11.8			暗黄褐	砂粒	良好	４分の１残　ナデ調整
255	土壙５	土師質土器	鍋	33			灰白	砂粒	良好	４分の１残　外：横刷毛目・指頭圧ナデ　内：横刷毛目後ナデ　端部丸・中窪み　炭化物・煤付着
256	土壙５	土師質土器	鍋	35.2			黒褐・淡黄	砂粒	良好	６分の１残　外：指頭圧ナデ　内：ナデ　端部丸・中窪み　沈線２条
257	土壙５	土師質土器	鍋	35.4			淡橙	砂粒	良好	６分の１残　外：指頭圧ナデ　内：ナデ　端部丸・面　沈線１条
258	土壙５	土師質土器	鍋	36			灰黄・黄褐	砂粒	良好	４分の１残　内外共刷毛目後ナデ　端部面　沈線１条
259	土壙５	土師質土器	鍋	36.8			黒褐・灰黄	砂粒	良好	６分の１残　内外共刷毛目後ナデ　端部丸・中窪み　沈線１条
260	土壙５	土師質土器	鍋				灰白	砂粒	良好	破片　内外共ナデ調整　端部丸　沈線２条
261	土壙５	土師質土器	鍋				鈍い黄橙	砂粒	良好	破片　内外共ナデ調整　端部丸　沈線１条
262	土壙５	土師質土器	鍋				黒褐・灰白	砂粒	良好	破片　内外共ナデ調整　端部丸　沈線３条
263	土壙５	土師質土器	鍋				灰白・黒褐	砂粒	良好	破片　内外共ナデ調整　端部丸　沈線１条
264	土壙５	土師質土器	鍋				鈍い橙	砂粒	良好	破片　内外共ナデ調整　端部面　沈線２条
265	土壙５	土師質土器	鍋				鈍い黄橙	砂粒	良好	破片　内外共ナデ調整　端部丸　沈線１条
266	土壙５	土師質土器	鍋				灰白・黒褐	砂粒	良好	破片　内外共ナデ調整　端部丸　沈線１条
267	土壙５	土師質土器	鍋				黄灰	砂粒	良好	破片　外：刷毛目後ナデ　内：横刷毛目後ナデ　端部肥厚・丸
268	土壙５	土師質土器	鍋				灰白	砂粒	良好	破片　外：刷毛目後ナデ　内：ナデ　端部肥厚・丸
269	土壙５	土師質土器	鍋				淡黄	砂粒	良好	破片　外：指頭圧ナデ　内：横刷毛目後ナデ　端部丸
270	土壙５	土師質土器	鍋				灰黄	砂粒	良好	破片　内外共ナデ調整　端部丸
271	土壙５	土師質土器	鍋				灰黄・褐灰	砂粒	良好	破片　内外共刷毛目後ナデ調整　端部丸
272	土壙５	土師質土器	鍋				褐灰	砂粒	良好	破片　外：調整不良　内：横刷毛目後ナデ　端部肥厚して丸
273	土壙５	土師質土器	鍋脚部				灰褐	砂粒	良好	脚部のみ　指頭圧痕顕著　シボリ
274	土壙６	白磁	碗		5.6		灰オリーブ釉	緻密	良好	底部破片　内面に劃花文　中国輸入品12世紀～13世紀代　口縁は玉縁
275	土壙７	土師質土器	小皿	6.2	4	1.6	橙	砂粒	良好	４分の１残
276	P6	土師質土器	鍋				橙	砂粒	良好	破片
277	P6	亀山焼	甕				青灰	細砂	不良	破片　内：ナデ　外：格子目叩き
278	溝１	土師質土器	鍋				橙	砂粒	良	破片
279	土器溜まり４	土師質土器	椀	10.2	3.5	3.3	赤橙	砂粒	良好	４分の３残　内外共荒いナデ調整　底部は窪む
280	土器溜まり４	土師質土器	鍋	29.4		11.7	褐灰・鈍い黄	砂粒	良好	２分の１残　外：細刷毛目後指頭圧ナデ　内：細刷毛目　底部不整方向刷毛目　端部面　黒斑あり
281	土器溜まり５	土師質土器	椀	10.5	3.4	3.1	灰白	細砂	良好	完形　内外共ナデ調整　貼り付け高台断面三角形
282	土器溜まり５	土師質土器	椀		3.7		灰白	細砂	良好	底部　貼り付け高台断面三角形
283	土器溜まり５	土師質土器	椀		3.2		浅黄橙	細砂	良好	底部　削り出し高台
284	土器溜まり５	土師質土器	小皿	6	5	1.1	赤橙	細砂	良好	２分の1残　底部ヘラ切り後ナデ
285	土器溜まり５	土師質土器	皿	11.2	5	3.4	浅黄橙	細砂	良好	３分の１残　底部ヘラ切り未調整
286	土器溜まり５	土師質土器	鍋	27			橙	砂粒	良好	３分の１残　内外共刷毛目後ナデ　外面凹凸　端部拡張・面
287	土器溜まり５	土師質土器	鍋	29.9			明黄褐	砂粒	良好	４分の１残　内外共刷毛目後ナデ　外面凹凸　端部肥厚・面　内面中窪み
288	土器溜まり５	土師質土器	鍋	30		13	黒褐・橙	砂粒	良好	完形　外：刷毛目後指頭圧ナデ　内：横刷毛目後ナデ　底部不整方向ナデ外凹凸端部面　煤付着
289	土器溜まり５	土師質土器	鍋	30.8			浅黄橙	砂粒	良好	６分の１残　内外共刷毛目後ナデ　端部肥厚面・中窪み
290	土器溜まり５	土師質土器	鍋	32			鈍い黄橙	砂粒	良好	６分の１残　外：刷毛目・ナデ　内：ナデ　外面凹凸　端部肥厚・面
291	土器溜まり５	土師質土器	鍋	32			鈍い黄橙	砂粒	良好	６分の１残　外：刷毛目・ナデ　内：ナデ　外面凹凸　端部肥厚・丸　中窪み
292	土器溜まり５	土師質土器	鍋	32			橙	砂粒	良好	８分の１残　内外共刷毛目後ナデ　端部面
293	土器溜まり５	土師質土器	鍋	32.3			黄橙	砂粒	良好	６分の１残　外：ナデ・刷毛目　内：ナデ　端部面
294	土器溜まり５	土師質土器	鍋	32.4			橙	砂粒	良好	６分の１残　内外共刷毛目後ナデ　端部肥厚・面
295	土器溜まり５	土師質土器	鍋	32.7			黄橙	砂粒	良好	４分の１残　内外共ナデ調整　外面凹凸　端部肥厚・中窪み　内面中窪み
296	土器溜まり５	土師質土器	鍋	32.6			褐・橙	砂粒	良好	４分の１残　内外共刷毛目後ナデ　底部不整方向刷毛目　端部面　煤付着　外面凹凸
297	土器溜まり５	土師質土器	鍋	32.8		13.3	明黄褐	砂粒	良好	３分の２残　内外共刷毛目・ナデ調整　底部不整方向刷毛目　端部肥厚・面　内面中窪み
298	土器溜まり５	土師質土器	鍋	33			灰白	砂粒	良好	６分の１残　内外共ナデ調整　端部丸　中窪み　沈線３条　土壙５出土品に似る
299	土器溜まり５	土師質土器	鍋	33			明黄褐	砂粒	良好	４分の１残　外：刷毛目・ナデ　内：ナデ　底部不整方向刷毛目　端部丸　外面凹凸
300	土器溜まり５	土師質土器	鍋	33			明黄褐・黒褐	砂粒	良好	４分の１残　内外共ナデ　底部不整方向刷毛目　外面凹凸　端部面　内面中窪み
301	土器溜まり５	土師質土器	鍋	33		15	淡黄・黒褐	砂粒	良好	完形　内外共刷毛目後ナデ　底部不整方向刷毛目　端部肥厚・面　炭化物・煤付着　外面凹凸
302	土器溜まり５	土師質土器	鍋	33.6			鈍い黄橙	砂粒	良好	４分の１残　外：刷毛目後ナデ　内：ナデ　底部不整方向刷毛目　端部肥厚・面　外面凹凸
303	土器溜まり５	土師質土器	鍋	21.2			橙	砂粒	不良	３分の１残　外：ナデ　内：刷毛目後ナデ　外面に貼り付け凸帯　端部面
304	土器溜まり５	亀山焼	甕	35.8			黒	砂粒	不良	口縁部３分の１残　外：ナデ・格子目叩き　内・ヘラ削り・ナデ　端部中窪み
305	土器溜まり５	亀山焼	甕				暗灰	砂粒	良好	底部破片　外面に格子目叩き
306	土器溜まり５	瓦質土器	火鉢				灰	砂粒	良好	破片　外面にスタンプ文
307	土器溜まり５	備前焼	擂鉢				赤褐	砂粒	良好	破片　卸し目
308	土器溜まり５	備前焼	擂鉢				赤橙	砂粒	良好	破片　卸し目
309	土器溜まり５	青磁	碗				オリーブ灰釉	緻密	良好	破片　雷文　明14世紀～15世紀末
310	土器溜まり５	瀬戸美濃陶	碗		4		鉄釉	細砂	良好	底部　天目茶碗16世紀末～17世紀初頭
311	土器溜まり５	土師質土器	カマド	50			赤褐	砂粒	良好	移動式竈　庇部と口縁部は刷毛目及び指頭圧ナデ　全体はナデ　煤付着
312	土器溜まり５	土師質土器	カマド				赤褐	砂粒	良好	移動式竈の底部　ナデ調整　内面に煤付着　剥離する箇所あり
313	集石遺構	土師質土器	椀	11	4	3.7	黄灰	砂粒	良好	３分の２残　内外共ナデ調整　貼り付け高台は断面鈍い三角形一周しない　端部丸
314	集石遺構	土師質土器	椀		4.2		灰白	砂粒	良好	底部　貼り付け高台は断面三角形　粗雑感あり
315	集石遺構	土師質土器	皿	12	4.4	2.3	鈍い黄橙	砂粒	良好	３分の１残　内外共ナデ調整

掲載番号	出土遺構	種別	器種	口径	底径	器高	色調	胎土	焼成	備　　考
316	集石遺構	土師質土器	鍋				鈍い黄橙	砂粒	良好	破片　端部肥厚・丸
317	集石遺構	土師質土器	鍋脚部				鈍い橙	砂粒	良好	破片　指頭圧ナデ・シボリ　煤付着
318	集石遺構	備前焼	擂鉢				赤褐	細砂	良好	口縁部破片　卸し目
319	集石遺構	備前焼	杯	10	5.6	2.9	赤褐	細砂	良好	4分の1残　底部糸切り
320	集石遺構	染付	碗		5.4		灰白釉	細砂	良好	底部破片　福建省漳州窯系16世紀末～17世紀初頭
321	集石遺構	肥前磁器	碗				明緑灰釉	緻密	良好	破片　網目文1630～1650年代
322	B包含層	弥生土器	不明				浅黄橙	砂粒	良好	小片　外面に沈線4条　後期か？
323	B包含層	須恵器	杯蓋	12			青灰	細砂	良好	6分の1残　外：ヘラ削り・ナデ　内：ナデ
324	B包含層	須恵器	杯蓋	13			灰白	砂粒	良好	6分の1残　外：ヘラ削り・ナデ　内：ナデ
325	B包含層	須恵器	杯蓋	13.6		3.7	灰	砂粒	良好	3分の1残　外：ヘラ削り・ナデ　内ナデ　ロクロ右
326	B包含層	須恵器	杯蓋	14.6			青灰	細砂	良好	6分の1残　内外共ナデ
327	B包含層	須恵器	杯蓋	15			灰	細砂	良好	6分の1残　内外共ナデ
328	B包含層	須恵器	杯蓋	15.2			灰	細砂	良好	4分の1残　外ヘラ削り・ナデ　内：ナデ　天井部と口縁部の境に浅い沈線
329	B包含層	須恵器	杯蓋	15.2			灰	細砂	良好	6分の1残　内外共ナデ
330	B包含層	須恵器	杯蓋	15.6		3.5	青灰	砂粒	良好	2分の1残　外：ヘラ削り・ナデ　内：ナデ　ロクロ右
331	B包含層	須恵器	杯身	11.2			灰	砂粒	良好	6分の1残　内外ともナデ
332	B包含層	須恵器	杯身	11.2			灰	砂粒	良好	5分の1残　内外共ナデ
333	B包含層	須恵器	杯身	11.5			灰白	細砂	良好	6分の1残　外：ヘラ削り・ナデ　内ナデ
334	B包含層	須恵器	杯身	12.2			青灰	細砂	良好	5分の1残　外：ヘラ削り・ナデ　内ナデ
335	B包含層	須恵器	杯身	12		4.3	青灰	細砂	良好	3分の1残　外：ヘラ削り・ナデ　内：ナデ　ロクロ右
336	B包含層	須恵器	杯身	12.2		4.1	灰	細砂	良好	2分の1残　外：ヘラ削り・ナデ　内：ナデ　ロクロ右
337	B包含層	須恵器	杯身	13.2			灰	細砂	良好	6分の1残
338	B包含層	須恵器	杯身	13			青灰	細砂	良好	5分の1残
339	B包含層	須恵器	杯身	13.6		4	青灰	細砂	良好	2分の1残　外；ヘラ削り・ナデ　内：ナデ　ロクロ右
340	B包含層	須恵器	高杯				灰	砂粒	良好	杯部破片　口縁部と底部の境に浅い沈線1条
341	B包含層	須恵器	高杯				青灰	細砂	良好	杯部破片
342	B包含層	須恵器	高杯				青灰	細砂	良好	部分的に自然釉がかかる
343	B包含層	須恵器	高杯		10		灰	砂粒	良好	脚底部
344	B包含層	須恵器	高杯		10.8		灰	細砂	良好	脚底部
345	B包含層	須恵器	高杯		14.8		灰	細砂	不良	脚底部　大型である
346	B包含層	須恵器	壺	15.8			青灰	細砂	不良	口縁部6分の1残
347	B包含層	須恵器	壺	19			灰白	砂粒	良好	口縁部6分の1残
348	B包含層	須恵器	壺			3	灰黄	砂粒	良好	頸・胴部2分の1残　外面回転カキメ
349	B包含層	須恵器	短壺蓋	10			灰	細砂	良好	4分の1残　外：ヘラ削り・ナデ　内：ナデ　一部自然釉　端部に面
350	B包含層	須恵器	短頸壺	6.4			青灰	細砂	良好	口縁部4分の1残　自然釉かかる
351	B包含層	須恵器	短頸壺	7.8			青灰	細砂	良好	口縁部4分の1残　自然釉かかる
352	B包含層	須恵器	短頸壺	8.6			青灰	細砂	良好	口縁部4分の1残　自然釉かかる　胴部に浅い沈線
353	B包含層	須恵器	甕				青灰	細砂	良好	口縁部破片
354	B包含層	須恵器	甕				灰	細砂	良好	口縁部破片　端部拡張
355	B包含層	須恵器	甕				明青灰	細砂	良好	口縁部破片　端部拡張
356	B包含層	須恵器	甕				灰	細砂	良好	口縁部破片　外面にヘラ描き沈線
357	B包含層	須恵器	甕				青灰	細砂	良好	胴部破片　内面に車輪文叩き（8本）
358	B包含層	須恵器	甕				灰	細砂	良好	胴部破片　内面に車輪文叩き（4本）　竪穴住居1出土品に似る
359	B包含層	須恵器	ハソウ				青灰	細砂	良好	口縁部破片
360	B包含層	須恵器	脚付壺		11.4		青灰	細砂	良好	脚部破片　端部に段を持つ
361	B包含層	須恵器	提瓶	7.8			灰白	細砂	良好	口縁部2分の1残　ナデ調整　外面には一部自然釉かかる
362	B包含層	須恵器	横瓶	10.6			青灰	砂粒	良好	口縁部4分の1残
363	B包含層	須恵器	壺		10.4		青灰	細砂	良好	胴底部4分の1残
364	B包含層	須恵器	甕				暗青灰	細砂	良好	口縁部破片　口縁部は短く立ち上がり端部がやや拡張し中くぼみに面をもつ　奈良期以降
365	B包含層	須恵器	壺		10.2		灰	砂粒	良好	底部3分の1残　底部糸切り　奈良期以降
366	B包含層	土師器	高杯	14.8			橙	細砂	良好	杯部5分の1残　丁寧な作り　ナデ調整　脚部欠
367	B包含層	土師器	高杯	15			橙	細砂	良好	杯部6分の1残　丁寧な作り　ナデ調整　脚部欠
368	B包含層	土師器	高杯	15			橙	細砂	良好	杯部5分の1残　丁寧な作り　ナデ調整　脚部欠
369	B包含層	土師器	高杯				橙	細砂	良好	脚2分の1残
370	B包含層	土師器	高杯		10		橙	細砂	良好	脚底部6分の1残　丁寧なナデ
371	B包含層	土師器	高杯		10		橙	細砂	良好	脚底部6分の1残　丁寧なナデ
372	B包含層	土師器	高杯		10.6		橙	細砂	良好	脚底部6分の1残　丁寧なナデ
373	B包含層	土師器	甕				橙	砂粒	良好	口縁部破片
374	B包含層	土師器	把手				鈍い黄橙	砂粒	良好	指頭圧ナデ調整　全体的に剥離している　断面肉厚で平坦
375	B包含層	土師器	把手				鈍い黄橙	砂粒	良好	指頭圧ナデ調整　全体的に剥離している　断面肉厚で丸みをもつ
376	B包含層	土師器	把手				橙	砂粒	良好	指頭圧ナデ調整　全体的に剥離している　小振りで丸みをもつ
377	B包含層	土師器	把手				橙	砂粒	良好	指頭圧ナデ調整　全体的に剥離している　扁平である
378	B包含層	製塩土器	鉢形	12			浅黄橙	砂粒	不良	4分の1残　内外共指頭圧ナデ顕著　全面剥離・被熱　緩い肩　無文
379	B包含層	製塩土器	鉢形	14			明赤褐	砂粒	良好	6分の1残　内外共指頭圧ナデ　全面剥離　直口　無文
380	B包含層	製塩土器	鉢形	16.3			黒褐	砂粒	良好	6分の1残　内外共指頭圧ナデ　全面剥離　直口　無文
381	B包含層	製塩土器	鉢形				鈍い黄橙	砂粒	良好	破片　厚手　板状工具叩き　指頭圧痕顕著　肩あり　無文
382	B包含層	製塩土器	鉢形				鈍い橙	砂粒	良好	破片　直口　無文　全面剥離　指頭圧ナデ顕著　板状工具叩き
383	B包含層	製塩土器	鉢形				鈍い赤橙	砂粒	良好	破片　緩い肩　無文　全面剥離　指頭圧痕顕著　板状工具叩き
384	B包含層	製塩土器	鉢形				鈍い橙	砂粒	良好	破片　直口　無文　全面剥離　指頭圧ナデ顕著
385	B包含層	製塩土器	鉢形				鈍い橙	砂粒	良好	破片　直口　無文　全面剥離　指頭圧ナデ顕著
386	B包含層	製塩土器	鉢形				暗褐	砂粒	良好	破片　直口　無文　全面剥離　指頭圧ナデ顕著
387	B包含層	製塩土器	鉢形				橙	砂粒	良好	破片　緩い肩　無文　指頭圧痕顕著　板状工具叩き
388	B包含層	製塩土器	鉢形				暗褐	砂粒	良好	破片　直口　無文　指頭圧痕顕著　器壁厚い
389	B包含層	製塩土器	鉢形				褐・橙	砂粒	良好	破片　直口　無文　指頭圧痕顕著　器壁厚い　板状工具叩き
390	B包含層	製塩土器	鉢形				浅黄橙	砂粒	良好	破片　無文　緩い肩・内湾　指頭圧痕顕著　剥離顕著　板状工具叩き
391	B包含層	製塩土器	鉢形				鈍い黄橙	砂粒	良好	破片無文　緩い肩　指頭圧痕顕著　剥離顕著　板状工具叩き
392	B包含層	製塩土器	鉢形				明黄褐	砂粒	良好	破片無文　直口　指頭圧痕顕著　剥離顕著　板状工具叩き　端部に面
393	B包含層	製塩土器	鉢形				赤褐	砂粒	良好	破片無文　内湾　指頭圧痕顕著　全面剥離
394	B包含層	製塩土器	鉢形	7.8			鈍い黄橙	砂粒	良好	6分の1残　緩い肩　指頭圧痕顕著　剥離顕著　小型
395	B包含層	製塩土器	鉢形	14.4			鈍い黄橙	砂粒	良好	4分の1残　ほぼ直口　平行叩き　内外共指頭圧痕顕著　全面剥離

掲載番号	出土遺構	種別	器種	口径	底径	器高	色調	胎土	焼成	備考
396	B包含層	製塩土器	鉢形	13.2			明赤褐	砂粒	良好	破片　直口　平行叩き　内外共指頭圧痕顕著　全面剥離
397	B包含層	製塩土器	鉢形	15			明赤褐	砂粒	良好	破片　緩い肩　平行叩き　内外共指頭圧痕顕著　全面剥離
398	B包含層	製塩土器	鉢形	14.6			鈍い黄橙	砂粒	良好	破片　直口　平行叩き　内外共指頭圧痕顕著　全面剥離
399	B包含層	製塩土器	鉢形	14			明赤褐	砂粒	良好	破片　内湾　平行叩き　内外共指頭圧痕顕著　全面剥離　器壁厚い
400	B包含層	製塩土器	鉢形	16.2			橙	砂粒	良好	口縁部５分の１残　内湾　平行叩き　内外共指頭圧痕顕著　器壁厚い
401	B包含層	製塩土器	鉢形	9.5			鈍い橙	砂粒	良好	破片　直口　平行叩き　指頭圧痕顕著　全面剥離　やや小振り
402	B包含層	製塩土器	鉢形				赤褐	砂粒	良好	口縁部破片　緩い肩湾　平行叩き　指頭圧痕顕著　全面剥離　器壁薄い
403	B包含層	製塩土器	鉢形				明赤褐	砂粒	良好	口縁部破片　直口　平行叩き　指頭圧痕顕著　全面剥離　器壁厚い
404	B包含層	製塩土器	鉢形				明赤褐	砂粒	良好	口縁部破片　直口　平行叩き　指頭圧痕顕著　全面剥離　器壁厚い
405	B包含層	製塩土器	鉢形				橙	砂粒	良好	口縁部破片　緩い肩　斜平行叩き　指頭圧痕顕著　全面剥離　器壁薄い
406	B包含層	製塩土器	鉢形				明赤褐	砂粒	良好	口縁部破片　緩い肩　斜平行叩き　指頭圧痕顕著　全面剥離　器壁厚い
407	B包含層	製塩土器	鉢形				鈍い黄橙	砂粒	良好	口縁部破片　内湾　斜平行叩き　指頭圧痕顕著　全面剥離　器壁薄い
408	B包含層	製塩土器	鉢形				橙	砂粒	良好	口縁部破片　直口　直斜平行叩き　指頭圧痕顕著　全面剥離　器壁薄い　端部面
409	B包含層	製塩土器	鉢形				黒褐	砂粒	良好	口縁部破片　直口　直斜平行叩き　指頭圧痕顕著　全面剥離　器壁薄い
410	B包含層	製塩土器	鉢形				灰褐	砂粒	良好	口縁部破片　直口　直斜平行叩き　指頭圧痕顕著　全面剥離
411	B包含層	製塩土器	鉢形				浅黄橙	砂粒	良好	口縁部破片　直口　格子目叩き　指頭圧痕顕著　全面剥離　器壁厚い　端部に面
412	B包含層	製塩土器	鉢形				浅黄橙	砂粒	良好	口縁部破片　直口　矢羽根叩き　指頭圧痕顕著　全面剥離　器壁薄い
413	B包含層	製塩土器	鉢形				橙	砂粒	良好	口縁部破片　直口　矢羽根叩き　指頭圧痕顕著　全面剥離　器壁薄い
414	B包含層	製塩土器	鉢形				橙	砂粒	良好	口縁部破片　直口　矢羽根叩き　指頭圧痕顕著　全面剥離　器壁薄い
415	B包含層	製塩土器	鉢形				鈍い赤褐	砂粒	良好	口縁部破片　直口　矢羽根叩き　指頭圧痕顕著　全面剥離　器壁厚い
416	B包含層	製塩土器	鉢形				橙	砂粒	良好	口縁部破片　直口　山形叩き　指頭圧痕顕著　全面剥離　器壁薄い
417	B包含層	製塩土器	鉢形				淡黄	砂粒	良好	口縁部破片　直口　粘土帯貼り付け　指頭圧痕顕著　全面剥離　器壁厚い
418	B包含層	製塩土器	鉢形				橙	砂粒	良好	底部　丸底　指頭圧痕顕著
419	B包含層	製塩土器	鉢形				橙	砂粒	良好	底部　平底　指頭圧痕顕著
420	B包含層	師楽的	椀	11.6		5.1	赤褐・浅黄	砂粒	良好	２分の１残　内外共指頭圧痕顕著　外面には煤・被熱面あり
421	B包含層	師楽的	高杯	12.7			橙	砂粒	良好	杯部４分の１残　内外共指頭圧痕顕著　被熱面・黒斑あり　脚欠
422	B包含層	師楽的	高杯	13			鈍い黄橙	砂粒	良好	杯部３分の１残　内外共指頭圧痕顕著　全面剥離　脚欠
423	B包含層	師楽的	高杯	13			鈍い黄橙	砂粒	良好	杯部４分の１残　内外共指頭圧痕顕著　全面剥離　脚欠
424	B包含層	師楽的	高杯	15			鈍い黄橙	砂粒	良好	杯部２分の１残　内外共指頭圧痕顕著　全面剥離　脚欠
425	B包含層	師楽的	高杯		4.4		橙	砂粒	不良	脚部４分の１残　調整不良　全面剥離
426	B包含層	師楽的	高杯		6.6		赤褐	砂粒	良	脚部４分の１残　ナデ調整
427	B包含層	師楽的	高杯		9		淡黄	砂粒	良	脚部３分の１残　指頭圧ナデ調整　剥離顕著
428	B包含層	土師質土器	椀	9.2			橙	砂粒	良好	４分の1残　内外共ナデ調整　器壁やや厚い
429	B包含層	土師質土器	椀	9.4			浅黄橙	砂粒	良好	３分の1残　内外共ナデ調整
430	B包含層	土師質土器	椀	10.2	5	2.7	浅黄橙	細砂	良好	３分の１残　貼り付け高台断面三角形　内外共ナデ調整　やや雑な感じ
431	B包含層	土師質土器	椀	10.2			浅黄橙	細砂	良好	４分の1残　内外共ナデ調整　器壁やや厚い
432	B包含層	土師質土器	椀	11			橙	細砂	良好	４分の１残　内外共ナデ調整　器壁やや厚い
433	B包含層	土師質土器	椀		4.3		浅黄橙	細砂	良好	底部　貼り付け高台は断面三角形　粗雑感残るナデ調整
434	B包含層	土師質土器	椀		3.6		黒褐	細砂	良好	底部　貼り付け高台は断面三角形　粗雑感残るナデ調整
435	B包含層	土師質土器	椀		3.3		灰黄	細砂	良好	底部　貼り付け高台は断面台形　粗雑感残るナデ調整　高台は一周しない
436	B包含層	土師質土器	椀		4.1		浅黄橙	細砂	良好	底部　貼り付け高台は断面台形　粗雑感残るナデ調整　高台は一周しない
437	B包含層	土師質土器	椀		4		浅黄橙	細砂	良好	底部４分の1残　貼り付け高台は断面長方形　丁寧なナデ調整
438	B包含層	土師質土器	椀		4.9		灰白	細砂	良好	底部４分の1残　貼り付け高台は断面長方形　丁寧なナデ調整
439	B包含層	土師質土器	椀		6		灰白	細砂	良好	底部　貼り付け高台は断面八の字形　丁寧なナデ調整
440	B包含層	土師質土器	小皿	5.8	5	1.1	鈍い橙	細砂	良好	４分の３残　底部ヘラ切り
441	B包含層	土師質土器	小皿	6.2	5.2	1.2	鈍い橙	細砂	良好	４分の３残　底部ヘラ切り未調整
442	B包含層	土師質土器	小皿	6.3	4.6	1.3	鈍い黄橙	細砂	良好	４分の１残　底部ナデ調整
443	B包含層	土師質土器	小皿	7.4	4	1.3	淡黄	細砂	良好	４分の１残　底部ナデ調整
444	B包含層	土師質土器	小皿	6.2	5.4	1	浅黄橙	細砂	良好	２分の１残　底部ヘラ切り
445	B包含層	土師質土器	小皿	5.8	4.4	1.5	橙	細砂	良好	完形　底部ヘラ切り
446	B包含層	土師質土器	小皿	6	5.6	1.1	鈍い黄橙	砂粒	良好	３分の１残　底部ヘラ切り
447	B包含層	土師質土器	小皿	6.8	6.1	1.2	淡橙	砂粒	良好	ほぼ完形　底部ヘラ切り
448	B包含層	土師質土器	小皿	6.4	5.2	1.3	橙	砂粒	良好	３分の１残　底部ヘラ切り
449	B包含層	土師質土器	皿	10	4.6	2.5	浅黄橙	砂粒	良好	３分の１残　底部ナデ調整
450	B包含層	土師質土器	皿		6.3		橙・黄橙	砂粒	良好	底部４分の１残　底部糸切り
451	B包含層	土師質土器	鍋				茶褐	砂粒	良好	破片
452	B包含層	土師質土器	鍋脚部				鈍い橙	砂粒	良好	指頭圧ナデ調整　シボリ
453	B包含層	須恵質土器	鉢				鈍い黄橙	砂粒	不良	東播系捏鉢　最も新しい段階
454	B包含層	備前焼	擂鉢				赤褐	細砂	良好	口縁部破片　ⅣB期　卸し目
455	B包含層	備前焼	擂鉢				灰	細砂	良好	口縁部破片　ⅣB期　卸し目
456	B包含層	備前焼	擂鉢				赤褐	細砂	良好	口縁部破片　卸し目　17世紀中葉　重ね焼き痕残る
457	B包含層	亀山焼	甕	38.6			灰	細砂	良好	口縁部６分の1残　外：ナデ・格子目叩き　内：ヘラ削り・ナデ
458	B包含層	白磁	碗				灰白釉	緻密	良好	底部破片　口縁部は玉縁　削り出し高台　輸入12世紀～13世紀
459	B包含層	白磁	皿	13.8			明灰白釉	緻密	良好	口縁部破片　端反り　景徳鎮窯16世紀代
460	B包含層	青磁	皿		4.8		灰オリーブ釉	緻密	良好	底部３分の２残　碁笥底部無施釉　内面劃花文　同安窯系12世紀中葉～13世紀初頭頃
461	B包含層	青磁	碗				オリーブ黄釉	緻密	良好	口縁部破片　蓮弁文碗　龍泉窯系13世紀中葉～14世紀前半
462	B包含層	青磁	碗				オリーブ灰釉	緻密	良好	口縁部破片　明16世紀後半
463	B包含層	青磁	碗				オリーブ灰釉	緻密	良好	口縁部破片　明16世紀後半
464	B包含層	青磁	碗				オリーブ灰釉	緻密	良好	口縁部５分の１残　細蓮弁文碗　龍泉窯系16世紀後半
465	B包含層	染付	碗				灰白釉	緻密	良好	口縁部破片　内面に二重円圏　景徳鎮窯16世紀末
466	B包含層	染付	皿	10.4	4.1	2.3	灰白釉	緻密	良好	４分の１残　底部碁笥底釉掻き取り　見込みに花卉文　福建省16世紀後半
467	B包含層	染付	碗		4		オリーブ灰釉	緻密	良好	４分の１残　碁笥底　外面に蕉葉文　高台外に籾殻付着　16世紀末～17世紀初頭　福建省
468	B包含層	染付	皿				灰白釉	緻密	良好	蓮子碗　景徳鎮窯16世紀前半～中葉　富山城や一乗谷館址、周匝茶臼山城に類似品あり
469	B包含層	肥前陶器	皿		3.6		藁灰釉	細砂	良好	底部　岸岳系1580～1590年代
470	B包含層	肥前陶器	碗				灰釉	細砂	良好	口縁部破片　16世紀末～17世紀初頭
471	B包含層	肥前陶器	碗				藁灰釉	細砂	良好	底部破片　胎土目積　16世紀末～17世紀初頭
472	B包含層	肥前陶器	皿				灰釉	細砂	良好	底部破片　1600～1630年代
473	B包含層	瀬戸美濃陶	短頸壺	6.8			黒褐釉	細砂	良好	口縁部破片　灰をかぶる　17世紀初頭

その他の出土遺物観察表

石製品

掲載番号	出土遺構	製品名	最大長・径(cm)	最大幅(cm)	最大厚・高(cm)	重量(g)	材質	備考
S 1	貝塚 2	石皿	29	6	5.1	740	砂岩	外面に鑿状工具の掘削痕顕著　和泉産の可能性もあり　中世
S 2	貝塚 2	石皿	10.4	3.4	3.4	140	砂岩	小片　内面よく研磨されている　豊島石製　中世
S 3	貝塚 3	石臼	8.8	6.8	7.7	390	砂岩	小片　豊島石製　中世
S 4	石列 3	石臼	28.5	13.7	9.5	4100	砂岩	2分の1残　豊島石製　鑿状工具の掘削痕顕著　中世
S 5	貝塚 3	剥片石核	7	3	1.2	31.6	サヌカイト	後期旧石器　井島タイプに似る　全体によく風化
S 6	A包含層	剥片	5	6	0.8	23	凝灰岩	後期旧石器
S 7	A包含層	異形石器	2.4	1.9	0.4	2.2	サヌカイト	縄文前期　確認調査時出土　全体的によく風化
S 8	貝塚 2	楔形石器	3.3	1.6	0.6	5.3	サヌカイト	弥生時代　一部折れ
S 9	焼土塊	剥片	6.7	4.3	1.5	31.4	サヌカイト	後期旧石器　全体的によく風化　縞状のもの走る　自然面あり
S 10	B包含層	尖頭器	6.4	3.4	1.2	23	サヌカイト	後期旧石器　よく風化　未製品
S 11	B包含層	削器	3.2	4.8	0.8	14.1	サヌカイト	後期旧石器～縄文
S 12	B包含層	掻器	3.6	2.3	0.9	10	サヌカイト	後期旧石器　よく風化
S 13	B包含層	火打ち石	3.8	1.5	0.6	3	チャート	近世か
S 14	B包含層	調整剥片	2.7	1.7	0.5	1.5	サヌカイト	後期旧石器～縄文　よく風化
S 15	B包含層	調整剥片	2.4	3.6	0.5	4.8	サヌカイト	後期旧石器　よく風化
S 16	B包含層	剥片	3.1	5.2	0.5	9.4	サヌカイト	後期旧石器　よく風化
S 17	B包含層	剥片	6.4	2.7	0.8	12.2	サヌカイト	後期旧石器　よく風化
S 18	B包含層	剥片石核	8.1	5.2	2.9	112.9	サヌカイト	後期旧石器　よく風化　自然面あり
S 19	B包含層	石皿	18.5	16.7	3.9	1855	安山岩	縄文時代
S 20	B包含層	磨石	10.5	6.4	5.7	605	花崗岩	縄文時代　上部欠
S 21	B包含層	砥石	5.2	3	1	44	粘板岩	中世　3面に使用痕あり
S 22	B包含層	砥石	9.6	3	0.5	21	粘板岩	中世　4面に使用痕あり

金属製品

掲載番号	出土遺構	製品名	最大長・径(cm)	最大幅(cm)	最大厚・高(cm)	重量(g)	材質	備考
M 1	貝塚 2	不明	9.9	1	0.3	21.3	鉄	中世　軸部から腕部に分岐し径3㎜の受部2ヶ所設置
M 2	貝塚 2	キセル	4.7	1	1	4.5	青銅	中世　木部を欠損する　貝塚上面
M 3	貝塚 2	古銭	2.45	2.45	0.15	3.2	青銅	大定通宝　初鋳は大定18年（1178）中国金王朝時代
M 4	貝塚 2	古銭	2.2	0.5	0.2	0.8	青銅	寛永通宝　確認調査時出土
M 5	貝塚 3	刀子	6.6	1.3	0.3	8	鉄	中世　切先と茎部を欠く
M 6	貝塚 4	剣	4.3	1.4	0.6	5	鉄	中世　身の途中から欠損　鎬が明瞭
M 7	貝塚 4	釘	4.6	0.5	0.5	5	鉄	中世　頭部と先端欠損　角釘
M 8	貝塚 4	釘	3.9	0.4	0.4	4	鉄	中世　頭部と先端欠損　角釘
M 9	土器溜まり 1	釘	3.5	3.3	1	15	鉄	中世　頭部と先端欠損　角釘
M10	石列3	有袋鑿	14.5	2.5	1	70	鉄	中世　袋部上方を欠損
M11	A包含層	釘	6.8	0.8	0.8	10	鉄	中世　折曲頭の角打釘　先端部を欠損
M12	A包含層	釘	5.3	0.8	0.5	2	鉄	中世　折曲頭の角打釘　頭部・先端部を欠損
M13	竪穴住居 1	鏃	5.2	3.7	0.4	13	鉄	6世紀後半　鏃身のみ　平根系長三角式鏃
M14	竪穴住居 1	鎹	7.9	0.9	0.4	15	鉄	6世紀後半　柄と片方の刃部を欠損
M15	竪穴住居 1	刀子	2.7	1.3	0.3	2	鉄	6世紀後半　切先と茎部を欠損
M16	土壙 2	刀子	4.6	1.3	0.3	5	鉄	6世紀後半　切先と茎部を欠損
M17	B包含層	鏃	9.4	2.6	0.4	10	鉄	6世紀後半　有茎平根系柳葉式鏃
M18	B包含層	古銭	2.35	2.35	0.15	3	青銅	咸平元宝　初鋳は北宋の咸平元年（998）
M19	B包含層	古銭	1.8	1.3	0.15	0.8	青銅	咸平元宝　初鋳は北宋の咸平元年（998）　一部欠損
M20	B包含層	釘	5.6	0.8	0.5	6	鉄	中世　折曲頭の角打釘　先端部を欠損
M21	B包含層	釘	5.2	0.5	0.5	8	鉄	中世　折曲頭の角打釘　頭部・先端部を欠損
M22	B包含層	釘	4.8	0.6	0.6	5	鉄	中世　折曲頭の角打釘　頭部・先端部を欠損

鉄滓

掲載番号	出土遺構	製品名	最大長・径(cm)	最大幅(cm)	最大厚・高(cm)	重量(g)	材質	備考
I 1	竪穴住居 1	鉄滓	4.1	3.4	1.5	25	鉄	6世紀後半

土製品

掲載番号	出土遺構	製品名	最大長・径(cm)	最大幅(cm)	最大厚・高(cm)	重量(g)	焼成	備考
C 1	貝塚 2	土錘	2.8	3	2.8	18.4	良好	中世　一方に浅い溝　片側穿孔
C 2	貝塚 3	土錘	3.6	3.4	2.9	29	良好	中世　一方に浅い溝　両側穿孔
C 3	石列 3	土錘	2.4	2.6	2.7	19	良好	中世　一方に浅い溝　片側穿孔
C 4	B包含層	土製円盤	3.3	2.9	1	10	良好	6世紀後半　碁石状をなす　手捏ね　海浜の遺跡で出土する
C 5	B包含層	土錘	2.4	0.6	0.6	1	良好	6世紀後半　管状土錘　上下を欠損
C 6	B包含層	泥塔	4.9	4.4	1.7	48	良好	中世　空・風・火輪を欠く　両面に梵字　型作り・量産品

貝類の出土量（1）

貝塚番号	ウニミナ				最小個体数	カワアイガイ			最小個体数	マルタニシ	最小個体数	アカニシ					最小個体数	サザエ				最小個体数	ゴマフダマガイ	最小個体数	ヒラマキガイタイプ	キセルガイタイプ	最小個体数	ハイガイ				最小個体数
	殻頂	殻軸	殻唇	受熱		殻頂	殻軸	殻唇				殻頂	殻軸	殻唇	幼殻	受熱		殻頂	殻軸	殻唇	受熱		殻頂		殻頂	殻頂		L	R	合貝点数	受熱	
貝塚1																												49	51			51
貝塚2	1				1	8			8	1	1	8	2			1	8						18	18		1	1	14688	15273	469	1	15273
貝塚3												20	4	1			20						1	1	3		3	92	90			92
貝塚4												8					8	1					2	2				316	303	2		316
貝塚5	4		50	2	4										1		1					1	13	13				124	129			129
貝塚6	1		3		1							2	4		1		4						1	1				636	626			636

貝類の出土量（2）

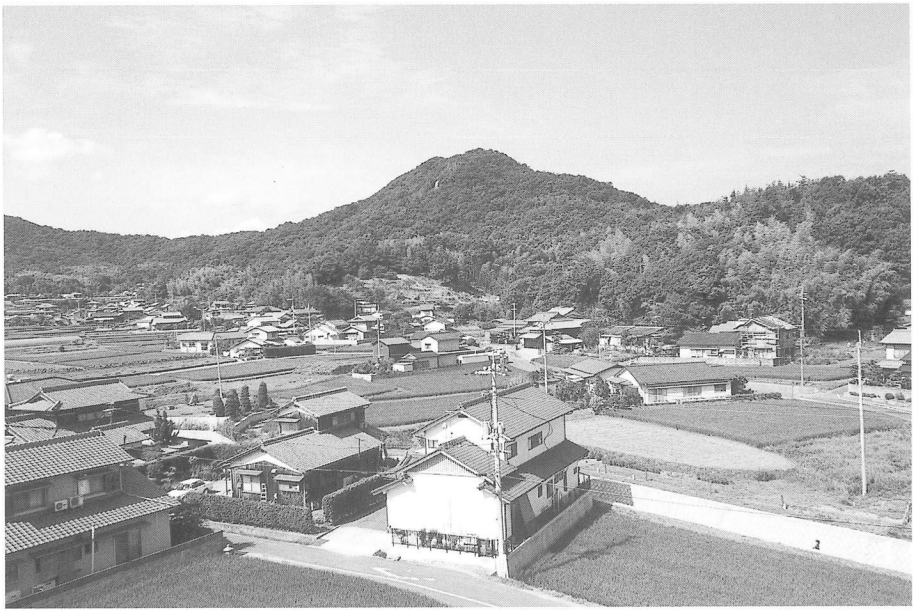
貝塚番号	マガキ					最小個体数	ハマグリ			最小個体数	オキシジミ			最小個体数	マシジミ			最小個体数	ヤマトシジミ			最小個体数	フネガイ			最小個体数	ウネナシトマヤガイ			最小個体数	ゴイサギガイ			最小個体数
	L 殻頂有	L 殻頂無	R 殻頂有	R 殻頂無	黒色		L	R	合貝		L	R	合貝		L	R	合貝		L	R	合貝		L	R	合貝		L	R	合貝		L	R	合貝	
貝塚1																																		
貝塚2	520	225	259	329	18	520		1		1	2	1	1	1	1	2		2	2	1		2	2	1		2	58	61	24	61				
貝塚3	48	61	65	86	2	65														1		1					6	4		6				
貝塚4	47	65	94	94		94																					6	7	3	7	1	2		2
貝塚5	118	143	205	232	10	205	1			1	1		1	1																				
貝塚6	25	30	33	14	1	33					4	5	4	5																				

貝塚出土の遺物重量組成表

単位＝g

貝塚番号	貝殻	動物遺存体		土器	陶磁器		鉄製品	銅製品	石製品	土錘	炭化米	炭化材	種子等	時期	総重量
		哺乳綱他	魚上綱		国産	輸入									
貝塚1	255			998		中国製2点 45.8	7.6							16世紀前半から中葉	1306.4
貝塚2	111671	哺乳綱部位不明 9.57 LR不明骨幹部 ウシ左下顎第3後臼歯1点	綱不明部位不明 0.04 （ウロコ） LR不明11点	26840	備前5点 4570	中国製4点 57.8	21.3	8.5	885.3	18.4	3点 0.01未満	257点 0.63	36点 0.91	15世紀末から16世紀前半	144083.46
貝塚3	1100			9154	肥前1点 166 瀬戸1点 12.4	中国製6点 80.2	26.1		421.6	28.8		3点 5.67		16世紀後半から末	10994.97
貝塚4	4500	哺乳綱部位不明 0.34 LR不明骨幹部6点	硬骨魚綱尾椎 0.01 （切創あり）1点	11790	備前1点 127	中国製2点 43.0 朝鮮製1点 43.1	145.4					10点 0.08	2点 0.01未満	16世紀後半から末	16648.64
貝塚5	1050			1100		中国製1点 3.0	8.0					13点 0.23	1点 0.01未満	14世紀前半から中葉	2161.24
貝塚6	8150	ヘビ亜目椎骨 0.06 1点		340.5	備前1点 42 肥前1点 100	中国製2点 8.7						86点 0.47	3点 0.16	14世紀前半から中葉	8641.89

1．T33 検出状況
（西より）



2．調査地点遠景
（北東より）

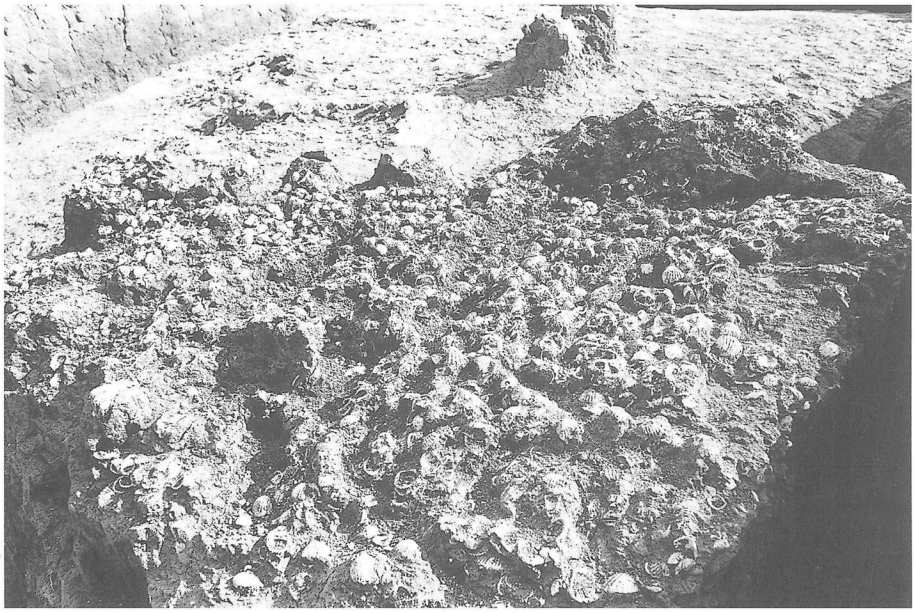
3．A地点調査前状況
（南東より）

図版 2

1．貝塚 1
（南西より）

2．貝塚 2
（北東より）

3．貝塚 3
（北より）

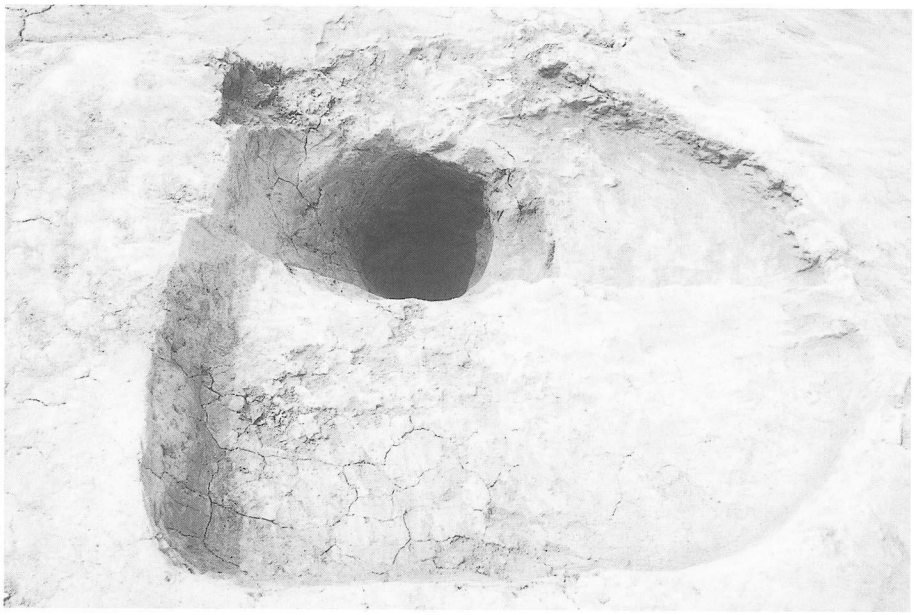


1．貝塚 4
（北より）

2．土器溜まり 1
（南西より）

3．土器溜まり 2
（北東より）

図版 4



1．土壙 1
（南東より）

2．石列 1
（南西より）

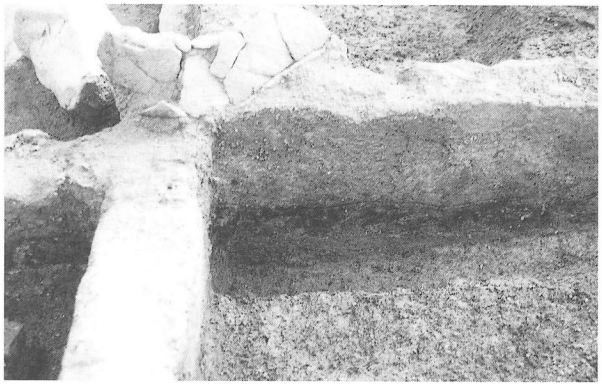
3．石列 2
（北より）

1．B地点調査前状況
（南より）

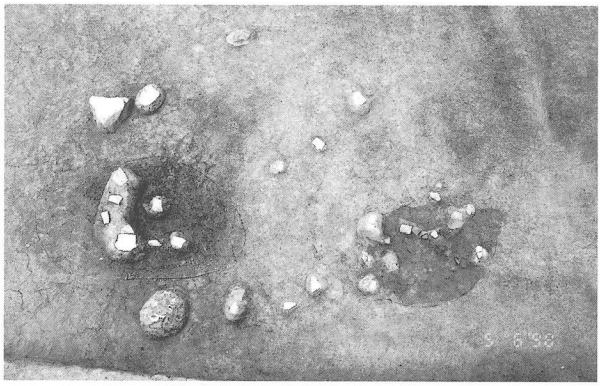
2．焼土塊・面検出状況
（南東より）

3．竪穴住居１検出状況
（北より）

図版 6

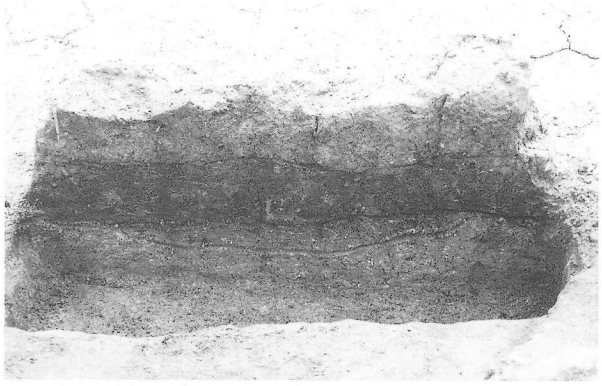


1．カマド縦断面（北より）

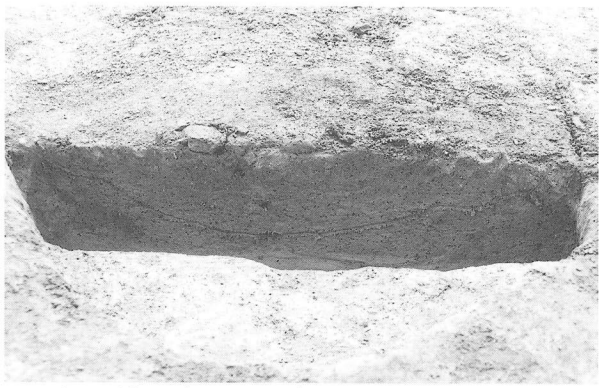


2．炉１・２検出状況（南東より）

3．焼土面検出状況（北東より）

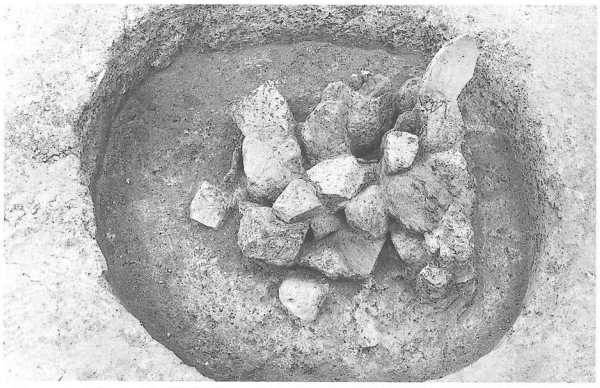


4．炉１断面（北東より）

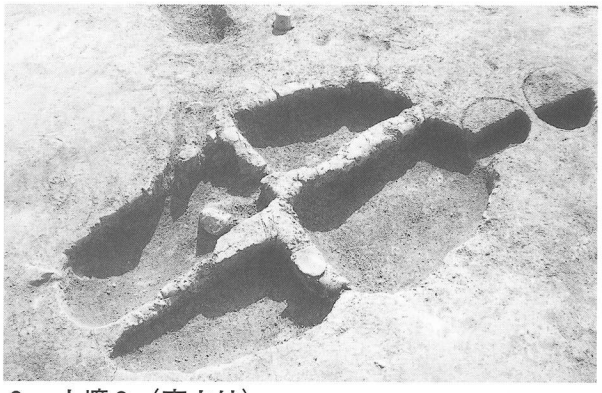


5．炉２断面（北東より）

6．竪穴住居１完掘間近状況（西より）



7．土壙２検出状況（南東より）

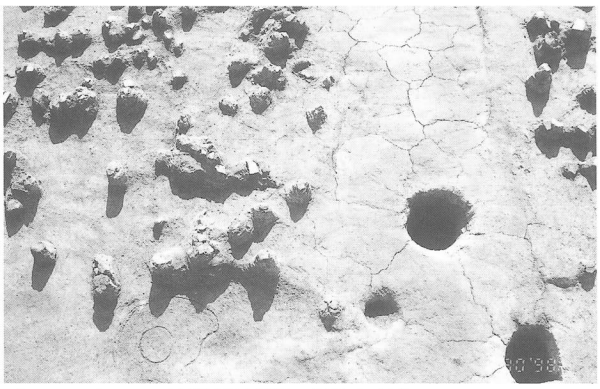


8．土壙３（東より）

１．土壙４（南東より）

２．ピット群検出状況（西より）

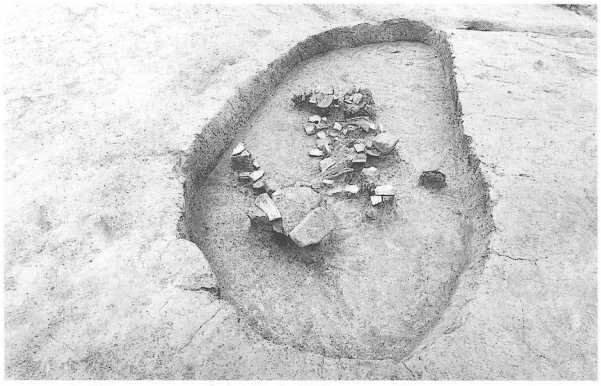
３．Ｐ１～Ｐ３検出状況（南より）



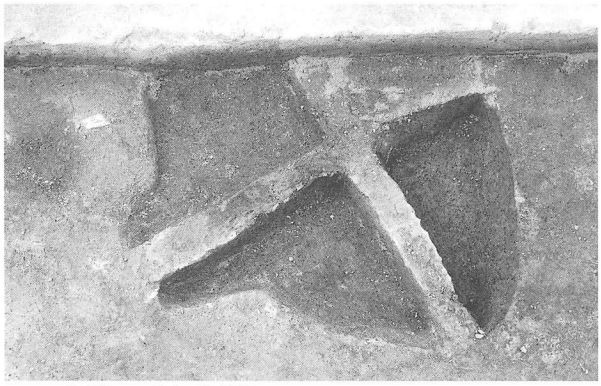
４．Ｐ４・Ｐ５検出状況（東より）

５．貝塚５（東より）

６．貝塚６（東より）



７．土壙５・６（南東より）

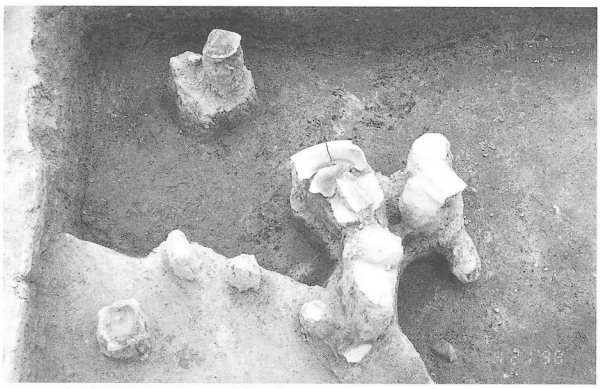


８．土壙７（南より）

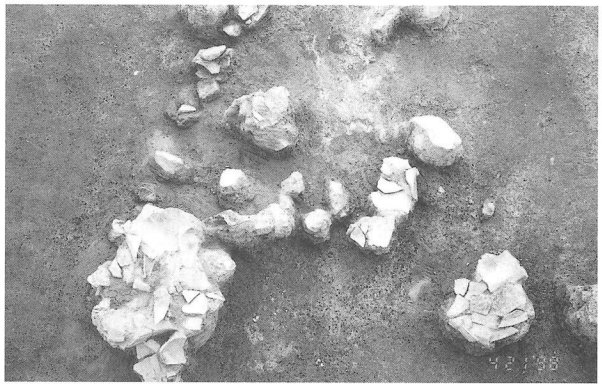
図版 8

1．土壙６遺物出土状況（北東より）

2．溝１検出状況（北西より）

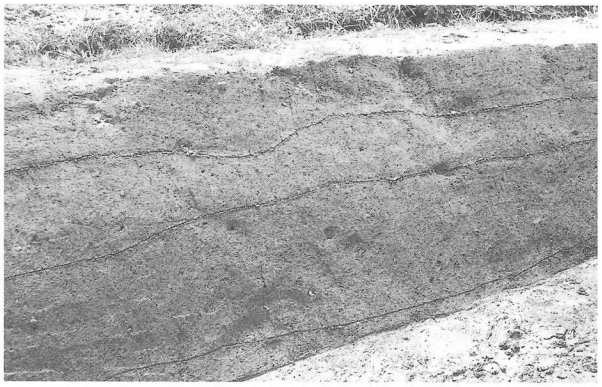


3．土器溜まり４（北東より）

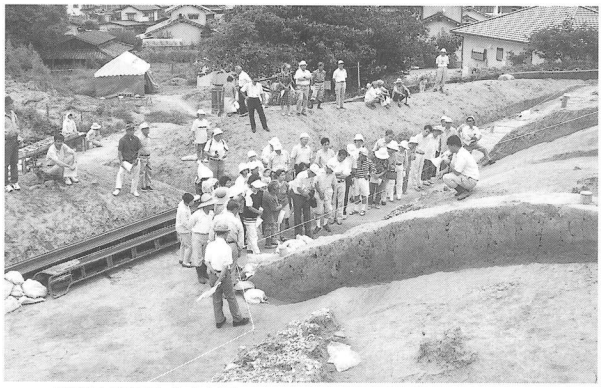


4．土器溜まり５（東より）

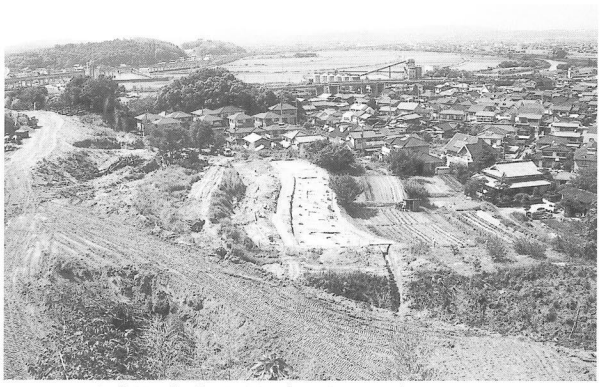
5．集石遺構（北西より）



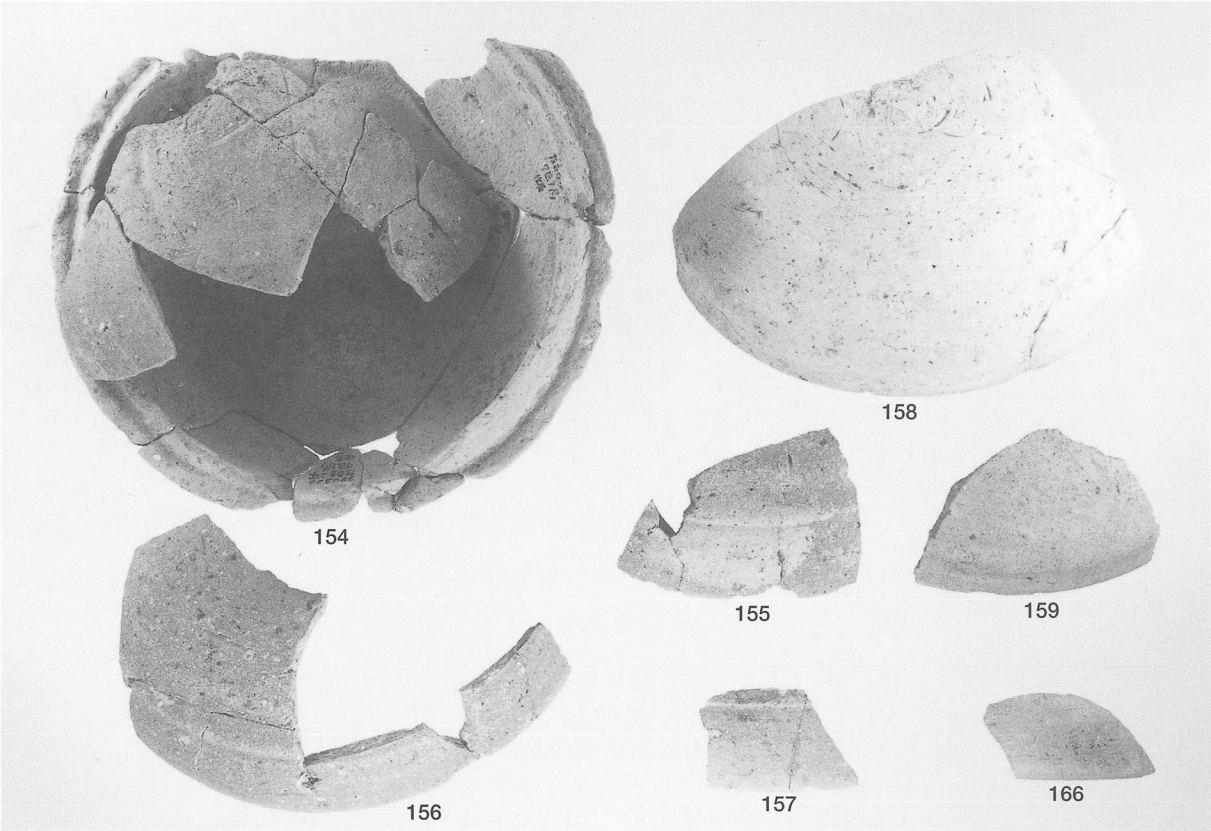
6．Ｂ地点Ａ－Ａ’土層断面（北より）



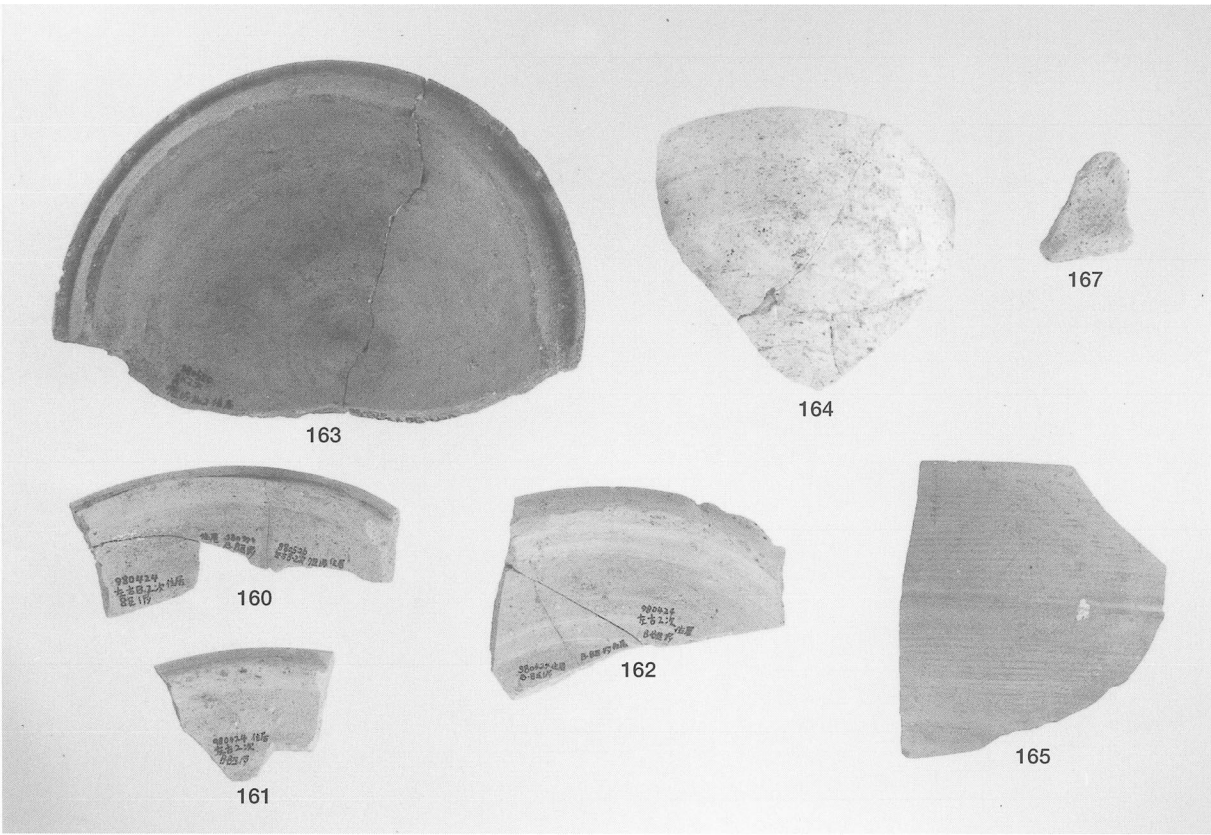
7．現地説明会風景



8．Ｂ地点調査後遠景（南東より）



1．竪穴住居１出土遺物（１）



2．竪穴住居１出土遺物（２）